

秋田県文化財調査報告書第299集

桐内 C 遺跡

— 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ —

2000・3

秋田県教育委員会

桐^{きり}内^{ない} C 遺跡

— 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ —

2000・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には、縄文時代をはじめとする4,500箇所を超える埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これらの文化遺産は、私たちの祖先が自然環境と歴史の中で創造してきたものであります。これらは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめることにもなると思われ、現代に生きる私たちは、これらを長く後世に伝え残していくことが重要な責務であると考えます。

一方、現在の生活を豊かにし快適な生活を送るための地域開発が大規模に行われています。森吉町には、洪水調節と利水事業を目的とした森吉山ダムが建設されることになりました。

本教育委員会では、埋蔵文化財保護の一方法として、森吉山ダム工事に先立つ発掘調査を実施して、遺跡の記録保存に努めることに致しました。平成10年度に桐内C遺跡の発掘調査を実施したところ、縄文時代の集落跡であることがわかりました。

本報告書は、その成果をまとめたものです。本書が、郷土の歴史や文化財を研究する資料として多くの方々にご利用いただければ幸いです。

最後に、本調査の実施及び報告書の刊行に際し、御協力をいただきました建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所、森吉町教育委員会をはじめ関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例 言

1. 本報告書は平成10（1998）年度に行われた秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る桐内C遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本報告書は、秋田県教育委員会が発行する森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては第3冊目にあたる。
3. 調査結果については、秋田県埋蔵文化財調査報告会資料等でも公表してきたが、本書の記載内容と相違のある場合、本書によって訂正したものとする。
4. 第5章「自然科学的分析」は、株式会社古環境研究所に委託した。
5. 本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行50,000分の1「米内沢」「大葛」「鷹巣」「大館」、同じく25,000分の1「阿仁前田」「太平湖」、及び建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所作成1,000分の1「森吉山ダム貯水池平面図」である。
6. 本報告書における土層注記の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』（1997年版）によった。
7. 本報告書の石質に関しては、日本第四紀学会会員佐藤三七氏の鑑定による。
8. 本報告書の巨礫・大礫・中礫の区別は、地学団体研究会編集『新版 地学事典』（1997年版）により巨礫（粒径256mm以上）・大礫（粒径64～256mm）・中礫（粒径4～64mm）とした。
9. 本報告書の執筆・編集は河田弘幸が行った。

凡 例

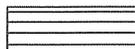
1. 本報告書に収録した遺構実測図の方位は、真北を示す。真北と磁北の偏角は、西に8°10′である。
2. 本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は、1/40を原則とし、適宜1/80と1/20を用いている。遺物の縮尺は、原則として、遺構内出土遺物は1/2、遺構外出土遺物は1/3とした。挿図にはそれぞれスケールを付している。
3. 挿図中の遺物実測図には、器種を問わず通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。
4. 土層注記は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）を、遺構堆積土にはアラビア数字（1・2・3・・・）を用いた。
5. 遺構番号は検出順とし、その種別を問わず東側調査区には01より、西側調査区には1Bより連番を付したが、精査過程において遺構でないと判断したものは欠番となっている。
6. 本報告書で各遺構・遺物に付している略記号は、以下の通りである。

遺構… S I	竪穴住居跡	S K	土坑	S R	土器埋設遺構	S Q N	石囲炉
	S N	焼土遺構	S K P	柱穴様ピット	S X	性格不明遺構	
遺物… R P	土器	R Q	石器及び剥片	S	礫		
7. 挿図に用いたスクリーントーンは以下の通りである。
これ以外は挿図中に示す。

焼土



地山



アスファルト



8. 石器の分類は、鈴木道之助『図録・石器入門事典（縄文）』（1994年版）によった。

目 次

序	
例言	ii
凡例	ii
目次	iii
挿図目次	iv
表目次	iv
図版目次	iv
第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織と構成	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の位置と立地	6
第2節 遺跡の歴史的環境	7
第3章 発掘の概要	
第1節 遺跡の概観	9
第2節 調査の方法	9
第3節 調査経過	10
第4章 調査の記録	
第1節 基本層位	14
第2節 東側調査区検出遺構と出土遺物	14
1 検出遺構の概要	14
2 遺構と出土遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 土坑	21
(3) 土器埋設遺構	35
(4) 石囲炉	37
(5) 焼土遺構	37
(6) 柱穴様ピット	37
(7) 性格不明遺構	40
第3節 西側調査区検出遺構と出土遺物	40
1 検出遺構の概要	40
2 遺構と出土遺物	40
(1) 竪穴住居跡	40
(2) 土坑	43
(3) 土器埋設遺構	49
(4) 柱穴様ピット	51
第4節 東側調査区遺構外出土遺物	51
1 土器	51
2 土製品	54
3 石器	54
4 石製品	56
第5節 西側調査区遺構外出土遺物	56
1 土器	56
2 石器	56
第5章 自然科学的分析	
第1節 桐内C遺跡出土炭化材の樹種同定	95
第2節 桐内C遺跡における放射性炭素年代測定	97
第6章 まとめ	99
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	3
第2図	周辺の遺跡分布図	4
第3図	桐内A・B・C・D、桐内沢遺跡	12
第4図	グリッド設定図	13
第5図	東側調査区・西側調査区基本土層	15
第6図	東側調査区遺構配置図	16
第7図	西側調査区遺構配置図	17
第8図	S I 36竪穴住居跡	19
第9図	S I 36石囲炉及び出土遺物	20
第10図	S I 38竪穴住居跡	22
第11図	S I 38竪穴住居跡出土遺物(1)	23
第12図	S I 38竪穴住居跡出土遺物(2)	24
第13図	S K 01土坑及び出土遺物	25
第14図	S K 01土坑出土遺物	26
第15図	S K 02・06土坑及び出土遺物	28
第16図	S K 08土坑及び出土遺物	29
第17図	S K 10・11土坑及びS K 11土坑出土遺物	31
第18図	S K 11土坑出土遺物	32
第19図	S K 12・18土坑及びS K 18土坑出土遺物	34
第20図	S K 19・20・22・28土坑及びS K 28出土遺物	36
第21図	S R 16・29土器埋設遺構及び出土遺物	38
第22図	S R 37土器埋設遺構、S Q N 13石囲炉及び出土遺物	39
第23図	S N 09・23焼土遺構、S K P 34柱穴様ピット	41
第24図	S X 17性格不明遺構	42
第25図	S I 14B竪穴住居跡及び出土遺物、S K P 33B柱穴様ピット	44
第26図	S I 15B竪穴住居跡	45
第27図	S I 16B竪穴住居跡	46
第28図	S K 2 B・34 B・3 B土坑及び出土遺物	48
第29図	S K 4 B・11 B・12 B・13 B土坑及びS K 4 B出土遺物	50
第30図	S R 1 B土器埋設遺構及び出土遺物、S K P 19 B・21 B柱穴様ピット	52
第31図	東側調査区遺構外出土遺物(1)	57
第32図	東側調査区遺構外出土遺物(2)	58
第33図	東側調査区遺構外出土遺物(3)	59
第34図	東側調査区遺構外出土遺物(4)	60
第35図	東側調査区遺構外出土遺物(5)	61
第36図	東側調査区遺構外出土遺物(6)	62
第37図	東側調査区遺構外出土遺物(7)	63
第38図	東側調査区遺構外出土遺物(8)	64
第39図	東側調査区遺構外出土遺物(9)	65
第40図	東側調査区遺構外出土遺物(10)	66
第41図	東側調査区遺構外出土遺物(11)	67
第42図	東側調査区遺構外出土遺物(12)	68
第43図	東側調査区遺構外出土遺物(13)	69
第44図	東側調査区遺構外出土遺物(14)	70

第45図	東側調査区遺構外出土遺物(15)	71
第46図	東側調査区遺構外出土遺物(16)	72
第47図	東側調査区遺構外出土遺物(17)	73
第48図	東側調査区遺構外出土遺物(18)	74
第49図	東側調査区遺構外出土遺物(19)	75
第50図	東側調査区遺構外出土遺物(20)	76
第51図	東側調査区遺構外出土遺物(21)	77
第52図	東側調査区遺構外出土遺物(22)	78
第53図	東側調査区遺構外出土遺物(23)	79
第54図	東側調査区遺構外出土遺物(24)	80
第55図	東側調査区遺構外出土遺物(25)	81
第56図	東側調査区遺構外出土遺物(26)	82
第57図	東側調査区遺構外出土遺物(27)	83
第58図	東側調査区遺構外出土遺物(28)	84
第59図	東側調査区遺構外出土遺物(29)	85
第60図	東側調査区遺構外出土遺物(30)	86
第61図	東側調査区遺構外出土遺物(31)	87
第62図	東側調査区遺構外出土遺物(32)	88
第63図	東側調査区遺構外出土遺物(33)	89
第64図	東側調査区遺構外出土遺物(34)	90
第65図	東側調査区遺構外出土遺物(35)	91
第66図	東側調査区遺構外出土遺物と西側調査区遺構外出土遺物(36)	92

表 目 次

第1表	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	3
第2表	周辺の遺跡	5
第3表	出土石器観察表(1)	93
第4表	出土石器観察表(2)	94

図 版 目 次

図版1	桐内C遺跡全景
図版2	調査前遺跡の全景・検出遺構(1)
図版3	検出遺構(2)
図版4	検出遺構(3)
図版5	検出遺構(4)
図版6	遺構内出土遺物(1)
図版7	遺構内出土遺物(2)
図版8	遺構内出土遺物(3)
図版9	遺構外出土遺物(1)
図版10	遺構外出土遺物(2)
図版11	遺構外出土遺物(3)
図版12	遺構外出土遺物(4)
図版13	遺構外出土遺物(5)
図版14	遺構外出土遺物(6)
図版15	遺構外出土遺物(7)
図版16	遺構外出土遺物(8)
図版17	遺構外出土遺物(9)
図版18	遺構外出土遺物(10)
図版19	遺構外出土遺物(11)
図版20	遺構外出土遺物(12)
図版21	遺構外出土遺物(13)
図版22	出土炭化材顕微鏡写真(1)
図版23	出土炭化材顕微鏡写真(2)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

岩手県二戸郡安代町田山に源を発し、秋田県北部を東から西へ流れる米代川は、31の支流を合わせながら日本海に注ぐ県下二大河川の一つである。この米代川が貫流する花輪・大館・鷹巣の各盆地
下流付近は、山地が迫っていて、川幅も狭い。中でも、鷹巣盆地の七座神社付近から荷上場にかけて
の地域は川幅が狭く、北流する阿仁川と南流する藤琴川の合流地点でしばしば大洪水に見舞われてい
る。

1972（昭和47）年7月3日、北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本各地に甚大な被害
をもたらした。本県でも、この集中豪雨による被害が大きく、県に天災融資法と激甚災害法が適用
されるほどであった。また、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町には災害救助法
が適用された。この中で、特に被害が大きかったのが、米代川下流に位置する能代市と二ツ井町であ
った。

翌年、この大洪水を機に「米代川工事实施基本計画」の見直しが行われ、上流ダム群により水量を
調節することとなった。この上流ダム群の一つとして阿仁川の右支流、小又川に建設されることにな
ったのが森吉山ダムである。森吉山ダムは、1988（昭和63）年に、「森吉山ダムの建設に関する基
本計画」が公示され、水量調整のほか、灌漑用水・水道用水の供給、水力発電等を目的とする多目的
ダムである。

1992（平成4）年、森吉山ダムによって水没する当該地域に関して、埋蔵文化財の保護を目的と
した秋田県教育委員会による遺跡分布調査が開始された。当初、新しく確認された遺跡は6遺跡であ
ったが、その後遺跡範囲確認調査をしていく中で、新しく発見された遺跡が増え、現在貯水予定地周
辺地域では60遺跡を数えている。

1994（平成6）年、第12回日本ジャンボリーが森吉山麓で開催されることが決定した。これに伴
い、中心会場のノロ川への幹線道路として、森吉山ダムの工事用道路を一部供用することとなり、秋
田県教育委員会と森吉町教育委員会によって、深渡遺跡の発掘調査が実施され、記録保存が図られて
いる。

桐内C遺跡の発掘調査は、遺跡総面積14,000㎡のうち、8,000㎡を今年度行い、残り6,000㎡を翌
年度に行う予定であった。しかし、遺構の検出が少なく、森吉山ダム工事事務所との協議の上調査面
積を2,000㎡増やし、10,000㎡とした。その後の発掘調査でも遺構が検出されず、遺跡の西側約
2,500㎡を2mおきにトレンチ調査をし、遺跡総面積の14,000㎡を調査した。

参考文献

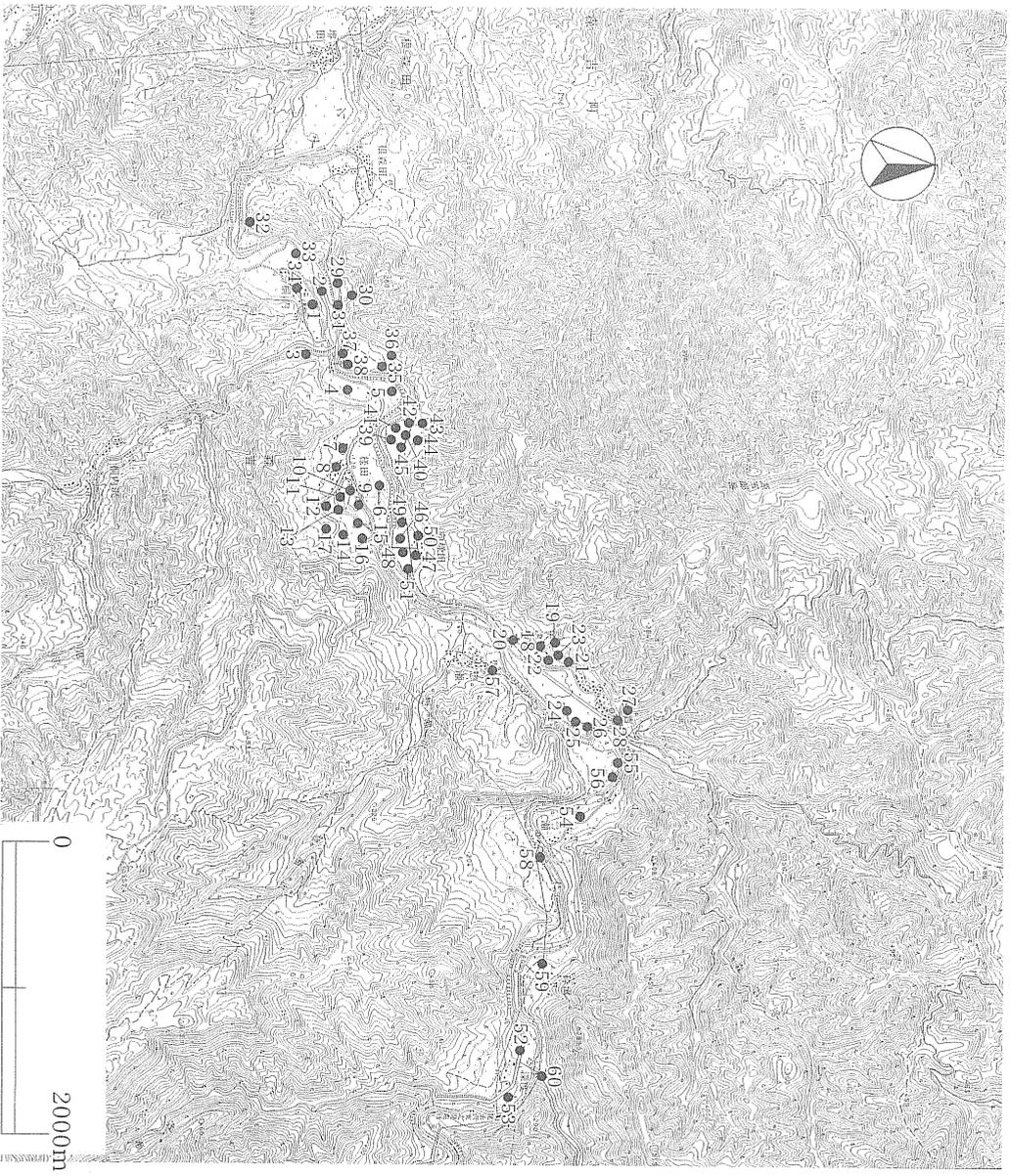
無明舎 『秋田県昭和史』 1989（平成元）年

秋田魁新報社 『ダムに沈む「むら」森吉町森吉』 モリトピア選書1 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事
事務所 1992（平成4）年

- 川村公一 『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』 モリトピア選書2 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993（平成5）年
- 森吉町教育委員会 『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1996（平成8）年
- 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第251集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集 1995（平成7）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集 1996（平成8）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会 『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』 1999（平成11）年

第2節 調査の組織と構成

遺 跡 名	桐内C遺跡（略号2KNC）
所 在 地	秋田県北秋田郡森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外
調 査 期 間	1998（平成10）年5月12日～9月24日
調 査 目 的	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調 査 面 積	14,000㎡
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	杉 渕 馨（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室長） 三 嶋 隆儀（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事） 河 田 弘幸（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事） 牧 野 賢美（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事） 高 橋 俊幸（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員） 松 尾 睦子（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員）
総 務 担 当 者	菅 原 晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査） 荒 井 信行（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査） 佐 藤 幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事：現秋田県教育庁福利課主事） 佐 々 木 敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） 八 文 字 隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調 査 協 力 機 関	建設省東北地方局森吉山ダム工事事務所 森吉町 森吉町教育委員会

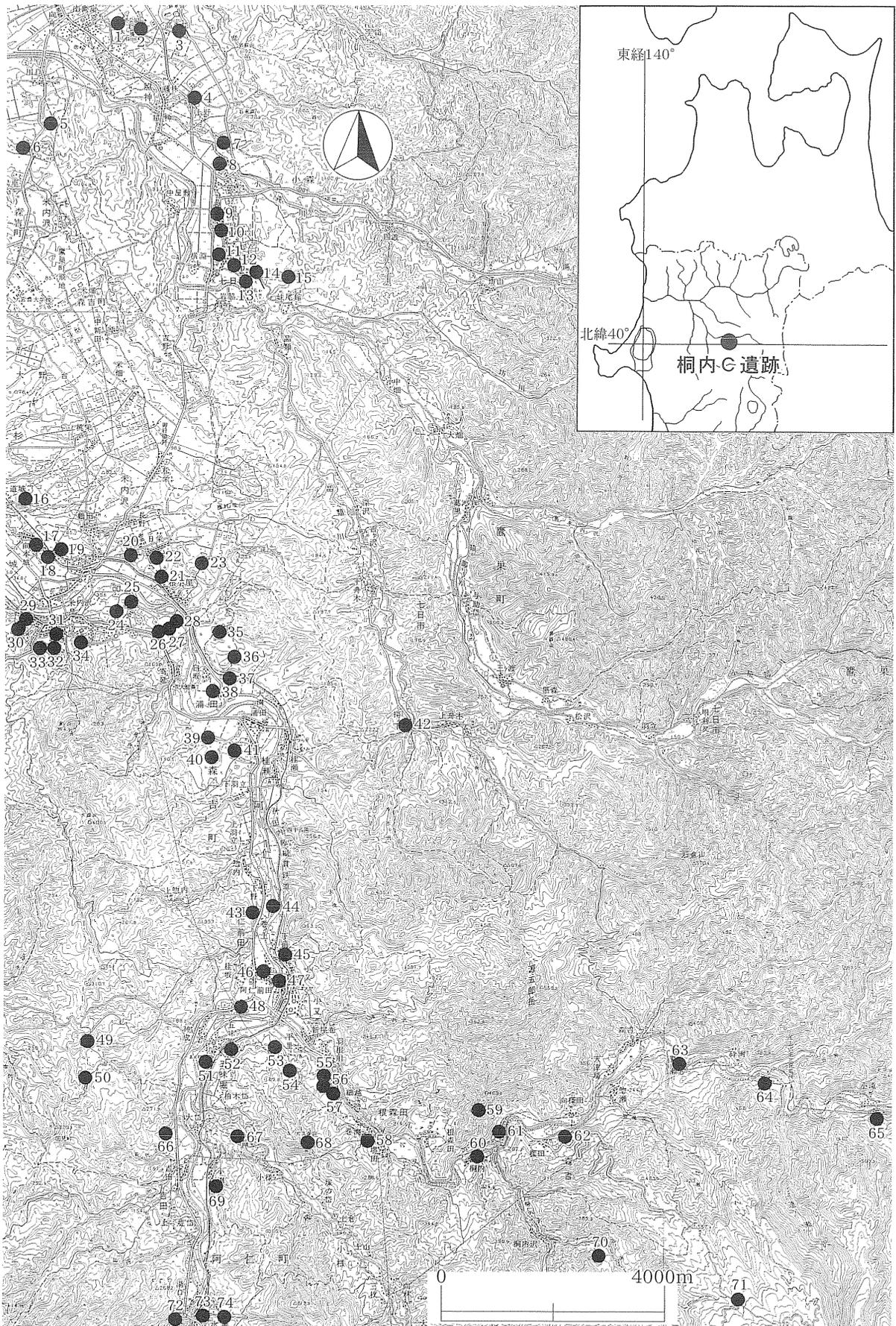


第1図 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
1	圃内C	森吉町森吉字圃内家ノ上ニ付139外	縄文前～後期
2	圃内D	森吉町森吉字圃内家ノ上田尻139外	縄文後期
3	圃内浪	森吉町森吉字圃内浪田下2103	縄文前～後期
4	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱65.63・19	縄文前・後期
5	日廻岱B	森吉町森吉字日廻岱86.88.89.90.91	縄文前・後期
6	漆下	森吉町森吉字漆下2-1.4.5.6.7.8.14-2.37外	縄文前・後期
7	上八倍A	森吉町森吉字上八倍102.104.105.106外	縄文晩期
8	上八倍B	森吉町森吉字上八倍70.71.72	縄文後期
9	二重島A	森吉町森吉字二重島31-1.32-2.47-1.106-1.134.135	縄文前～後期
10	二重島B	森吉町森吉字二重島11.99.100外	縄文後期
11	二重島C	森吉町森吉字二重島93.94.95.96.97.110	縄文後期
12	二重島D	森吉町森吉字二重島39	縄文後期
13	二重島E	森吉町森吉字二重島65.66-1.69.70-2.70-3	縄文後期
14	二重島F	森吉町森吉字二重島124-1	縄文時代
15	二重島G	森吉町森吉字二重島86.81-1.84-1	縄文晩期
16	二重島H	森吉町森吉字二重島86.81.15	縄文晩期
17	水場上	森吉町森吉字水場上42-1.43-1.44.113-8外	縄文前・晩期
18	天津場A	森吉町森吉字天津場15-3	縄文前・晩期
19	天津場B	森吉町森吉字天津場16-1	縄文後期
20	天津場C	森吉町森吉字天津場87-1.87-3.88-2	縄文前・後期
21	ネ々△沢A	森吉町森吉字ネ々△沢26.27.28.29.30.31.32.33.34.35	縄文前・晩期
22	ネ々△沢B	森吉町森吉字ネ々△沢17.18.22	縄文後期
23	ネ々△沢C	森吉町森吉字ネ々△沢6-1	縄文晩期
24	森吉家ノ棚A	森吉町森吉字森吉家ノ棚50	縄文前・晩期
25	森吉家ノ棚B	森吉町森吉字森吉家ノ棚50A.145.174.175.176.177.178	縄文前・晩期
26	森吉家ノ棚C	森吉町森吉字森吉家ノ棚38.139.140.141.142	縄文前・晩期
27	森吉吉A	森吉町森吉字森吉家ノ棚101-1.103.114.115.116	中世
28	森吉B	森吉町森吉字森吉95	縄文前・晩期
29	森吉C	森吉町森吉字森吉69	縄文後期
30	上郷戸B	森吉町根路田字上郷戸8-12	縄文後期

第1表 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
31	上郷戸C	森吉町根路田字上郷戸7.8-9	縄文後期
32	上郷戸D	森吉町根路田字上郷戸37.38.29～41.34.60～60・61・67.53外	縄文前・晩期
33	圃内A	森吉町森吉字圃内田5-1.6-1・3外	縄文後期
34	圃内B	森吉町森吉字家ノ下16.字圃内933-1.34～37外	縄文晩期
35	壺ヶ岱A	森吉町根路田字壺ヶ岱58.9-1.10-1	縄文晩期
36	壺ヶ岱B	森吉町根路田字壺ヶ岱14.10～12	縄文時代
37	壺ヶ岱C	森吉町根路田字壺ヶ岱12-2～11.15外	縄文中期
38	壺ヶ岱D	森吉町根路田字壺ヶ岱2-31外	縄文晩期
39	橋場岱A	森吉町森吉字橋場岱48.49.50-1外	縄文前・晩期
40	橋場岱B	森吉町森吉字橋場岱63.78外	縄文後・晩期
41	橋場岱C	森吉町森吉字橋場岱42.62外	縄文前・晩期
42	橋場岱D	森吉町森吉字橋場岱110-1	縄文時代
43	橋場岱E	森吉町森吉字橋場岱109	縄文後期
44	橋場岱F	森吉町森吉字橋場岱101.103.104	縄文晩期
45	橋場岱G	森吉町森吉字橋場岱6-1.39.40.46	縄文後期
46	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下E8.9-1.2.11.16.81-1.82.83.84	縄文前・晩期
47	向様田B	森吉町森吉字向様田家ノ下E10-1.2.70.71-1.72.74.75外	縄文後・晩期
48	向様田C	森吉町森吉字向様田家ノ下E11.16.77.78.79	縄文前・晩期
49	向様田D	森吉町森吉字向様田家ノ下E14-1.17.18.19-1.20	縄文晩期
50	向様田E	森吉町森吉字向様田家ノ下E36.37.39.63.64	縄文前・晩期
51	向様田F	森吉町森吉字向様田家ノ下E58.59外	縄文後期
52	深瀬A	森吉町森吉字深瀬29外	縄文後期
53	深瀬B	森吉町森吉字深瀬104-1外	縄文前・晩期
54	深瀬C	森吉町森吉字深瀬109外	縄文後期
55	地蔵岱A	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文前・晩期
56	地蔵岱B	森吉町森吉字地蔵岱124外	縄文前・晩期
57	惣橋	森吉町森吉字惣橋86外	縄文前・晩期
58	惣橋	森吉町森吉字惣橋74外	縄文前・晩期
59	丹	森吉町森吉字丹24外	縄文前・晩期
60	丹	森吉町森吉字丹2-1外	縄文後期



第2図 周辺の遺跡分布図

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物
1	石の巻岱Ⅰ	鷹巣町脇神字石の巻岱60	縄文	縄文土器片(晩期)
2	石の巻岱Ⅱ	鷹巣町脇神字石の巻岱65	縄文	縄文土器片(後期)、香炉型土器
3	高森岱	鷹巣町脇神字高森岱16	縄文	縄文土器片(前期・中期)
4	藤株	鷹巣町脇神字藤株塚ノ岱43-4	縄文	竪穴住居跡、Tピット、縄文土器(前期・後期・晩期)、土製品、石器、石製品
5	からむし岱Ⅰ	鷹巣町脇神字からむし岱21	続縄文	続縄文土器片
6	からむし岱Ⅱ	鷹巣町脇神字からむし岱93	続縄文	続縄文土器片、壺形土器
7	タモノ木	鷹巣町小森字タモノ木17	縄文	縄文土器片(中期)
8	小森	鷹巣町小森字小森88-1	縄文	縄文土器片(晩期)
9	根木屋敷岱Ⅰ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱20	古代	土師器
10	根木屋敷岱Ⅱ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱61	縄文	縄文土器片(後期・晩期)
11	山の上	鷹巣町七日市字山の上57	縄文	縄文土器片(中期)
12	圃の内	鷹巣町七日市字圃の内80	縄文	縄文土器片(後期)
13	石倉岱	鷹巣町七日市字石倉岱3-1	縄文	縄文土器片(中期)
14	伊勢堂岱	鷹巣町七日市字伊勢堂岱8-4	縄文	縄文土器片(前期・中期・後期)
15	野尻	鷹巣町七日市字野尻8-2	縄文	縄文土器片(後期)
16	大野	合川町上道城字大野1	縄文	縄文土器片(中期)
17	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷3	縄文	縄文土器片、石匙
18	桐木岱A	森吉町米内沢字桐木岱41~65	縄文	縄文土器片(晩期)、石器
19	桐木岱B	森吉町米内沢字桐木岱20~23	縄文	縄文土器片、土偶
20	長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文	縄文土器片(中期)
21	長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱56-1	縄文・弥生・古代	円形ピット、組石群、縄文土器片(前期・中期)、弥生土器片、土師器、石器
22	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	空堀
23	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片(前期・中期・後期)、土師器、石器
24	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77-1	縄文・古代	縄文土器片(前期・中期・後期)、土師器、石器
25	孤岱	森吉町米内沢字孤岱88	縄文・古代	竪穴住居跡(縄文・古代)、土坑、配石墓、縄文土器片(前期・中期・晩期)、土師器、石器
26	山崎	森吉町米内沢字山崎57-1	縄文	土坑、配石遺構、縄文土器片
27	吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文・弥生	土坑、縄文土器片、弥生土器片
28	吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野5-1	古代	土師器片
29	御獄	森吉町米内沢字御獄62-1	古代	土師器片
30	御獄館	森吉町米内沢字高御獄2	中世	空堀、土塁
31	寺ノ上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文	縄文土器片(晩期)、石鏃、石匙
32	寺ノ上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	古代	土師器片
33	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5	中世	空堀、土塁、井戸跡
34	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森52-57	古代	土師器片
35	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50-1	縄文	縄文土器片、石器
36	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文	縄文土器片(後期)、石器
37	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文	縄文土器(晩期)、土偶、岩偶
38	白坂	森吉町浦田字白坂上岱19-22	縄文	竪穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器(後期・晩期)、岩偶、石器、土製品
39	愛宕堂	森吉町浦田字稲荷沢40	縄文	縄文土器片(中期)、石器破片
40	浦田館	森吉町浦田字愛宕堂下44	中世	館跡
41	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂3	縄文	縄文土器片(前期・中期)、石器
42	若木岱	鷹巣町七日市字若木岱9-2	縄文	縄文土器片、石器
43	焼山	森吉町阿仁前田字道行沢136-1	縄文	縄文土器片
44	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片
45	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片、石器
46	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	館跡
47	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片(前期・中期)
48	陣場岱Ⅰ	森吉町阿仁前田字陣場岱141-1	縄文	縄文土器片(前期・中期)、石器
49	冷水沢A	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片(後期)、石器
50	冷水沢B	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片(後期)、石器
51	五味堀	森吉町五味堀字五味堀1	縄文	縄文土器片、石器
52	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45-46	縄文	縄文土器片(晩期)
53	五味堀高屋布	森吉町五味堀字下夕大久保岱174	縄文	縄文土器片
54	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片(後期)、独鈷石
55	小又小平里A	森吉町小又字浦坪74	縄文	縄文土器片(後期)、石器
56	小又小平里B	森吉町小又字上岱9	縄文	縄文土器片(後期)、石器
57	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片(後期)、石器
58	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢13	縄文	土坑、縄文土器(早期~晩期)、石器
59	仲ノ又館	森吉町根森田字仲ノ又75	中世	空堀
60	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文	竪穴住居跡、土坑、縄文土器(前期・中期・後期・晩期)、石器、土製品、石製品
61	姫ヶ岱	森吉町根森田字姫ヶ岱8~15	縄文	縄文土器片、石器
62	様田	森吉町森吉字様田二重鳥131	縄文	縄文土器片、石器
63	鷺ノ瀬	森吉町森吉字鷺ノ瀬31-1	縄文	縄文土器片(前期)
64	深渡	森吉町森吉字深渡家の前	縄文	縄文土器(前期~晩期)、石組炉
65	向小滝	森吉町森吉字向小滝上段613	縄文	縄文土器片(晩期)、石器
66	風張城	阿仁町吉田字寺屋布1-7	中世	空堀、井戸跡
67	花館	森吉町五味堀字野崎1-82	中世	空堀
68	天館	森吉町五味堀字天館101	中世	館跡
69	高田城	阿仁町小淵字山ノ内65-32	中世	空堀
70	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱46	縄文	縄文土器片(後期・晩期)
71	小又川	森吉町小又川国有林52林班の小班	縄文	縄文土器片(後期)、石器
72	熊堂	阿仁町水無字湯口内451-1	縄文	縄文土器片(中期)、石鏃
73	上岱Ⅰ	阿仁町水無字上岱104-2	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器(中期・後期)
74	上岱Ⅱ	阿仁町水無字上岱135-2	縄文	縄文土器片(中期)

第2表 周辺の遺跡

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

桐内C遺跡は、北秋田郡森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外に所在し、町北部の米内沢地区にある森吉町役場より南東約11km、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅から南東約5kmの、北緯 $40^{\circ} 1' 55''$ 、東経 $140^{\circ} 27' 42''$ に位置している。西流する小又川沿いに県道比内森吉線を東上すると、小又川と桐内沢川の合流点にかかる桐内橋にいたる。その桐内橋より手前が桐内地区であり4つの遺跡がある。平成6年度の範囲確認調査では、県道の南側を桐内I遺跡とし、北側を桐内II遺跡とした。その後、平成8年度の範囲確認調査で桐内C遺跡の西側約600m地点で桐内A遺跡、西側約300m地点で桐内B遺跡が確認され、桐内I遺跡が桐内C遺跡に、桐内II遺跡が桐内D遺跡に変更された。桐内C遺跡は、東側調査区（面積13,300㎡）と西側約100mの地点に位置する西側調査区（面積700㎡）から成り立っている。

本遺跡は、大久保山山地が北西方向に張り出した山裾につながる段丘面にある。東西に広く、東北方向に張り出しており、標高は125m前後で東側を桐内沢川で画されている。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地をはさんで、北北東に小繫森（標高1,010m）、北に高鳥帽子（標高764m）、北西に源五郎岳（標高559m）などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大6段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面側の勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩（粘板岩、ホルンフェルス）が小繫森の頂上付近に顔を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山砕屑岩類および堆積岩類を基盤岩としている。また、第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動に伴う泥流堆積物・段

丘堆積物・扇状地堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。

当地区の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性碎屑岩類が分布し、左岸側には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。

第2節 遺跡の歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』（1991年発行）によると、森吉町には58カ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されている。その後、秋田県教育委員会による、1992（平成4）年度～1993（平成5）年度の森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、1994（平成6）年度からの同事業に係る遺跡範囲確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉地区で新しく見つかり、町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。これらの調査によって、森吉町では発見されていなかった旧石器時代の遺物が、ネネム沢A遺跡で確認された。

縄文時代の遺跡では、爪形文・貝殻沈線文・条痕文の遺物が出土した早期の桂の沢遺跡、前期の長野岱I遺跡・地蔵岱遺跡、前期から後期にかけての大規模な集落跡が確認された狐岱遺跡がある。中期から晩期にかけては、姫ヶ岱C・D遺跡・碎淵遺跡・日廻岱A遺跡・天津場C遺跡・上悪戸D遺跡・深渡遺跡・森吉家ノ前B遺跡・白坂遺跡・塚の岱遺跡がある。これらの中の遺跡で、深渡遺跡の石棺様組石・白坂遺跡の『笑う岩偶』は、大きく報道され話題となった。

現在の森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域は『日本三代実録』に記す「^{すぎぶちむら}榎淵村」に擬定されており、古代にあっては、律令化外の地として考えられている。古代の遺跡では、狐岱遺跡や諏訪岱遺跡などで平安時代の集落跡、地蔵岱遺跡で製鉄関連遺構が確認されており、その他天津場A遺跡・ネネム沢A遺跡・森吉家ノ前A遺跡でも古代の遺構・遺物が確認されている。

中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10カ所確認されている。町南部の旧前田村には、阿仁前田地区の前田館、五味堀地区の花館と天館、根森田地区の仲ノ又館がある。本遺跡に近い仲ノ又館には空堀や見張り台跡がある。

森吉山ダム建設地区では、中世の城館跡は確認されていないものの、森吉家ノ前B遺跡で馬具の一部と思われる金具と、室町時代に属すると思われる珠洲系陶器が出土しており、小滝新兵衛岱遺跡から出土した鎌倉時代製作の青銅古鏡とともに、当該地域の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

参考文献

- 秋田県農政部農地整備課 『大野台開発計画区域 土地分類基本調査 米内沢』 1978（昭和53）年
- 川村公一 『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』 モリトピア選書2 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993（平成5）年
- 角川書店 『角川日本地名大辞典 5 秋田県』 1980（昭和55）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県北版）』 1991（平成3）年
- 秋田県 『秋田県史 考古編』 1977（昭和52）年
- 奈良修介・豊島昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書3 吉川弘文館 1966（昭和41）年

- 大和久震平 「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」 『昭和三十二年度調査研究報告』 秋田県文化財保護協会 1958（昭和33）年
- 大野憲司 「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第5号 1990（平成2）年
- 高橋 学 「森吉町長野岱Ⅰ遺跡採集の岩偶」 『秋田考古学』 第42号 秋田考古学協会 1993（平成5）年
- 加賀利男 「長野岱Ⅰ遺跡について」 『広報 もりよし』 第120号 1968（昭和43）年
- 加賀利男 「塚の岱遺跡の発掘調査について」 『広報 もりよし』 第131号 1969（昭和44）年
- 森吉町 「民俗資料ならびに考古学資料調査の協力依頼について」 『広報 もりよし』 第127号 1968（昭和43）年
- 森吉町教育委員会 『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告～』 1992（平成4）年
- 森吉町教育委員会 『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1996（平成8）年
- 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1997（平成9）年
- 森吉町教育委員会 『上悪戸D遺跡発掘調査報告書～比内・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』 1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備に係る埋蔵文化財発掘調査－』 秋田県文化財調査報告書第244集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会 『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』 秋田県文化財調査報告書第247集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997（平成9）年

第3章 発掘の概要

第1節 遺跡の概観

桐内C遺跡は、大久保山山地の山裾につながる段丘面にあり、北側を西流する小又川沿いに走る県道比内森吉線、東側を桐内沢川に画されている。東西に細長く、東側調査区（面積13,300㎡）とその西側約100mにある西側調査区（面積700㎡）から成り立っている。遺跡の標高は125m前後であり、ほとんどが旧耕作地である。

当初予定では、東側調査区の東側より7,300㎡と西側調査区の700㎡の合わせて8,000㎡が調査対象面積であった。その後、調査面積の拡大が決まり遺跡総面積の14,000㎡を調査した。なお、遺構の検出が少ないことにより、東側調査区の西側約2,500㎡は2mおきのトレンチ調査を行った。

第2節 調査の方法

1. 野外調査

調査はグリッド法で行った（第4図）。調査対象の東側調査区7,300㎡と西側調査区700㎡の計8,000㎡にグリッドを設定するため、建設省が打設した森吉山ダム設置に伴う3級基準点D3-2を原点とした。この杭を基準杭として、原点を通る国家座標第X系の南北方向に南北基準線Y軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線X軸とし、両基準線を延長して当該区内に4m×4m方眼のグリッドを組んだ。基準杭をMA50として、南から北へ4mごとに、・・・、47、48、49、50、51、・・・、と南北方向を示す数字と、西から東に、・・・、MO、MN、MM、・・・、と東西方向を示すアルファベットの2文字を付した。各グリッドの呼称は、南北方向の杭を通るX軸と東西方向の杭を通るY軸の組み合わせで、MA50、MB51、MC52、・・・、のように呼ぶこととした。なお、調査途中で調査対象面積が拡大され、同様の方法で残りの全調査区域に4m×4m方眼のグリッドを組んだ。

遺構は、東側調査区と西側調査区それぞれで種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。なお、東側調査区と西側調査区を区別するために西側調査区には最後にBを付けた。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、2分割法または4分割法による精査を行った。

遺物は、グリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐水性荷札を添付した。

東側調査区は、平面図および断面図を原則として1/20の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。また、細部状況を表すために適宜1/10の拡大図を作成した。作図は、手実測で行った。断面図には、土色・堅さ・しまり・土性・混入物を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。西側調査区では、平面図およびエレベーション図はトータルステーションを使用し、断面図は手実測で作成した。

発掘調査における写真撮影は、遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、発掘調査終了の際は全景を撮影するためにラジコンヘリによる空中撮影を行った。写真は、35mmカメラとブロンカを使用し、

フィルムはモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）、ネガカラーを使用した。

2. 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これをもとに平面図と断面図を組み合わせた図を第2原図とした。東側調査区の遺構は、第1原図をスキャナーで取り込み、遺跡管理システムを使用して第2原図を作成した。西側調査区は、トータルステーションのデータをすべて遺跡管理システムで処理し、第2原図を作成した。また、トレースはすべてプロッタで行った。

遺物は、洗浄・注記の後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えてトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第3節 調査経過

- 5月12日 本日より桐内C遺跡の発掘調査を開始した。午前中、姫ヶ岱にある発掘機材を運搬し、午後に東側調査区に22台、西側調査区に10台のベルトコンベアーを配置した。
- 5月13日 グリッド杭打設を開始した。東側、西側調査区に分かれ粗掘を開始した。西側調査区はベルトコンベアーを使用した。
- 5月15日 東側調査区もベルトコンベアーを使用し粗掘を開始した。
- 5月25日 向様田で範囲確認調査を行っていた作業員が合流した。作業員用プレハブとトイレを設置した。昼休みに、船木調査課長よりベルトコンベアーに関する注意事項の連絡があった。
- 5月28日 東側調査区のボーリング跡付近で土坑を数基検出した。
- 6月2日 株式会社シン技術コンサルより遺跡管理システムが納入された。
- 6月3日 森吉山ダム工事事務所の加賀谷係長と小林専門職が来跡した。
- 6月11日 朝の作業員点呼の際に、雨でベルトコンベアーが滑りやすいので十分注意するように指示した。
- 6月12日 船木調査課長が来跡した。
- 6月16日 櫻田課長補佐が来跡した。
- 6月17日 森吉町前田公民館で作業員の健康診断を行った。午後より発掘調査を開始し、西側調査区は今まで確認された土坑の半截を行った。
- 6月22日 齊藤森吉山ダム工事事務所長が来跡した。
- 6月24日 東側調査区のJT62グリッドより土器片が多数出土した。
- 7月14日 東側調査区の東端部の礫の下より、石囲炉を検出した。
- 7月17日 東側の調査区域の面積を拡大し、粗掘を進めた。
- 7月23日 拡大した調査区内にグリッド杭の打設を開始した。
- 7月28日 大館地域産業保健センターの医師による健康相談が行われた。
- 8月5日 日本ジャンボリー出席のために、皇太子殿下がノロ川会場に向かうのを出迎えた。
- 8月27日 西側調査区の調査を終了した。竪穴住居跡3軒・土器埋設遺構1基・土坑7基を検出した。

地山面まで削平されており、遺構に伴う遺物はほとんど出土しなかった。時期を確定できる遺構はなかった。

- 8月31日 航空写真撮影のため、遺跡環境の整備を進めた。
- 9月2日 東側調査区のKL60・61より石囲炉を検出した。この炉は、粗掘の際に一部が確認されていたが、基本土層ベルトの下になっており、基本土層ベルトを除去して検出した。
- 9月7日 KO63の基本土層より、土偶の体部破片が出土した。
- 9月10日 ローリングタワー3段を組み立て、竪穴住居跡の柱穴を探した。
- 9月11日 埋蔵文化財センター三浦所長・船木調査課長・櫻田課長補佐・高橋科長・柴田科長・児玉文化財主査・菅原主査・文化課工藤主席課長補佐が来跡した。
- 9月17日 鷺ノ瀬の範囲確認調査が終了し、桐内C遺跡の発掘調査に合流した。
- 9月21日 12:00より航空写真を撮影した。遺跡引き渡しのために、文化課より小徳学芸主事、森吉山ダム工事事務所より川村課長と小林専門職が来跡した。
- 9月22日 SQN36の周りに柱穴を検出し、竪穴住居跡とした。トータルステーションにより、東側調査区の遺構配置図を作成した。東側調査区で検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑12基、土器埋設遺構3基、焼土遺構2基、石囲炉1基、柱穴様ピット1基、性格不明遺構1基である。
- 9月24日 発掘機材とリース機材を整理して、桐内C遺跡の発掘を終了した。



第3図 桐内A・B・C・D、桐内沢遺跡



第4図 グリッド設定図

第4章 調査の記録

第1節 基本層位

本遺跡はかつて、大部分が水田として利用されており、昭和40年代のほ場整備の際に遺跡全体が大きく削平されている。東側調査区、西側調査区とも地山面に重機の軌道跡が残っており、特に西側調査区の削平が著しい。

東側調査区のⅠ層・Ⅱ層とも表土であり、Ⅰ層は盛土で、Ⅱ層は耕作土である。層厚は、Ⅰ層・Ⅱ層とも0.1m程度である。Ⅲ層は遺物包含層で、Ⅳ層が漸移層である。遺物包含層は、黒褐色土であり層厚が0.1m～0.4mで、漸移層は、暗褐色土で層厚が0.1m程である。

西側調査区で、削平をまぬがれたのは沢の一部であった。Ⅰ層・Ⅱ層とも表土であり、Ⅰ層は盛土で、Ⅱ層は耕作土である。層厚はⅠ層で0.2m程度で、Ⅱ層は0.5mと厚い。その下に、ほ場整備以前の耕作土と考えられるⅢ層とⅣ層がある。Ⅲ層・Ⅳ層とも層厚は0.4m程度である。Ⅴ層は遺物包含層で、Ⅵ層が漸移層である。遺物包含層は、黒褐色土で層厚は0.3m程度、漸移層は、黒色土で層厚が0.1m～0.3m程度である。Ⅴ層・Ⅵ層とも沢の落ち込み部分で見られるが、それ以外では削平されていない。

第2節 東側調査区検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構の概要

昭和40年代のほ場整備の際に削平されており、遺構確認面は多くの場合削平された地山面であった。検出遺構は竪穴住居跡2軒、土坑12基、土器埋設遺構3基、焼土遺構2基、石囲炉1基、柱穴様ピット1基、性格不明遺構1基である。すべて縄文時代に属する。

2. 遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

S I 36竪穴住居跡（第8図、図版2・6）

《位置》 東側調査区KL60・61、KK61グリッドに位置する。

《確認》 粗掘中にⅢ層下部より石囲炉を確認し、地山面を精査中にP1からP6の柱穴を検出した。

《重複》 なし。

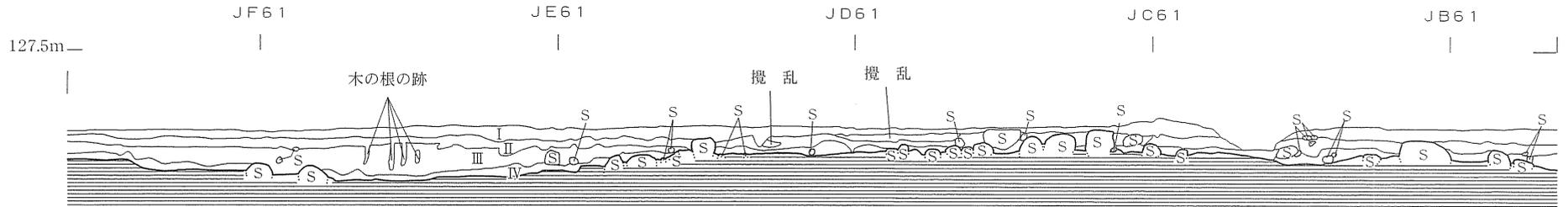
《規模と平面形》 削平されており、壁の立ち上がりは確認されなかった。P2の柱穴からP5の柱穴までの距離は5.0m、P1の柱穴からP3の柱穴までの距離は3.6mである。

《埋土》 柱穴以外の埋土は確認できなかった。

《柱穴》 柱穴の大きさは、それぞれ径0.25m～0.5mの円形で、深さは地山面より0.3m～0.55mである。埋土は、黒褐色土で地山の粒を含んでいた。粘性はやや弱く、しまりもやや弱い。

《床面》 堅くしまっており平坦である。

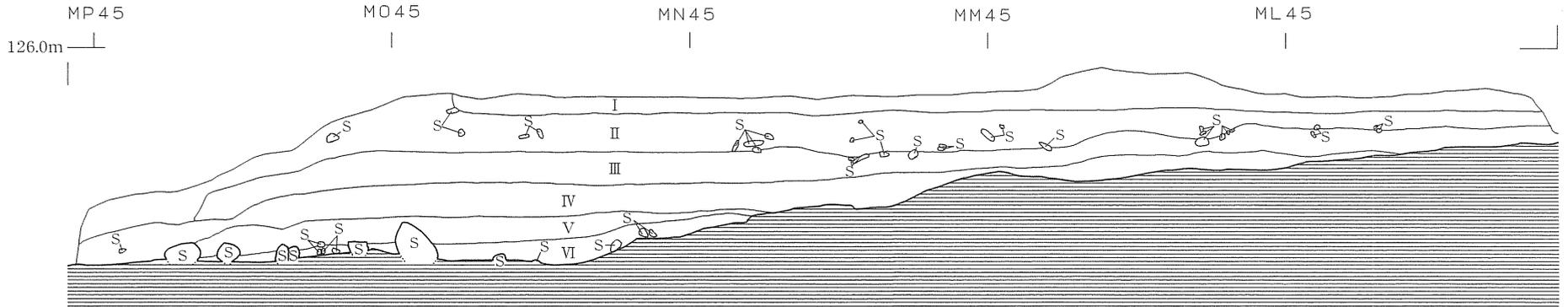
東側調査区基本土層



東側調査区基本土層

- | | | | |
|-----|----------------|-------|---|
| I | 黒褐色土 (10YR3/2) | しまり有り | 粘性弱い |
| II | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり有り | 粘性弱い J E61~J F61にかけて橙 (7.5YR6/8) の極小粒3%混入 |
| III | 黒色土 (10YR2/1) | しまりなし | 粘性弱い |
| IV | 暗褐色土 (10YR3/4) | しまり普通 | 粘性やや強い |

西側調査区基本土層

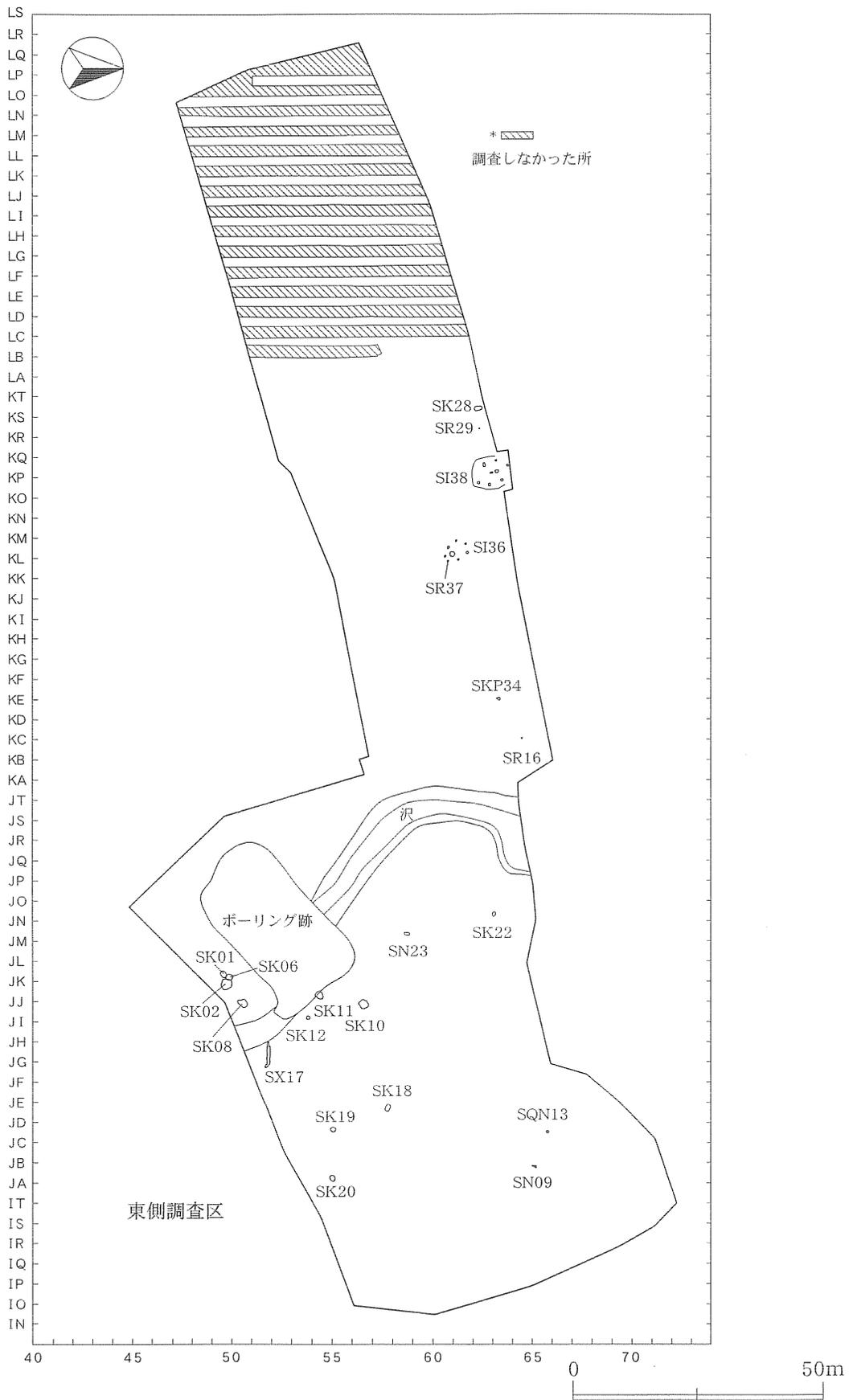


西側調査区基本土層

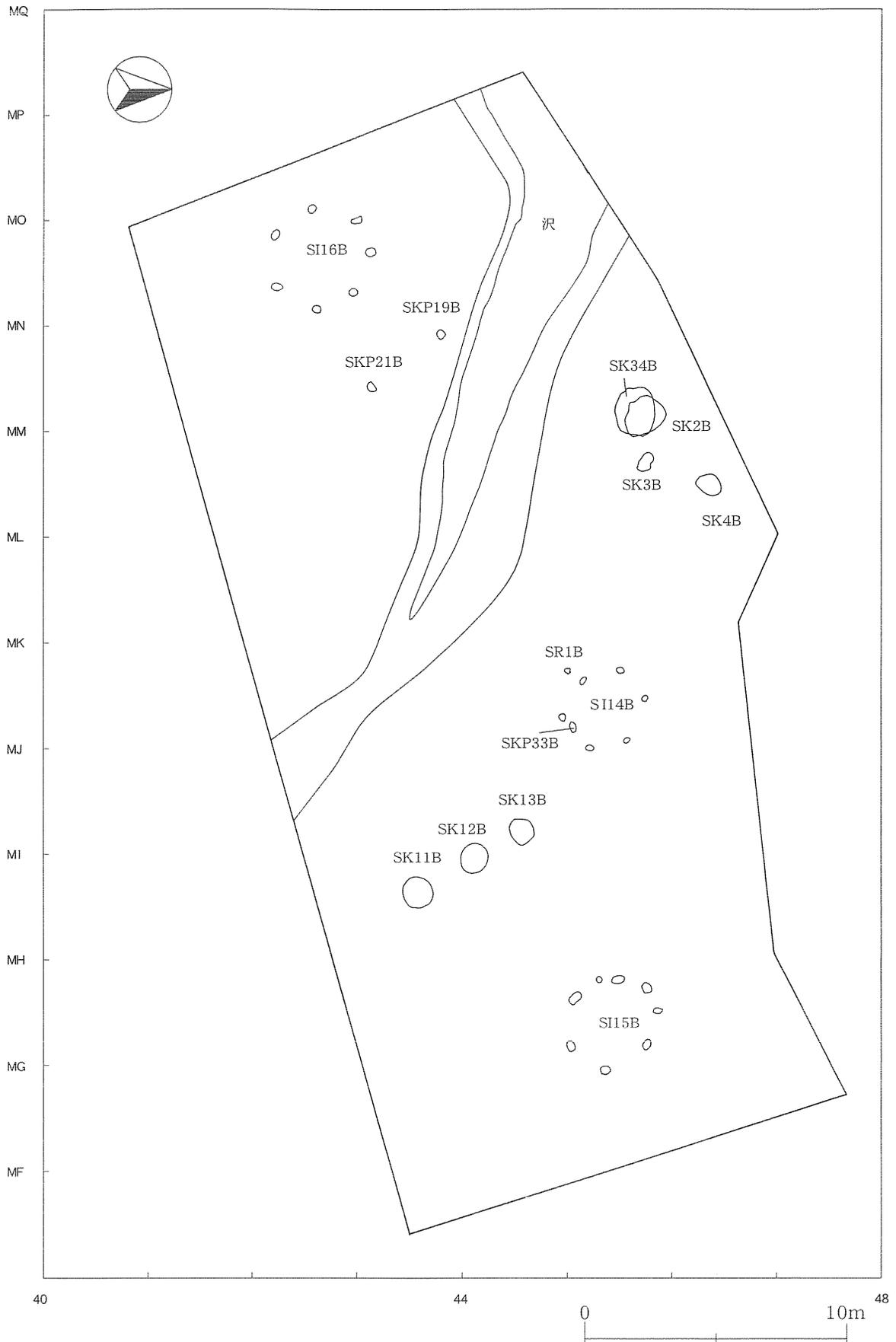
- | | | | | |
|-----|----------------|-------|--------|---------------------|
| I | 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりなし | 粘性なし | 地山の小ブロック少量混入 |
| II | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまりなし | 粘性なし | 地山の大量に混入 |
| III | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり有り | 粘性やや有り | 地山粒を含む 炭化物少量混入 |
| IV | 黒褐色土 (10YR3/1) | しまり有り | 粘性やや有り | III層より地山粒多い 炭化物少量混入 |
| V | 黒色土 (10YR2/1) | しまりなし | 粘性やや有り | 炭化物少量含む |
| VI | 黒色土 (10YR2/1) | しまり弱い | 粘性弱い | |



第5図 東側調査区・西側調査区基本土層



第6図 東側調査区遺構配置図



第7図 西側調査区遺構配置図

《 炉 》 住居跡の南側にある。プランは径約1mの円形で、南東側にある長軸40cm、短軸30cmの扁平な巨礫と10cm前後の大礫から構築されている。北西側は約10cm程度すき間が空いている。炉の埋土は、南東側に焼土が多く見られ、巨礫付近の礫が多く焼けていた。

《出土遺物》 炉の南東側より第9図1（図版6）の土器片1点が出土した。この土器片には、2条の平行沈線を配しているが、縄文は摩滅している。P2の確認面より第9図2（図版6）の石槍が出土した。途中で折損しており、側縁に押圧剥離が見られるが刃部には調整がない。

S I 38 竪穴住居跡（第10図、図版2・6）

《位置》 東側調査区K O 62・63、K P 62・63グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面より落ち込みを確認し、その後焼土1・2とP1からP6の柱穴を検出した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 北側が削平され斜面になっているため、長軸を南側の壁よりP4までとするが、長軸7.96m（北北西から南南東）、短軸6.46m（北東から南西）で平面形は隅丸方形と推測される。

《埋土》 黒褐色土でしまりがやや弱く、粘性もやや弱い。

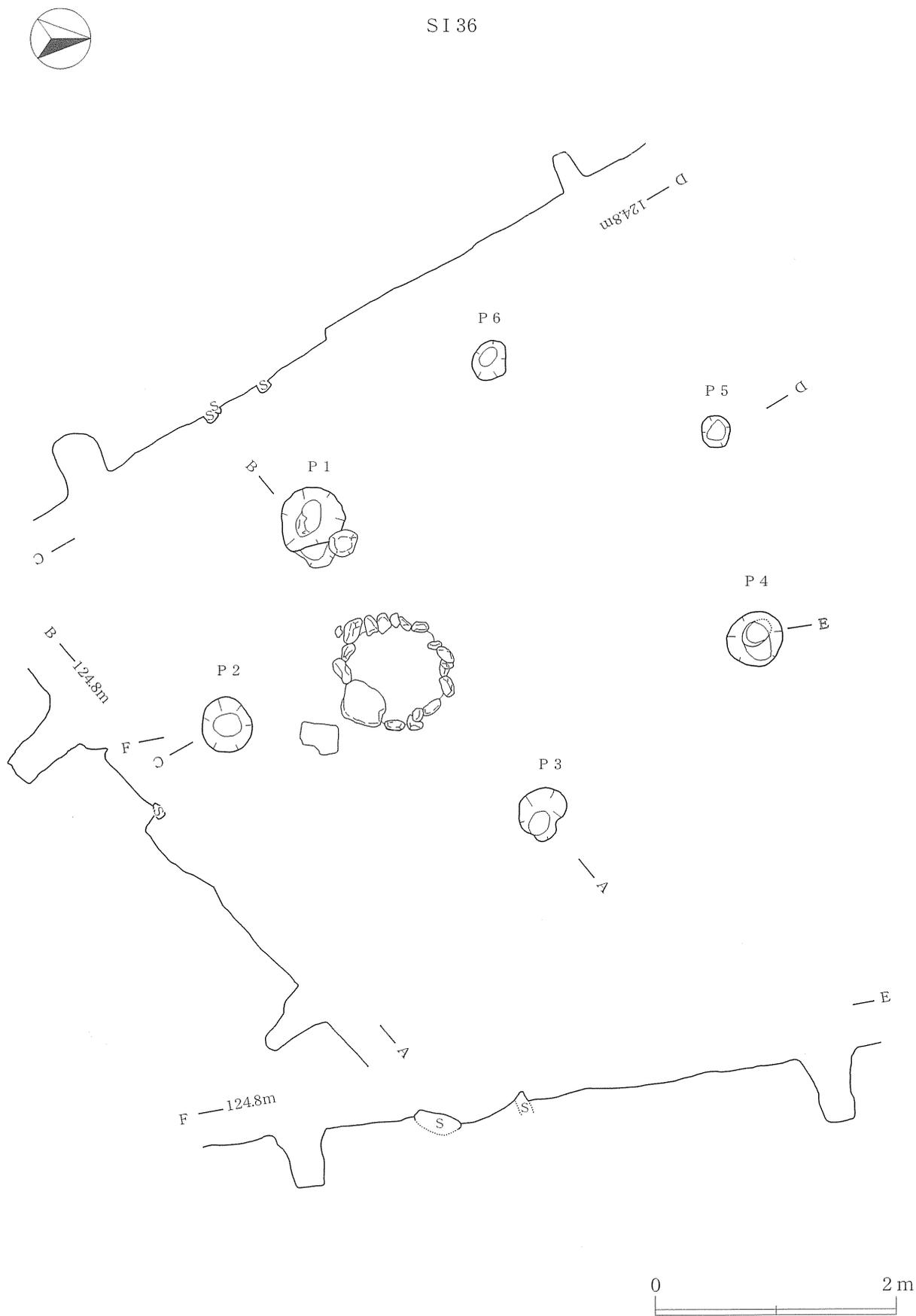
《壁》 床面より0.2m前後の高さで、ゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。

《柱穴》 大きさは、それぞれ径0.35m～0.5mで、深さは地山面より0.6m～0.7mである。埋土は、P3以外はすべて1層であり黒褐色土または暗褐色土である。P3は2層に分けられた。

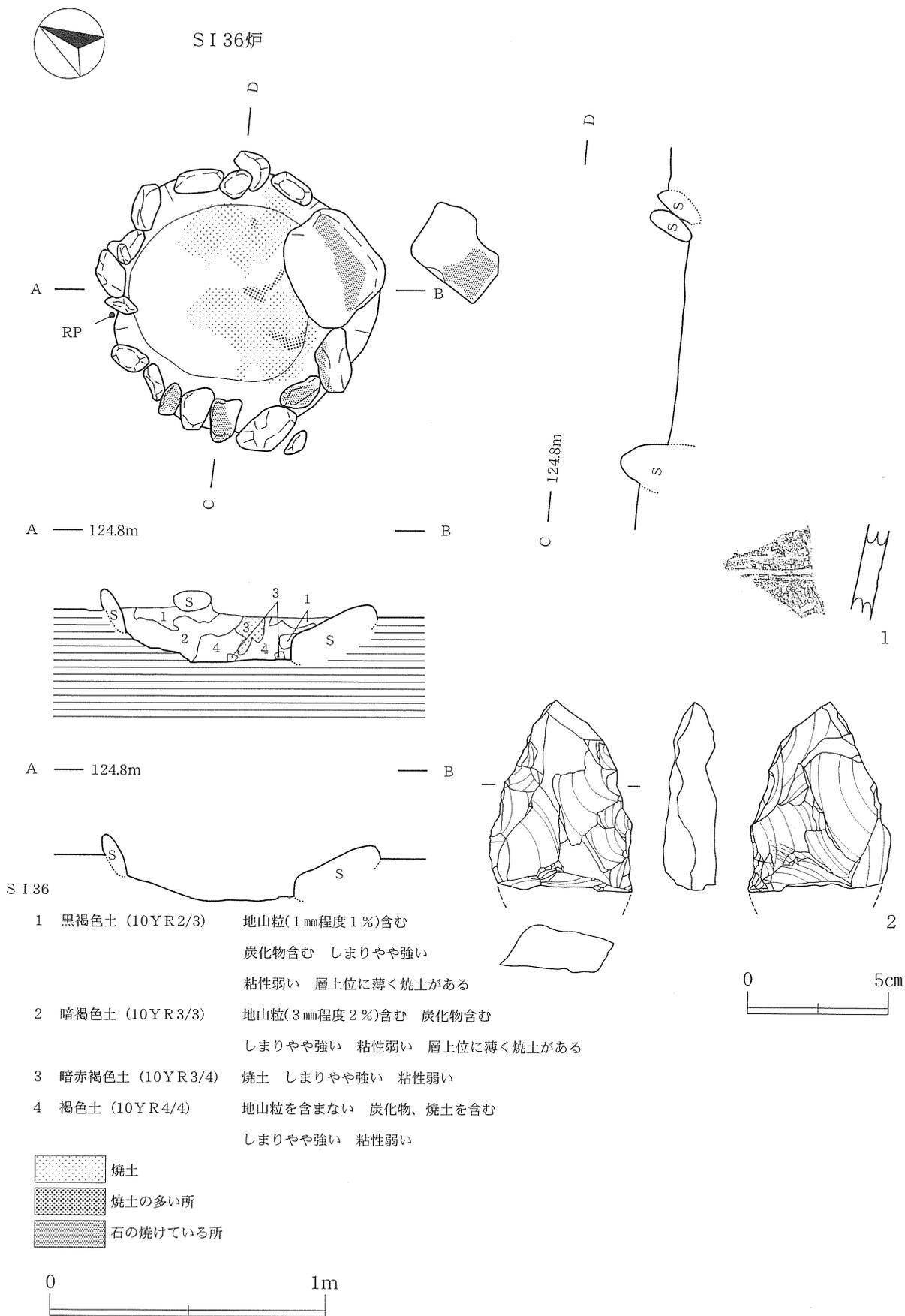
《床面》 堅くしまっているが、小さな凹凸が見られる。

《炉》 焼土1・2とも周りに礫があるが、もとは地床炉であった可能性が高い。焼土の大きさはどちらもほぼ同じであり、焼土の厚さも同じ程度である。

《出土遺物》 第11図1（図版6）は竪穴住居跡南側埋土中より出土した深鉢形土器である。口縁部が欠損し、胴部上半に3条の平行沈線とその平行沈線より垂下する沈線を有する。土器表面には煤状炭化物が付着し、底部には簾状圧痕が見られる。この土器は円筒上層e式土器である。第11図2・3（図版6）はP2より出土した土器である。2の土器は、円筒上層e式土器の口縁部破片である。口唇部に縦位の撚糸の押圧を施し、波頂部に横位の渦巻状の沈線を有する。渦巻状の沈線と、横位の2条の平行沈線との間には刺突列を有する。第11図4（図版6）はP3より出土した土器片である。煤状炭化物が厚く付着している。第11図5（図版6）の石器はP1より出土した。刃部の片側だけの調整である。第12図6（図版6）は、竪穴住居跡南側埋土中より出土した、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部下半から内湾しながら立ち上がり、波状を呈する口縁部がゆるやかに外反する器形を呈する。口唇外縁に凹線文を巡らす口縁部は無文で、頸部には2条の細く低いつまみ出し隆帯と、横走る波状沈線文を充填する平行沈線文が巡る。胴部には、



第8図 SI 36竪穴住居跡



第9図 SI 36石囲炉及び出土遺物

R L 縄文を施文後、沈線による渦巻文を施文している。胴部には煤状炭化物が厚く付着している。この土器は大木 8 b 式に比定できる。第12図 7（図版 6）は、P 1 の確認面より出土した打製石斧である。この石斧は、側縁に大まかな押圧剥離を加えているだけで刃部には調整が施されていない。

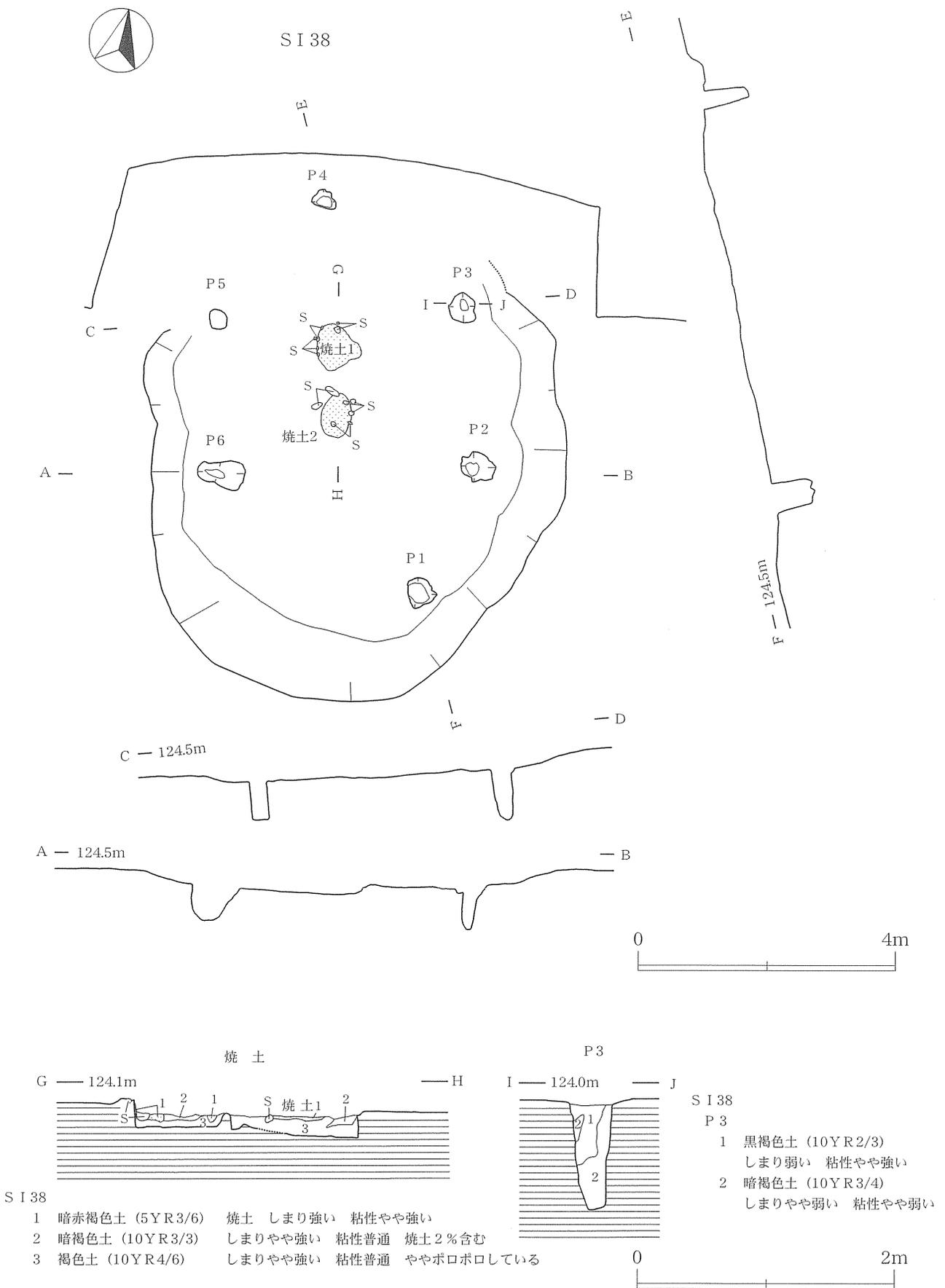
(2) 土坑

S K 01土坑（第13図、図版 2・6）

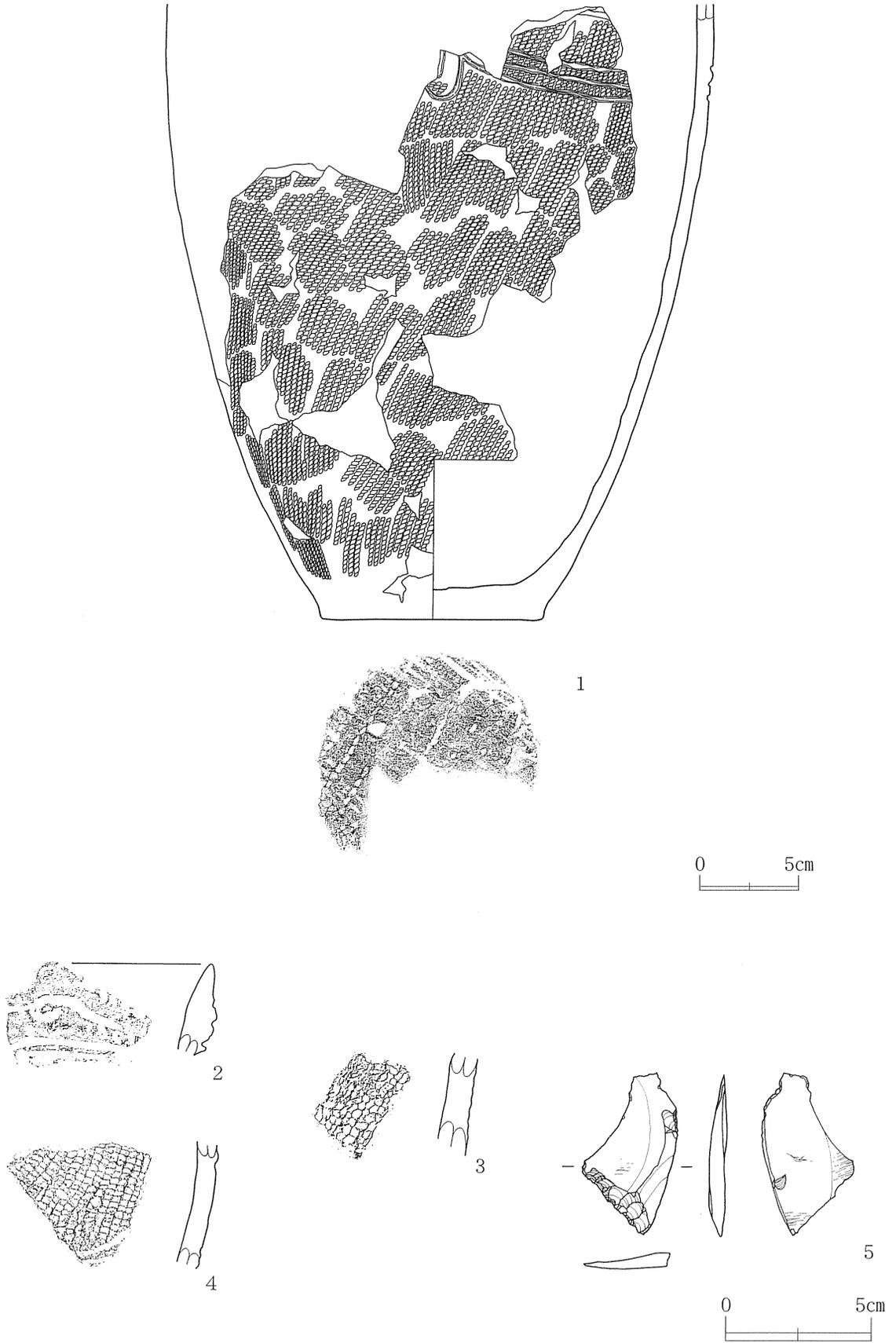
- 《位置》 東側調査区 J K 49 グリッドに位置する。
- 《確認》 整地のために削平されており、土坑の南西側の断面が現れていた。精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1.14m、短軸1.1mの楕円形で、深さは地山面より0.6mである。
- 《埋土》 3層に分けられた。
- 《壁》 ほぼ垂直に立ち上がっている。
- 《底面》 堅くて平らである。
- 《出土遺物》 埋土より土器片が18点と石器1点が出土した。第13図 1（図版 6）は外反する口縁部破片である。煤状炭化物が厚く付着している。第13図 2（図版 6）は地文を施文後、横走る2条の沈線を配し、その下位に沈線で長方形区画している。区画内は、磨消を施している。また円形の刺突文も見られる。同様の土器片が隣接する S K 06土坑でも出土している。この土器片は十腰内 I 群土器である。第13図 3（図版 6）は2条の弧状の沈線が、第13図 4（図版 6）は平行沈線が配されている。第13図 5（図版 6）と6（図版 6）は無文であるが、5には弧状の沈線の上位に円形刺突文を配している。第13図 7（図版 6）はスクレイパーで周縁部に調整がなされている。中程で折損している。遺構内には人頭大の礫が10数個埋められていた。その中に、石皿（第14図 8、図版 7）と磨かれた跡のある棒状の石（第14図 9、図版 7）が出土した。石皿は、明確な縁をもたない。また、棒状の石は風化が激しくひび割れている。

S K 02土坑（第15図、図版 3・7）

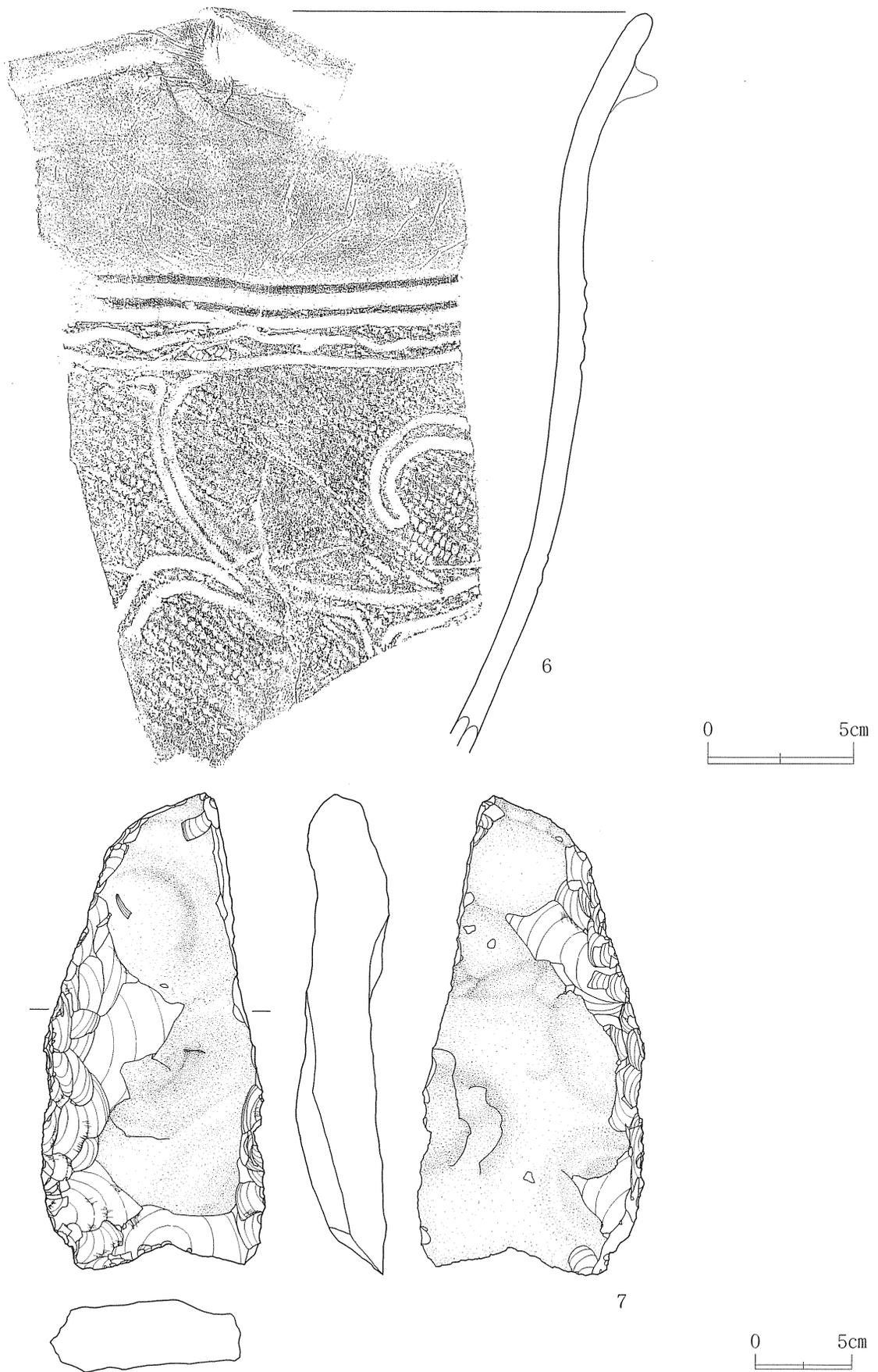
- 《位置》 東側調査区 J K 49 と J J 49 グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 S K 06土坑の埋土を掘り込んでおり、本土坑が新しい。
- 《規模と平面形》 長軸2.3m、短軸1.9mの楕円形で、深さは地山面より0.3mである。中央部やや北側に径0.7m、深さが0.2mのピットがある。
- 《埋土》 3層に分けられた。
- 《壁》 立ち上がりは急である。
- 《底面》 平坦である。
- 《出土遺物》 土器片が5点出土しているが、いずれも摩滅が著しい小土器片である。第15図 1（図版 7）は、2条の弧状の沈線文が配されている。



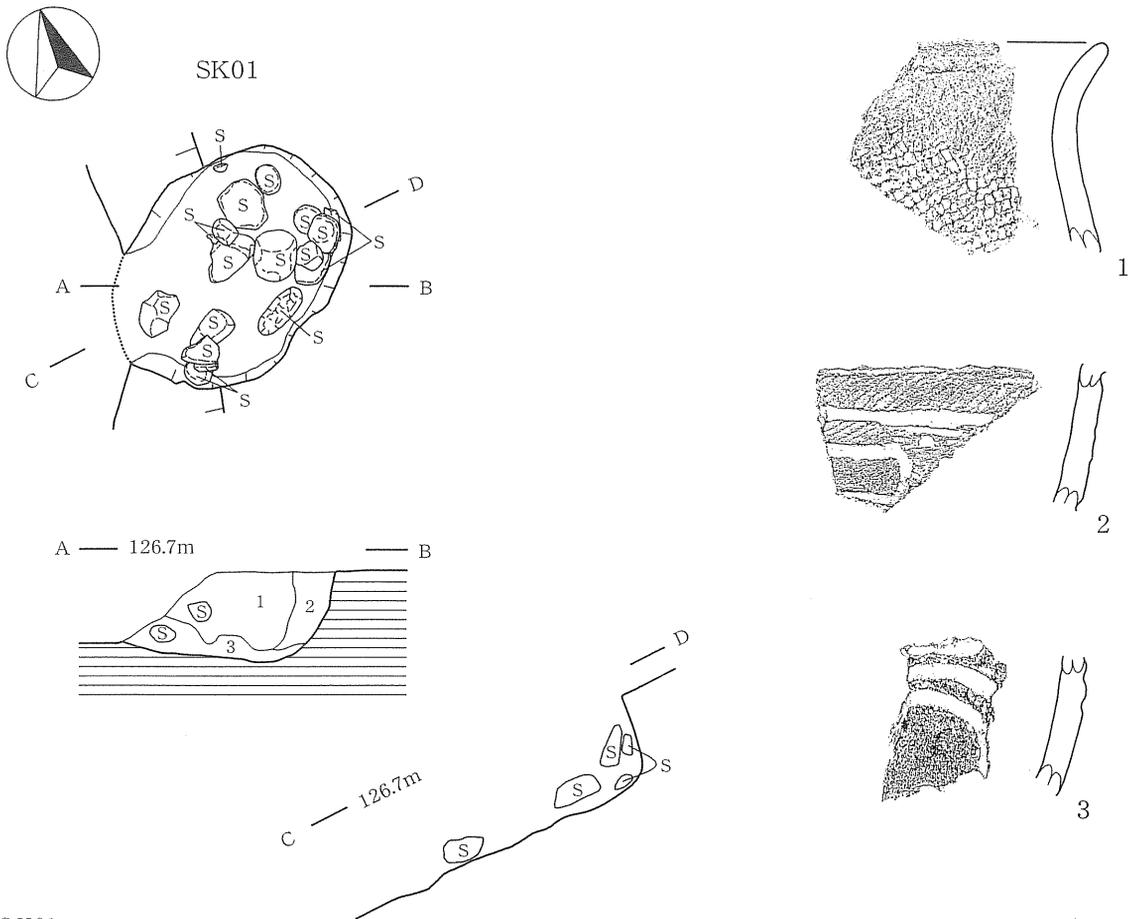
第10図 SI 38竪穴住居跡



第11図 SI 38竪穴住居跡出土遺物（1）

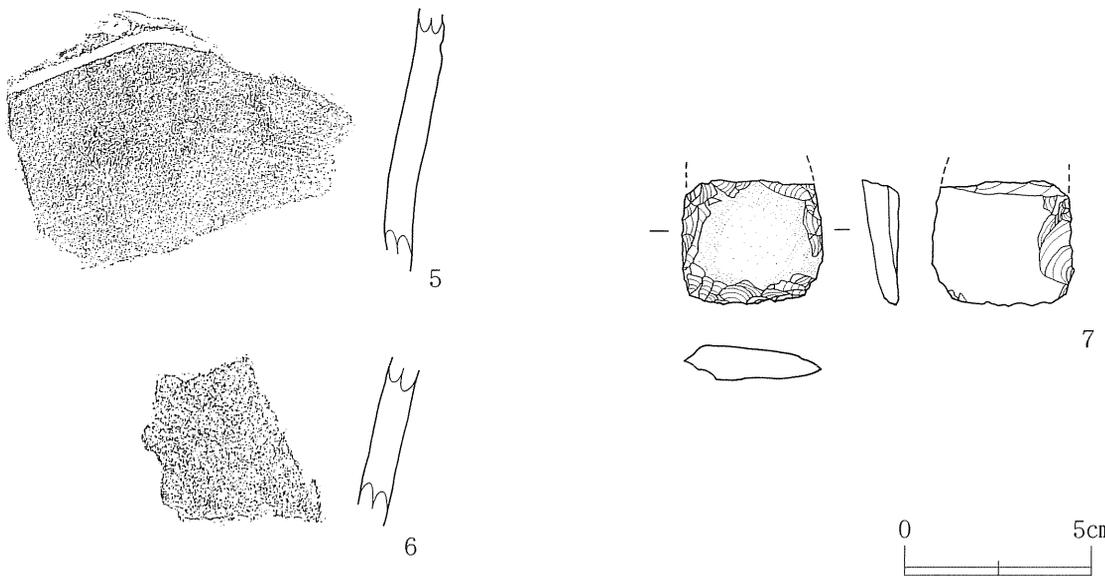


第12図 SI 38竪穴住居跡出土遺物（2）

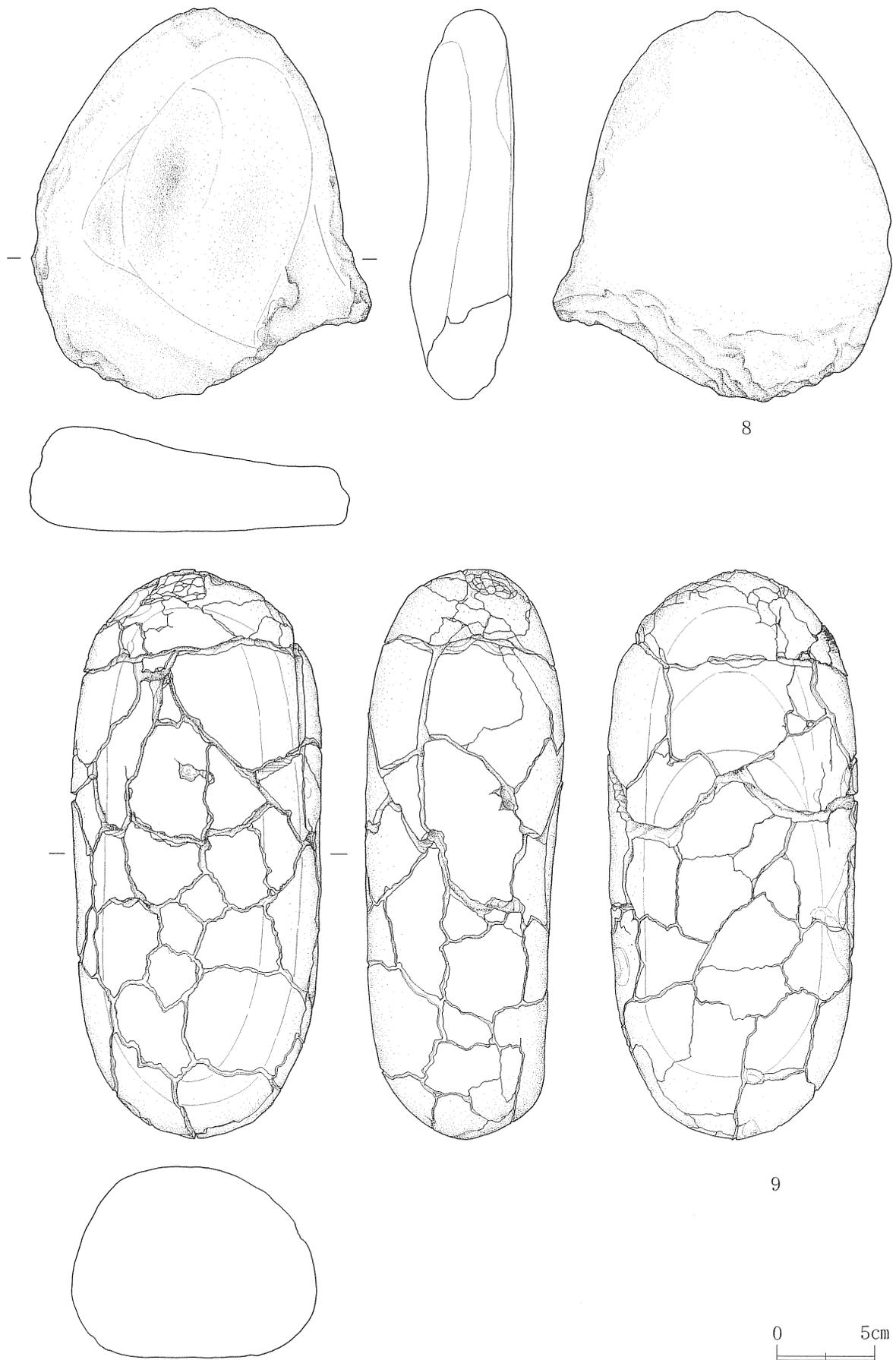


SK01

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物少量含む しまりなし 粘性なし
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 地山の小ブロック少量含む しまりやや有り 粘性なし
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物少量含む やわらかくしまりなし 粘性なし



第13図 SK01土坑及び出土遺物



第14図 SK01土坑出土遺物

S K 06土坑（第15図、図版3・7）

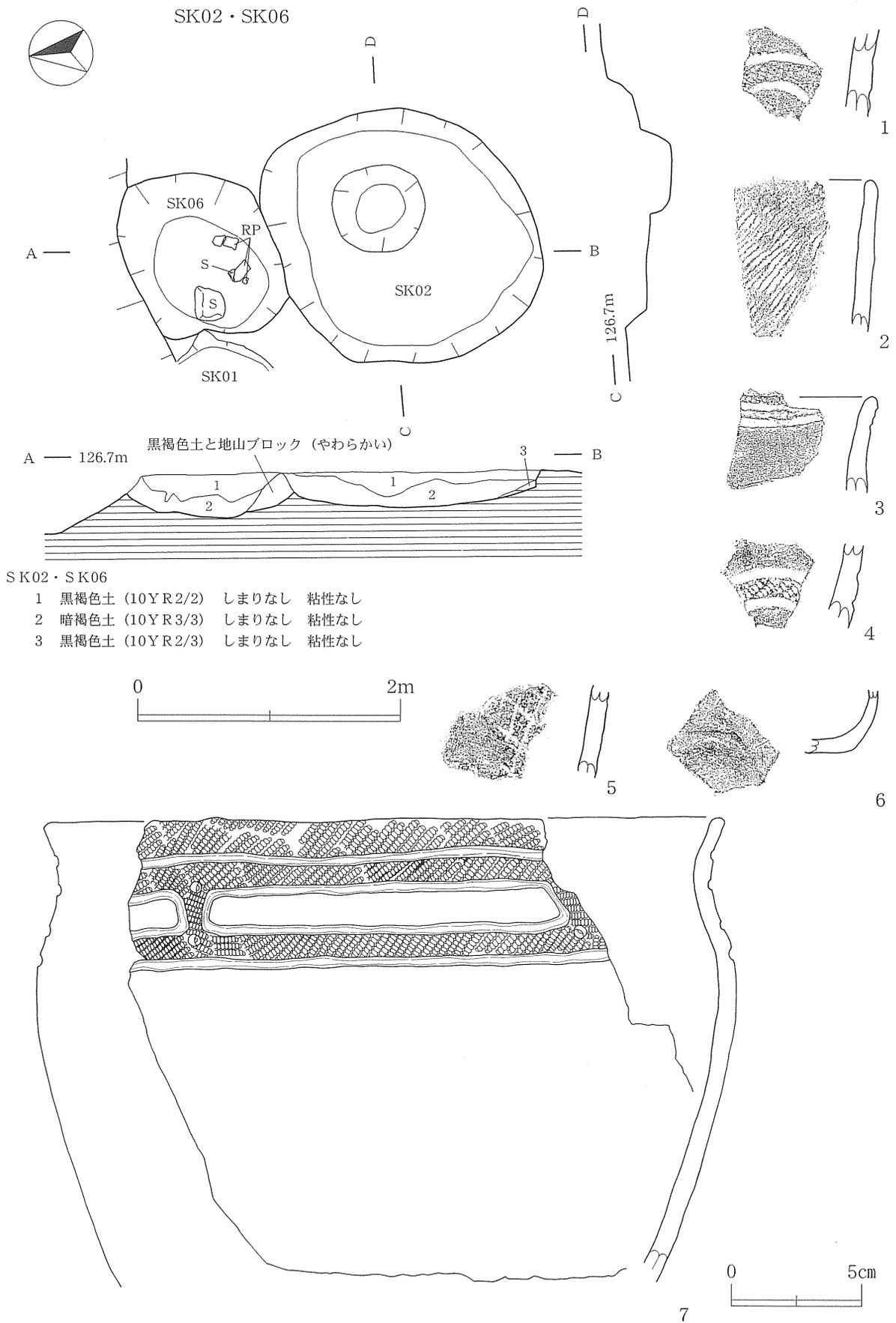
- 《位置》 東側調査区 J K 49グリッドの北側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 S K 02土坑より古い。
- 《規模と平面形》 長軸1.5m、短軸1.2mの楕円形で、深さは地山面より0.4mである。
- 《埋土》 2層に分けられた。
- 《壁》 南側は、ゆるやかに立ち上がっており、北側は削平されている。
- 《底面》 鍋底状になっている。
- 《出土遺物》 埋土より土器片が18点出土した。第15図2（図版7）は無節の斜行縄文が施文された口縁部破片で、第15図3（図版7）は横走する2条の沈線を配している口縁部破片である。第15図4（図版7）は、2条の沈線間に縄文を残し、その上下を磨り消している破片で、煤状炭化物が厚く付着している。第15図5（図版7）は、網目状撚糸文の施文された土器片である。第15図6（図版7）は、底部破片で厚さは0.5cmと薄い。第15図7（図版7）は、平縁でやや外反する深鉢形土器である。口縁部にはL R縄文が施文され、胴部は無文である。2条の平行沈線を配し、その間を沈線で長方形に区画している。沈線で区画された長方形内は磨り消されており、長方形と長方形の間の上下には、棒状工具による円形刺突文が縦位に2個並んでいる。この土器片は十腰内I群土器である。

S K 08土坑（第16図、図版3・7）

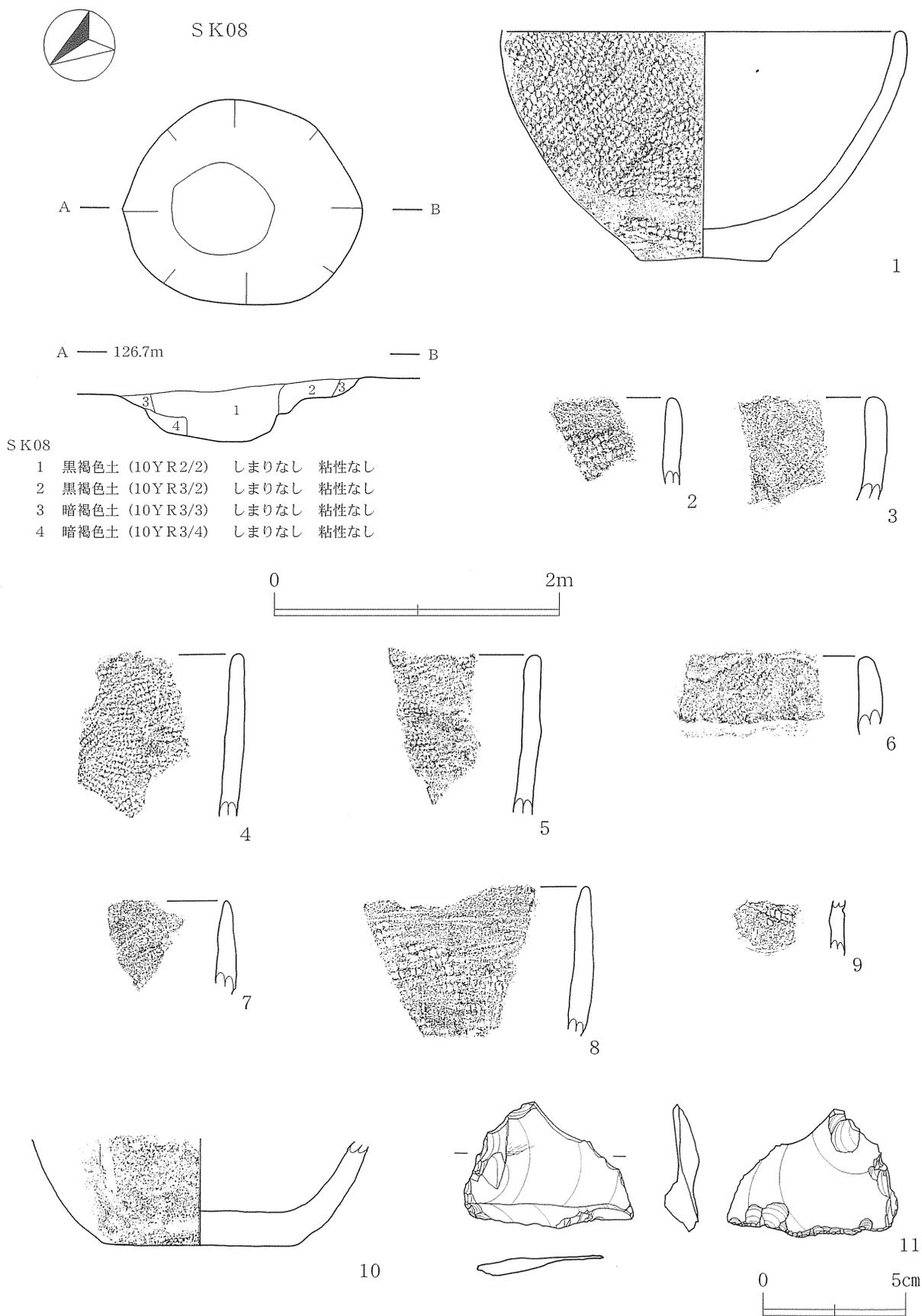
- 《位置》 東側調査区 J J 50と J I 50グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.84m、短軸0.72mの楕円形である。
- 《埋土》 4層に分けられた。
- 《壁》 ゆるやかに立ち上がっている。
- 《底面》 鍋底状になっている。
- 《出土遺物》 埋土より鉢形土器及び土器片52点と剥片が2点出土した。第16図1（図版7）は、口径14.4cm、器高8cm、底径5cmで全面にL R縄文を施文した鉢形土器である。口唇部にも縄文を押圧している。内側の一部に煤状炭化物が付着している。第16図2～8（図版7）は口縁部破片でL R縄文が施文されている。6～8の両面には煤状炭化物が厚く付着している。第16図9（図版7）は、縄の側面圧痕を配している。第16図10は底径が6.7cm、厚さが1.2cmの底部破片である。第16図11（図版7）は、刃部に調整を加えているスクレイパーである。

S K 10土坑（第17図、図版3）

- 《位置》 東側調査区 J I 56と J J 56グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。



第15図 SK02・06土坑及び出土遺物



第16図 SK08土坑及び出土遺物

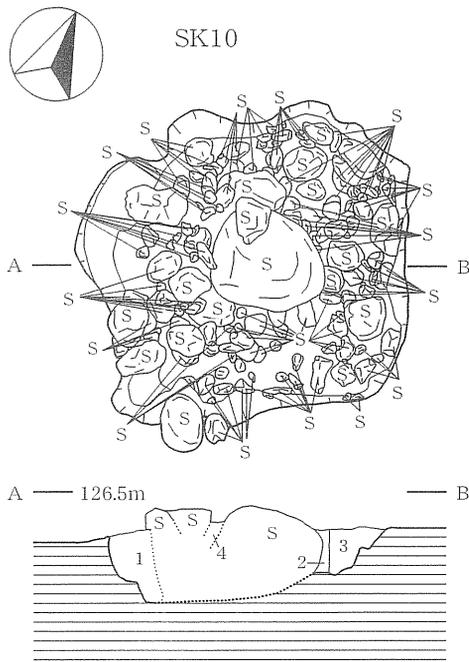
- 《規模と平面形》 1辺が1.5mの隅丸方形で、深さは地山面より0.5mである。
- 《埋 土》 4層に分けられ、東側に土が流れ込んでいた。
- 《 壁 》 東側はややゆるやかに立ち上がっているが、西側は急である。
- 《底 面》 底部中央に径約60cmの巨礫が埋められており、その周りにたくさんの礫が埋められていた。
- 《出 土 遺 物》 なし。

S K 11土坑（第17図、図版3・8）

- 《位 置》 東側調査区J J 54グリッドのほぼ中央に位置する。
- 《確 認》 ボーリング跡とされている法面に断面が現れており、精査中に確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 西側が削平されており現存する大きさは、長軸1.6m、短軸1.3mの楕円形で、深さは地山面より0.35mである。
- 《埋 土》 2層に分けられた。
- 《 壁 》 東側が鋭く掘られており、西側は不明である。
- 《底 面》 南西側に傾斜している。
- 《出 土 遺 物》 埋土より土器片が89点出土した。第17図1（図版7）は深鉢形土器で、口径19.2cm、器高26.1cm、底径7.2cmである。LR縄文を施し、下部では回転方向を変えている。口縁部には1対の補修孔があり、全体に厚く煤状炭化物が付着している。第17図2（図版8）は、やや内湾する鉢形土器の口縁部破片である。3条の平行沈線と弧状の沈線を配している。この土器は十腰内I群土器である。第17図3（図版8）～第18図9（図版8）は口縁部破片で、いずれもLR縄文を施文しているが、3と4には沈線を付加している。6には煤状炭化物が厚く付着している。第18図10（図版8）は無文で、外反する頸部破片である。第18図11（図版8）にはカギ形の2条の沈線が施されている。第18図12（図版8）は、底径7.8cm、厚さ1.2cmの底部破片で、木葉痕が見られる。第18図13（図版8）は、深鉢形土器の口縁部破片である。平縁な口縁の内側が篋状工具によりなでられている。全面に縄文が施文され、土器の外側だけでなく内側にも煤状炭化物が厚く付着している。

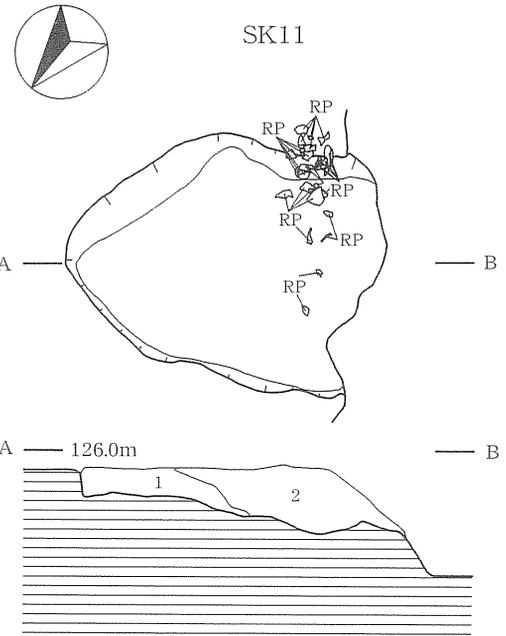
S K 12土坑（第19図、図版3）

- 《位 置》 東側調査区J I 53グリッドの北側に位置する。
- 《確 認》 地山面には礫があり、それを取り除いて精査中に確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 径0.7mの円形で、深さは地山面より0.1mである。底面のほぼ中央に径0.2m、深さ0.1mのピットがある。土坑の東側に、長軸70cm、短軸40cmの巨礫がある。
- 《埋 土》 1層である。
- 《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。
- 《底 面》 東側は平坦でしまっているが、西側は凸凹している。
- 《出 土 遺 物》 なし。



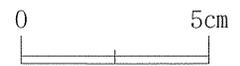
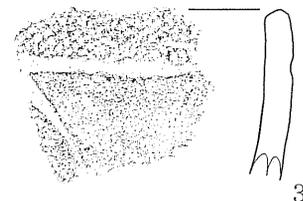
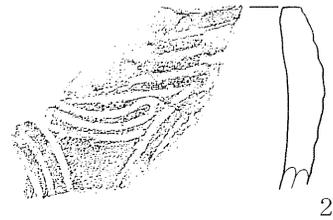
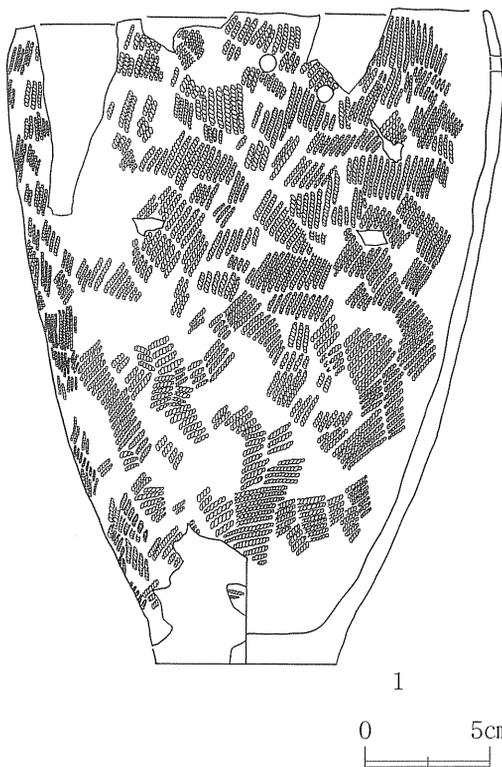
SK10

- | | | |
|---|----------------|---------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 地山ブロック(20mm10%)含む
しまり普通 粘性弱い |
| 2 | 褐色土 (10YR4/6) | 地山粒(1%)含む しまり普通
粘性弱い |
| 3 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 地山ブロック(20mm10%)含む
しまり普通 粘性弱い |
| 4 | 黄褐色土 (10YR5/6) | しまり有り非常に堅い 粘性普通 |

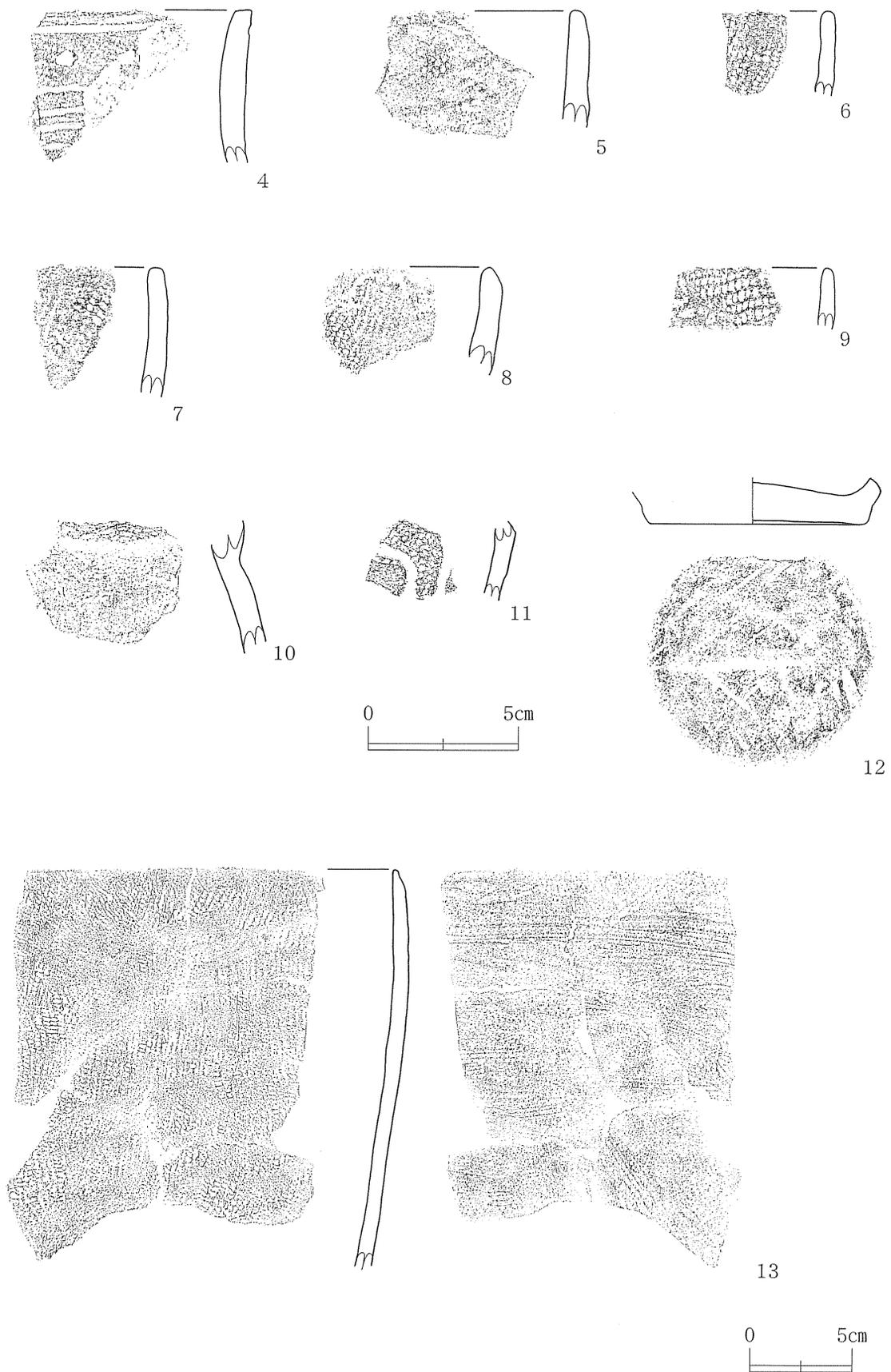


SK11

- | | | |
|---|----------------|------------------------|
| 1 | 暗褐色土 (10YR3/2) | しまり弱い 粘性普通 |
| 2 | 黒色土 (10YR2/1) | しまり弱い ポロポロしている
粘性弱い |



第17図 SK10・11土坑及びSK11土坑出土遺物



第18図 SK11土坑出土遺物

S K 18土坑 (第19図、図版3・8)

- 《位置》 東側調査区 J D 57グリッドの北側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1.3m、短軸0.7mの楕円形で、深さは地山面より0.3mである。
- 《埋土》 1層である。
- 《壁》 立ち上がりが急である。
- 《底面》 平坦でしまっている。
- 《出土遺物》 土器片25点が出土した。第19図1 (図版8) は、外反する口縁部破片で、無節の縄文を施文している。第19図2・3 (図版8) は、縄文を地文とし、曲線の沈線を施している。どちらも十腰内 I 群土器である。第19図4 (図版8) は、回転方向を変えて施文した無節の縄文で、表面に煤状炭化物が厚く付着している。第19図5 (図版8) は、無文の土器片である。

S K 19土坑 (第20図、図版3)

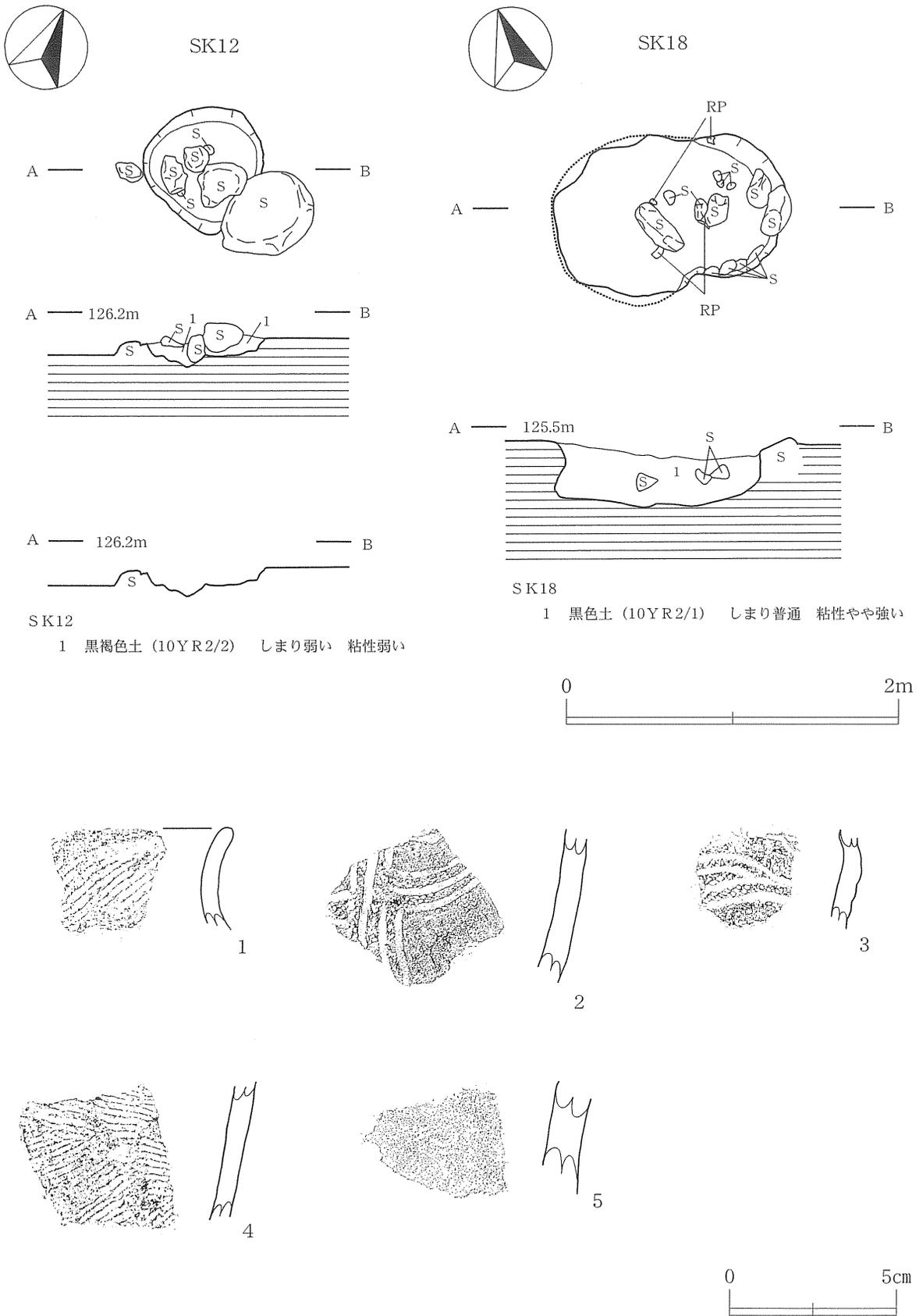
- 《位置》 東側調査区 J C 54・55グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1m、短軸0.9mの隅丸方形で、深さは地山面より0.3mである。
- 《埋土》 3層に分かれた。
- 《壁》 全体的に立ち上がりが急で、壁に礫が多く露出している。
- 《底面》 長軸70cm、短軸60cmの巨礫と、その他たくさんの中礫が露出し凸凹している。
- 《出土遺物》 なし。

S K 20土坑 (第20図、図版4)

- 《位置》 東側調査区 J A 54・55グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.9m、短軸0.8mの隅丸方形で、深さは地山面より0.4mである。
- 《埋土》 3層に分かれた。
- 《壁》 全体的に立ち上がりが急で、壁に礫がある。
- 《底面》 北側に長軸70cm、短軸60cmの巨礫があり、その他中礫がたくさん露出している。
- 《出土遺物》 なし。

S K 22土坑 (第20図)

- 《位置》 東側調査区 J N 62・63グリッドに位置した。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形で、深さは地山面より0.4mである。東側から西側にかけて傾斜している。



第19図 SK12・18土坑及びSK18土坑出土遺物

- 《埋 土》 3層に分かれた。
- 《 壁 》 東側の壁に礫があり、立ち上がりは急である。
- 《底 面》 平坦でしまっている。
- 《出 土 遺 物》 なし。

S K 28土坑（第20図、図版4・8）

- 《位 置》 東側調査区K S 62グリッドの南側に位置する。
- 《確 認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1.5m、短軸0.8mの楕円形で、深さは地山面より0.45mである。
- 《埋 土》 2層に分かれた。
- 《 壁 》 東側はほぼ垂直に立ち上がり、西側はゆるやかである。
- 《底 面》 15～20cmの大きさの礫が埋められていたが、平坦になっていた。
- 《出 土 遺 物》 第20図1（図版8）のスクレイパー1点と剥片3点が出土した。スクレイパーは刃部に微調整が加えられているのみである。

(3) 土器埋設遺構

S R 16土器埋設遺構（第21図、図版4・8）

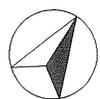
- 《位 置》 東側調査区J Q 62グリッドの東側に位置する。
- 《確 認》 精査中に、巨礫の下に粗製深鉢形土器を確認した。周りは大小たくさんの礫があり、はじめは土器の上に巨礫で蓋をしたように見えた。しかし土器の上部半分がそっくり10cmほどずれていることより、この巨礫は重機で運ばれたものと推測される。そのときに、土器の上部半分が移動したと考えられる。土器の周りには、掘り込み部分が確認できた。
- 《形 態》 出土した土器は正位に埋設されており、土器内埋土は2層に分けられた。暗褐色土の上にわずかに黒褐色土が覆っている。この黒褐色土は耕作土である。
- 《出 土 遺 物》 出土した深鉢形土器（第21図1・2、図版8）は、底径12.5cmで底部の厚さが1.4cmである。摩滅が著しく、文様が明確ではない。

S R 29土器埋設遺構（第21図、図版8）

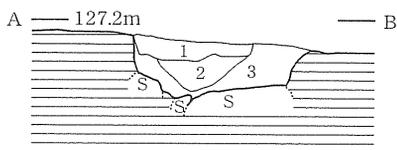
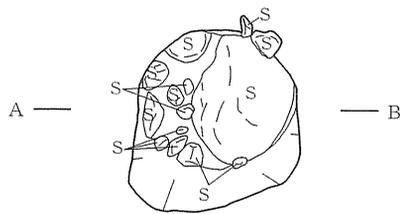
- 《位 置》 東側調査区K R 62グリッドのほぼ中央に位置する。
- 《確 認》 精査中に、土器の底部を出土し、その後土器埋設遺構と確認した。
- 《形 態》 土器の底部以外は削平されており、掘り込み、土器内埋土は確認できなかったが正位に埋設されたと考えられる。
- 《出 土 遺 物》 底径13.5cm、底部の厚さが1.4cmで、R L縄文を施している深鉢形土器の底部破片（第21図3、図版8）である。

S R 37土器埋設遺構（第22図、図版4・8）

- 《位 置》 東側調査区K K 60グリッドの西側に位置する。
- 《確 認》 精査中に、地山面より土器片を出土し、その後土器埋設遺構と確認した。土器片は、細かく割れた状態で出土しており、東側には土器片が確認できなかった。S I



SK19

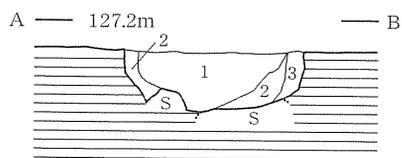
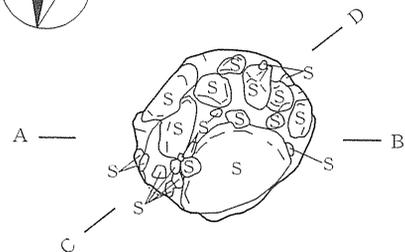


SK19

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり有り 粘性なし
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) しまり普通 1層よりやわらかい
粘性普通
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) しまり有り 粘性普通



SK20

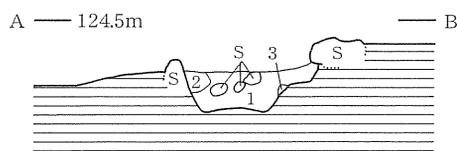
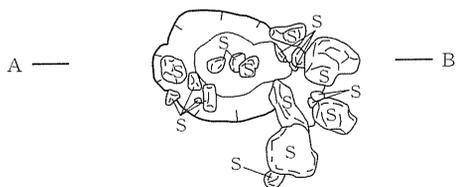


SK20

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり有り 粘性やや強い
褐色土 (10YR4/4) 約5%含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強い 粘性普通
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) しまり普通 すこしパサパサ
している 粘性あまりない



SK22

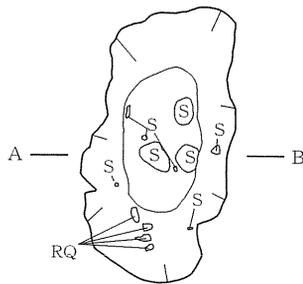


SK22

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり普通 粘性やや強い 地山粒少し混入
炭化物ごくわずか混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強い 粘性普通 地山ブロック含む
炭化物(1~2mm)ごくわずか混入
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山ブロック しまりやや弱い

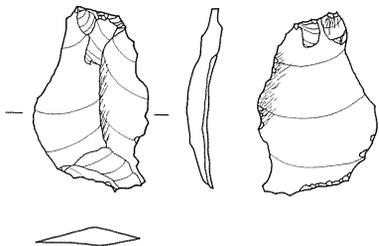


SK28



SK28

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) しまり有り 粘性やや強い
10mmの礫が少量混入
- 2 褐色土 (10YR4/6) しまり有り 粘性普通
地山粒少量含む



第20図 SK19・20・22・28土坑及びSK28出土遺物

36 竪穴住居跡の石囲炉の南東約 1 m のところにあり、すぐ脇に柱穴がある。位置的に見て竪穴住居内に埋設された可能性もある。

《形態》 出土した土器は、かすかに西側に傾けられて埋設されており、土器内埋土は 3 層に分けられた。すべて炭化物を含んでいた。

《出土遺物》 出土した土器は粗製の深鉢形土器（第22図1、図版8）である。口径23.2cm、底径11.6cm、器高34.9cmで器壁は約0.7cmである。口縁部が1.5cmほどにわたり指でなでられており、胴部にはLR縄文が施されている。全体的にかなり摩耗している。

(4) 石囲炉

SQN13石囲炉（第22図、図版4・8）

《位置》 東側調査区JC65グリッドの北側に位置する。

《確認》 上層にたくさんの巨礫があり、精査中にそれらの巨礫をよせ、地山面で確認した。

《形態》 径が0.55mの円形の石囲炉である。北西に長軸25cm、短軸15cmの楕円形の礫を設置し、東側から南側にかけては二重に礫を配置している。埋土は3層に分かれたが、そのうち第2層より焼土が確認された。屋内炉ではないかとも考えたが、周囲に住居の柱穴や壁は確認できなかった。

《出土遺物》 RL縄文の施文された第22図2（図版8）の土器片が出土した。

(5) 焼土遺構

SN09焼土遺構（第23図）

《位置》 東側調査区JA65グリッドの南側に位置する。

《確認》 精査中に地山面で確認した。

《形態》 南北方向に1.3m、東西方向に0.4mで北側が2つに分かれる形である。深さは地山面より0.2mである。焼土は南側に広がっていた。底面は凸凹している。埋土は、12層に分けられた。

《出土遺物》 なし。

SN23焼土遺構（第23図）

《位置》 東側調査区JM58グリッドのやや北側に位置する。

《確認》 精査中に地山面で確認した。

《形態》 長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形で2カ所深くなっている。深くなっているところで、地山面より0.4mである。焼土は北側から西側にかけて広がっている。埋土は、11層に分けられた。

《出土遺物》 なし。

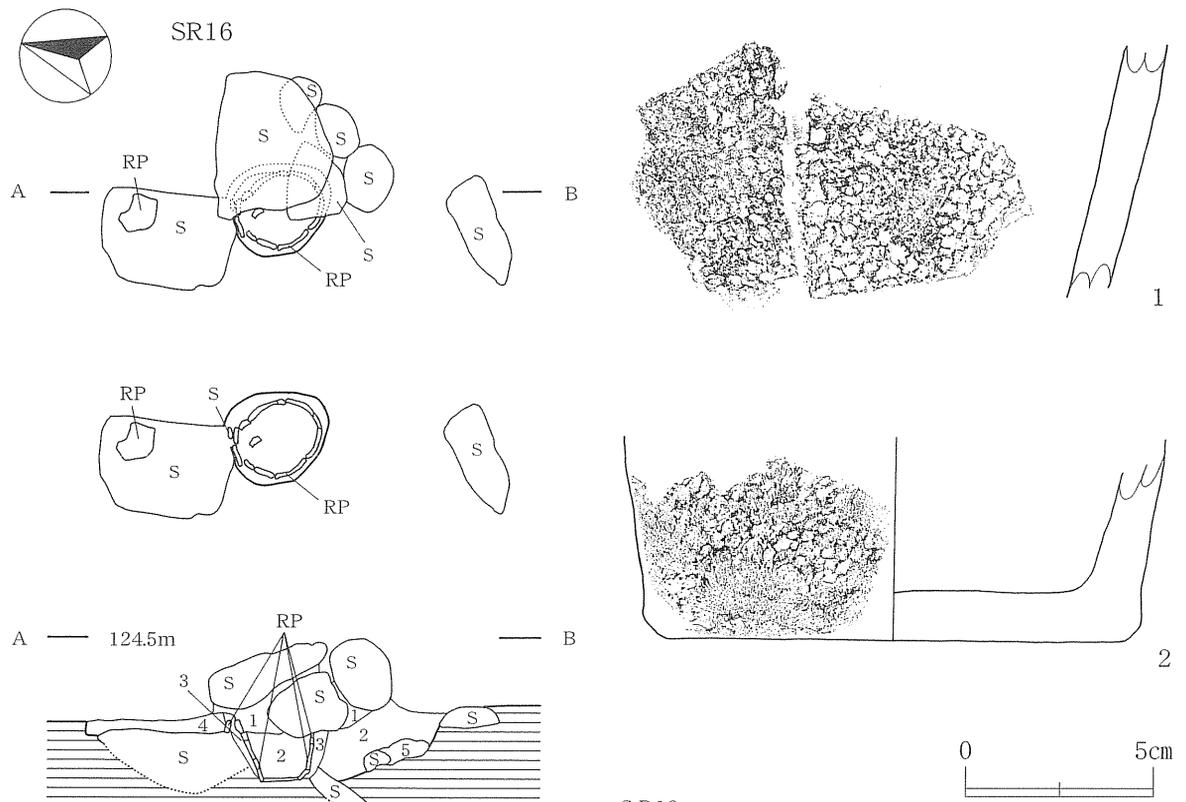
(6) 柱穴様ピット

SKP34柱穴様ピット（第23図）

《位置》 東側調査区KE63・KO63グリッドに位置する。

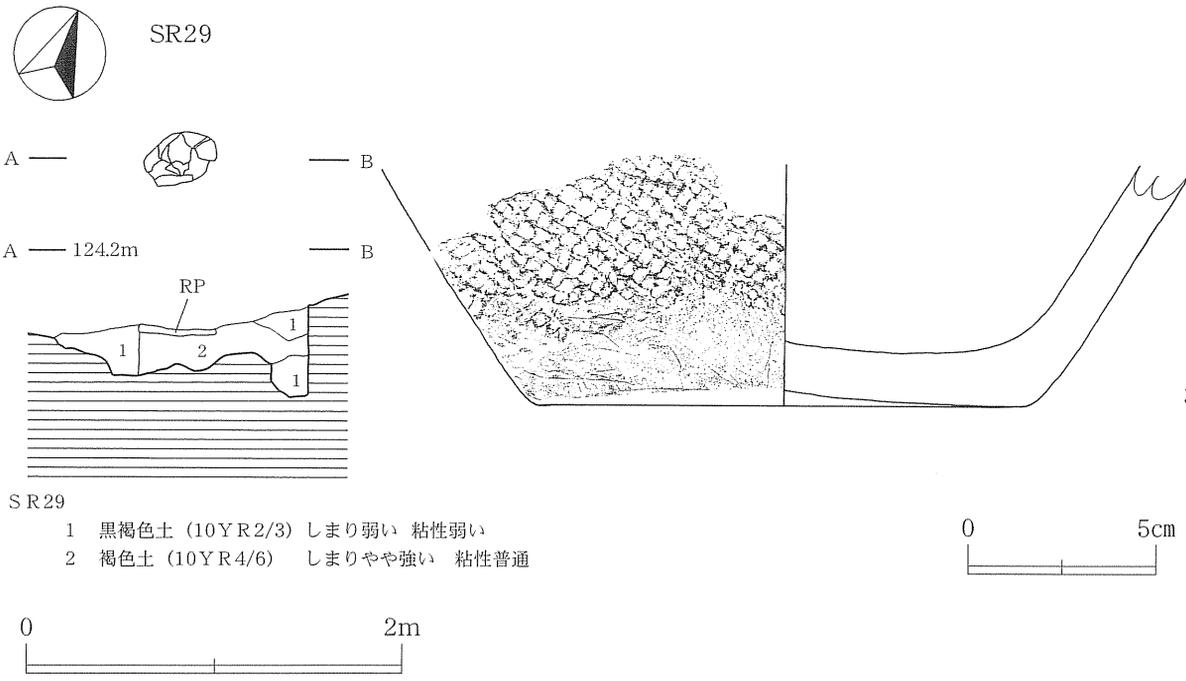
《確認》 精査中に地山面で確認した。

《形態》 径0.45mの円形で、深さは地山面より0.45mである。東側に旧水田暗渠がある。



SR16

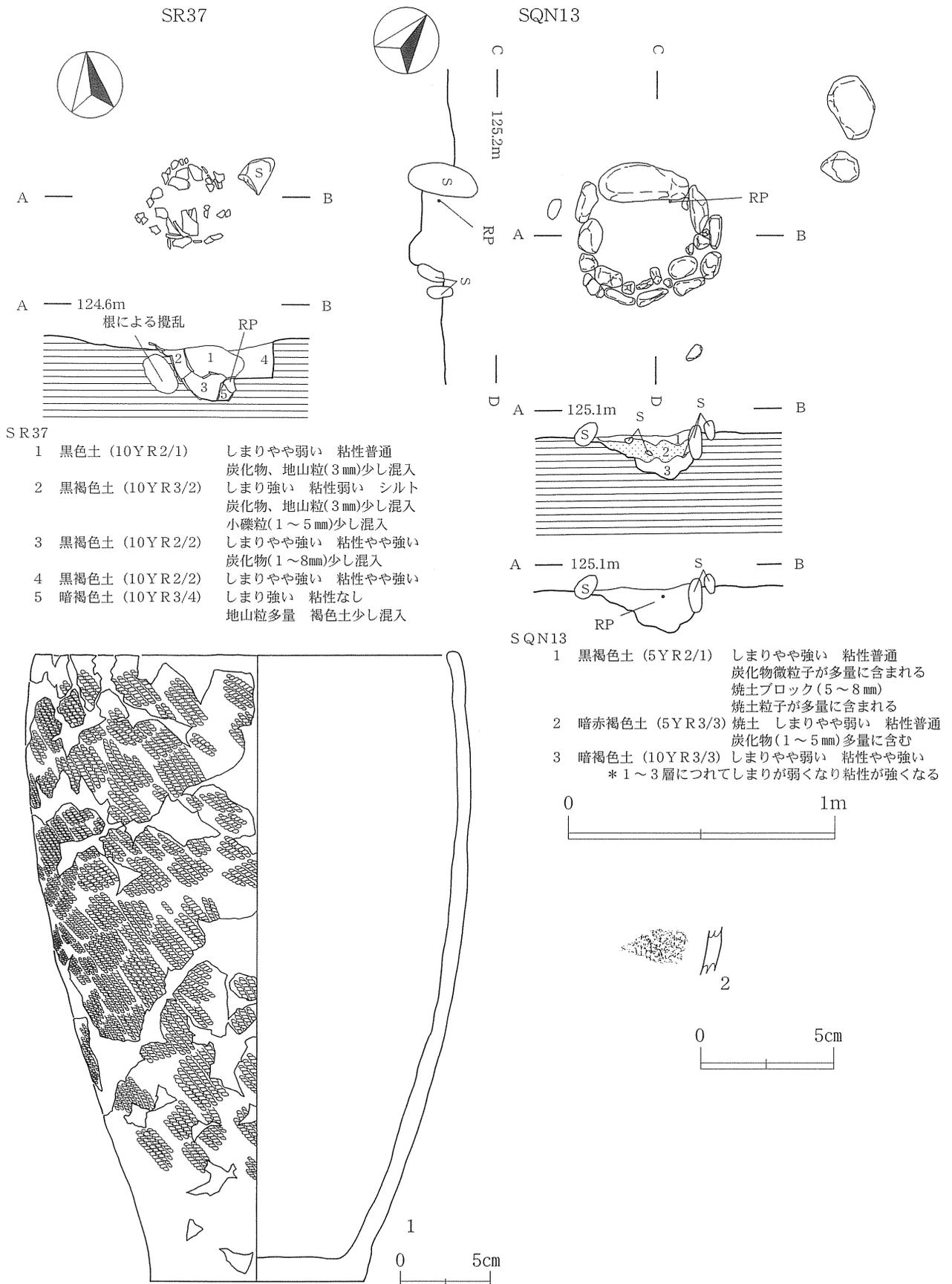
- | | | | |
|---|----------------|---------|-----------------|
| 1 | 黒色土 (10YR2/1) | しまりやや弱い | 粘性やや弱い |
| 2 | 暗褐色土 (10YR3/4) | しまりやや弱い | 粘性やや弱い |
| 3 | 黄褐色土 (10YR2/2) | しまりやや弱い | 粘性やや弱い |
| | | | 地山粒(1mm以下1%)含む |
| 4 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまりやや弱い | 粘性弱い |
| | | | 地山粒(1mm以下1%)含む |
| 5 | 黄褐色土 (10YR5/6) | | 地山礫(3mm程度10%)含む |



SR29

- | | | | |
|---|----------------|---------|------|
| 1 | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり弱い | 粘性弱い |
| 2 | 褐色土 (10YR4/6) | しまりやや強い | 粘性普通 |

第21図 SR16・29土器埋設遺構及び出土遺物



第22図 SR37土器埋設遺構、SQN13石囲炉及び出土遺物

全体的に立ち上がりは急で、壁と底面に礫が露出している。

《出土遺物》 なし。

(7) 性格不明遺構

S X 17 性格不明遺構 (第24図)

《位置》 東側調査区 J F 51・J G 51 グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面で溝状の遺構を確認した。

《形態》 幅0.6m、長さ5.7mの変形した長方形のような形である。北側に古い溝状の遺構があり、その遺構を南側の溝状の遺構が掘り込んでいる。底面に大小さまざまな礫が露出している。

《出土遺物》 なし。

第3節 西側調査区検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構の概要

東側調査区と同じように、昭和40年代のほ場整備の際に地山面まで著しく削平されていた。そのため、遺構確認面は削平された地山面であり、検出遺構に伴う遺物も少なかった。

検出遺構は竪穴住居跡3軒、土坑7基、土器埋設遺構1基、柱穴様ピット3基である。すべて縄文時代に属する。

2. 遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

S I 14 B 竪穴住居跡 (第25図、図版4・8)

《位置》 西側調査区 M J 45・M J 44 グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面より P 1 から P 6 の柱穴を検出した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 地山部分がかなり削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかった。P 3 の柱穴から P 6 の柱穴までの距離は3.5m、P 1 の柱穴から P 4 の柱穴までの距離は3.0mである。

《埋土》 柱穴以外の埋土は確認できなかった。

《柱穴》 柱穴は楕円形が多く、それぞれ長軸0.3m～0.5m、短軸0.2m～0.24m、深さは地山面より0.12m～0.28mである。埋土は、ほとんどが黒褐色土または暗褐色土で地山の粒を含んでいた。

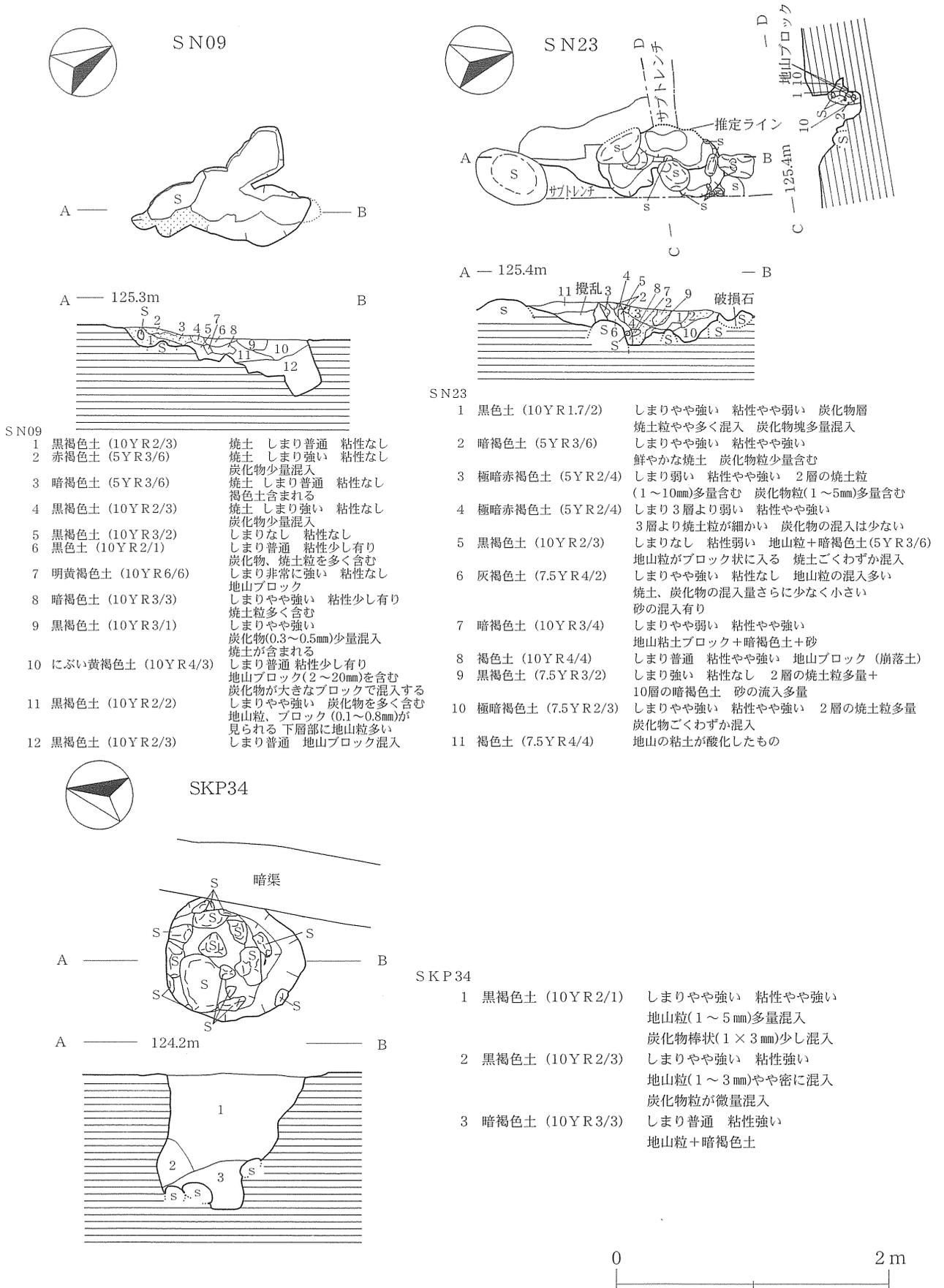
《床面》 確認できなかった。

《炉》 確認できなかった。

《出土遺物》 ピット3の確認面より第25図1 (図版8) の土器片が出土した。縄文のみの文様でかなり摩滅している。

S I 15 B 竪穴住居跡 (第26図、図版4)

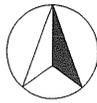
《位置》 西側調査区 M G 45・M F 45 グリッドに位置する。



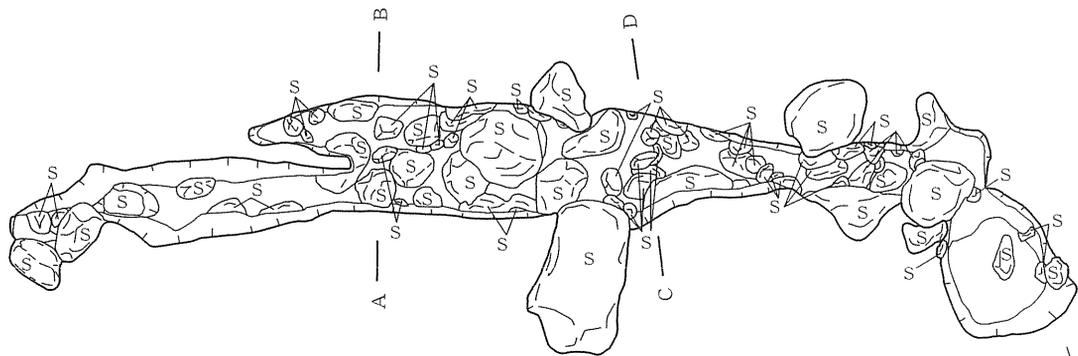
- SN09
- | | | | | |
|----|-------------------|--------------------------|--------------------|-------------------|
| 1 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 焼土 | しまり普通 | 粘性なし |
| 2 | 赤褐色土 (5YR3/6) | 焼土 | しまり強い | 粘性なし |
| 3 | 暗褐色土 (5YR3/6) | 炭化物少量混入 | しまり普通 | 粘性なし |
| 4 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 焼土 | しまり強い | 粘性なし |
| 5 | 黒褐色土 (10YR3/2) | 炭化物少量混入 | しまりなし | 粘性なし |
| 6 | 黒色土 (10YR2/1) | 炭化物、焼土粒を多く含む | しまり普通 | 粘性少し有り |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | しまり非常に強い | 粘性なし | 地山ブロック |
| 8 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまりやや強い | 粘性少し有り | 焼土粒多く含む |
| 9 | 黒褐色土 (10YR3/1) | しまりやや強い | 炭化物(0.3~0.5mm)少量混入 | 焼土が含まれる |
| 10 | にぶい黄褐色土 (10YR4/3) | しまり普通 | 粘性少し有り | 地山ブロック(2~20mm)を含む |
| 11 | 黒褐色土 (10YR2/2) | 炭化物が大きなブロックで混入する | しまりやや強い | 炭化物を多く含む |
| 12 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 地山粒、ブロック(0.1~0.8mm)が見られる | 下層部に地山粒多い | しまり普通 |

- SN23
- | | | | | |
|----|------------------|---------------------|-----------------|-----------------|
| 1 | 黒色土 (10YR1.7/2) | しまりやや強い | 粘性やや弱い | 炭化物層 |
| 2 | 暗褐色土 (5YR3/6) | 焼土粒やや多く混入 | 炭化物塊多量混入 | |
| 3 | 極暗赤褐色土 (5YR2/4) | しまりやや強い | 粘性やや強い | 鮮やかな焼土 |
| 4 | 極暗赤褐色土 (5YR2/4) | 炭化物粒少量含む | しまり弱い | 粘性やや強い |
| 5 | 黒褐色土 (10YR2/3) | 2層の焼土粒(1~10mm)多量含む | 炭化物粒(1~5mm)多量含む | |
| 6 | 灰褐色土 (7.5YR4/2) | しまり3層より弱い | 粘性やや強い | 3層より焼土粒が細かい |
| 7 | 暗褐色土 (10YR3/4) | 炭化物の混入は少ない | しまりなし | 粘性弱い |
| 8 | 褐色土 (10YR4/4) | 地山粒+暗褐色土(5YR3/6) | 地山粒がブロック状に入る | 焼土ごくわずか混入 |
| 9 | 黒褐色土 (7.5YR3/2) | しまりやや強い | 粘性なし | 地山粒の混入多い |
| 10 | 極暗褐色土 (7.5YR2/3) | 焼土、炭化物の混入量さらに少なく小さい | 砂の混入有り | |
| 11 | 褐色土 (7.5YR4/4) | しまりやや弱い | 粘性やや強い | 地山粘土ブロック+暗褐色土+砂 |
| 12 | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり普通 | 粘性やや強い | 地山ブロック(崩落土) |
| 13 | 黒褐色土 (7.5YR3/2) | しまり強い | 粘性なし | 2層の焼土粒多量+ |
| 14 | 極暗褐色土 (7.5YR2/3) | 10層の暗褐色土 | 砂の流入多量 | |
| 15 | 黒褐色土 (10YR2/3) | しまりやや強い | 粘性やや強い | 2層の焼土粒多量 |
| 16 | 褐色土 (7.5YR4/4) | 炭化物ごくわずか混入 | | |
| 17 | 褐色土 (7.5YR4/4) | 地山の粘土が酸化したものの | | |

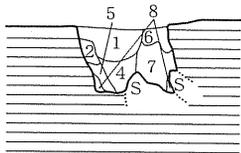
第23図 SN09・23焼土遺構、SKP34柱穴様ピット



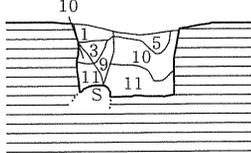
SX17



A — 126.0m — B



C — 126.0m — D

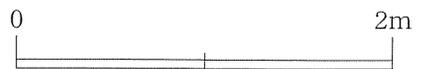


E — 126.0m — F



SX17

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 (10YR2/2)</p> <p>2 黒色土 (10YR2/1)</p> <p>3 褐色土 (10YR4/4)</p> <p>4 褐色土 (10YR4/6)</p> <p>5 暗褐色土 (10YR3/3)</p> <p>6 黒褐色土 (10YR3/2)</p> <p>7 褐色土 (10YR4/6)</p> <p>8 暗褐色土 (10YR3/3)</p> <p>9 黒色土 (10YR2/1)</p> <p>10 褐色土 (10YR4/4)</p> <p>11 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)</p> <p>12 黒色土 (10YR2/1)</p> <p>13 暗褐色土 (10YR3/3)</p> | <p>しまり強い 粘性やや強い
褐色土 (10YR4/4)
微粒子2%混入</p> <p>しまり弱い 粘性やや強い
基本的にこの土が輪のように
入り込んでいる</p> <p>しまりやや強い 粘性弱い
1層の黒褐色土極小粒1%混入</p> <p>しまりやや弱い 粘性やや強い</p> <p>しまり弱い 粘性やや強い
褐色土大粒5%混入</p> <p>しまりやや強い 粘性やや強い
褐色土中粒5%混入</p> <p>しまり弱い 粘性強い</p> <p>しまり弱い 粘性強い</p> <p>しまり弱い 粘性やや強い
褐色土中粒5%混入</p> <p>しまり弱い 粘性やや強い
全体的に3層より明るい
黒褐色土小粒1%混入 (上部)</p> <p>+暗褐色土 (10YR3/3)
2つの土が均一的にまじっている</p> <p>しまり強い 粘性弱い
全体的に灰色がかっている
褐色土 (10YR4/6) 小粒3%混入
サビ状のものが5%混入</p> <p>しまり弱い 粘性弱い</p> |
|--|---|



第24図 SX17性格不明遺構

- 《確認》 精査中に地山面よりP 1からP 8の柱穴を検出した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 地山部分がかかなり削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかった。P 3の柱穴からP 8の柱穴までの距離は4.0m、P 1の柱穴からP 5の柱穴までの距離は3.8mである。
- 《埋土》 柱穴以外の埋土は確認できなかった。
- 《柱穴》 柱穴は楕円形が多く、それぞれ長軸0.4m～0.6m、短軸0.2m～0.4mであり、深さは地山面より0.24m～0.4mである。埋土は、黒褐色土または暗褐色土で地山の粒を含んでいた。
- 《床面》 確認できなかった。
- 《炉》 確認できなかった。
- 《出土遺物》 なし。

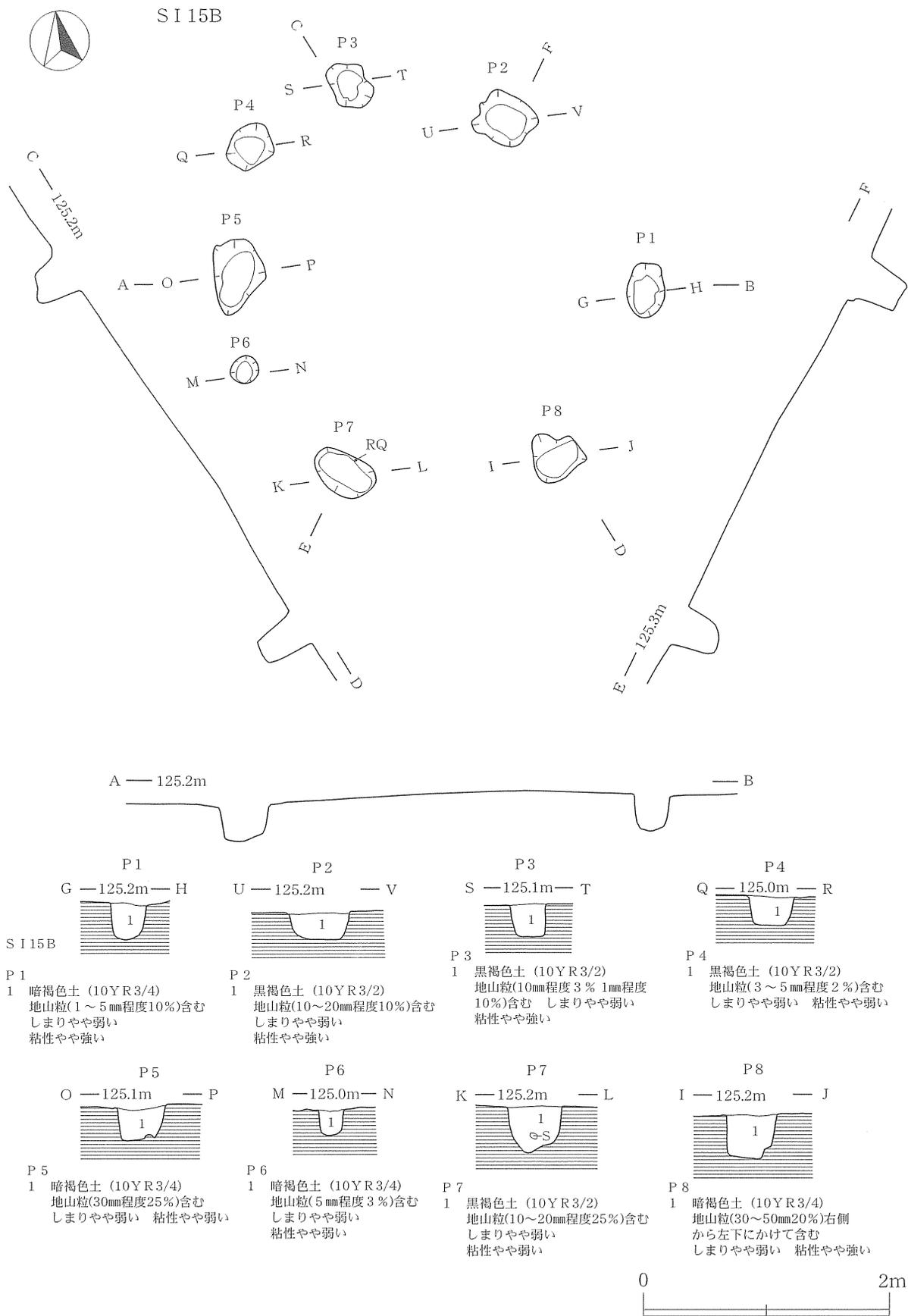
S I 16 B 竪穴住居跡（第27図、図版5）

- 《位置》 西側調査区MN42・43、MO42・43グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面よりP 1からP 7の柱穴を検出した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 地山部分がかかなり削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかった。P 1の柱穴からP 4の柱穴までの距離は4.2m、P 2の柱穴からP 6の柱穴までの距離は4.0mである。
- 《埋土》 柱穴以外の埋土は確認できなかった。
- 《柱穴》 柱穴は楕円形が多く、それぞれ長軸0.26m～0.4m、短軸0.2m～0.26m、深さは地山面より0.2m～0.3mである。埋土は、黒褐色土や暗褐色土などで地山の粒を含んでいた。
- 《床面》 確認できなかった。
- 《炉》 確認できなかった。
- 《出土遺物》 なし。

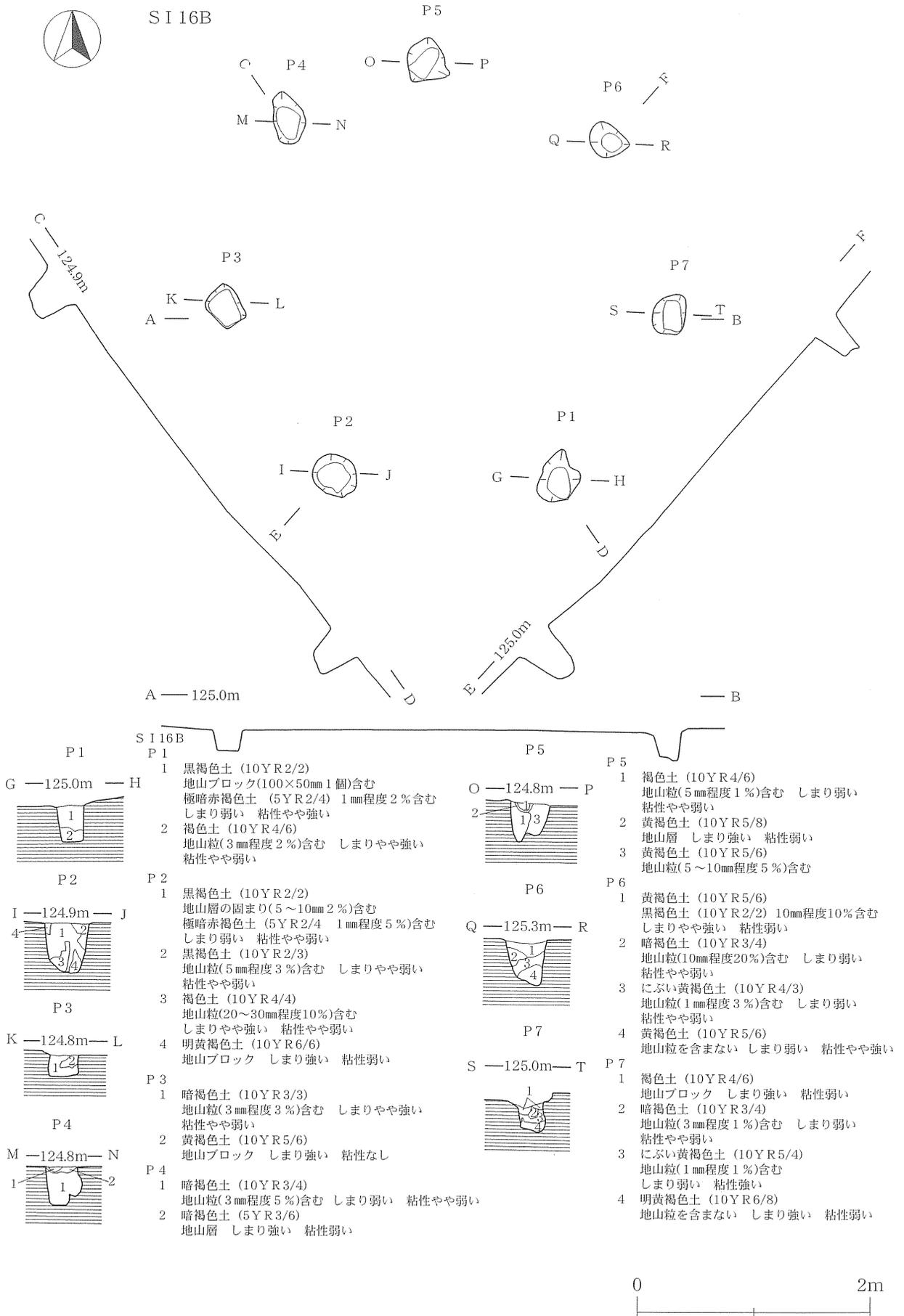
(2) 土坑

S K 2 B 土坑（第28図、図版5・8）

- 《位置》 西側調査区MM45グリッドの北側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 S K 34 Bを埋めて、またはS K 34 Bが埋まった後に本土坑を掘り込んでいる。
- 《規模と平面形》 長軸1.6m、短軸1.35mの楕円形で、深さは地山面より0.4mである。西側の沢に傾斜している。
- 《埋土》 3層に分かれた。
- 《壁》 全体的にゆるやかに立ち上がっている。
- 《底面》 鍋底状になっている。
- 《出土遺物》 確認面より土器片4点と土坑内より剥片が2点出土した。第28図1（図版8）は、



第26図 SI 15B 竪穴住居跡



第27図 SI 16B 竪穴住居跡

L R 縄文を施している。

S K 3 B 土坑（第28図、図版5・8）

- 《位置》 西側調査区ML45グリッド北側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.65m、短軸0.5mの楕円形で、深さは地山面より0.3mである。
- 《埋土》 6層に分かれた。
- 《壁》 東側はゆるやかな立ち上がりであるが、西側は急な立ち上がりになっている。
- 《底面》 やや尖っている。
- 《出土遺物》 確認面より土器片11点を出土した。第28図3（図版8）は撚糸文を施文した土器片である。

S K 4 B 土坑（第29図、図版5・8）

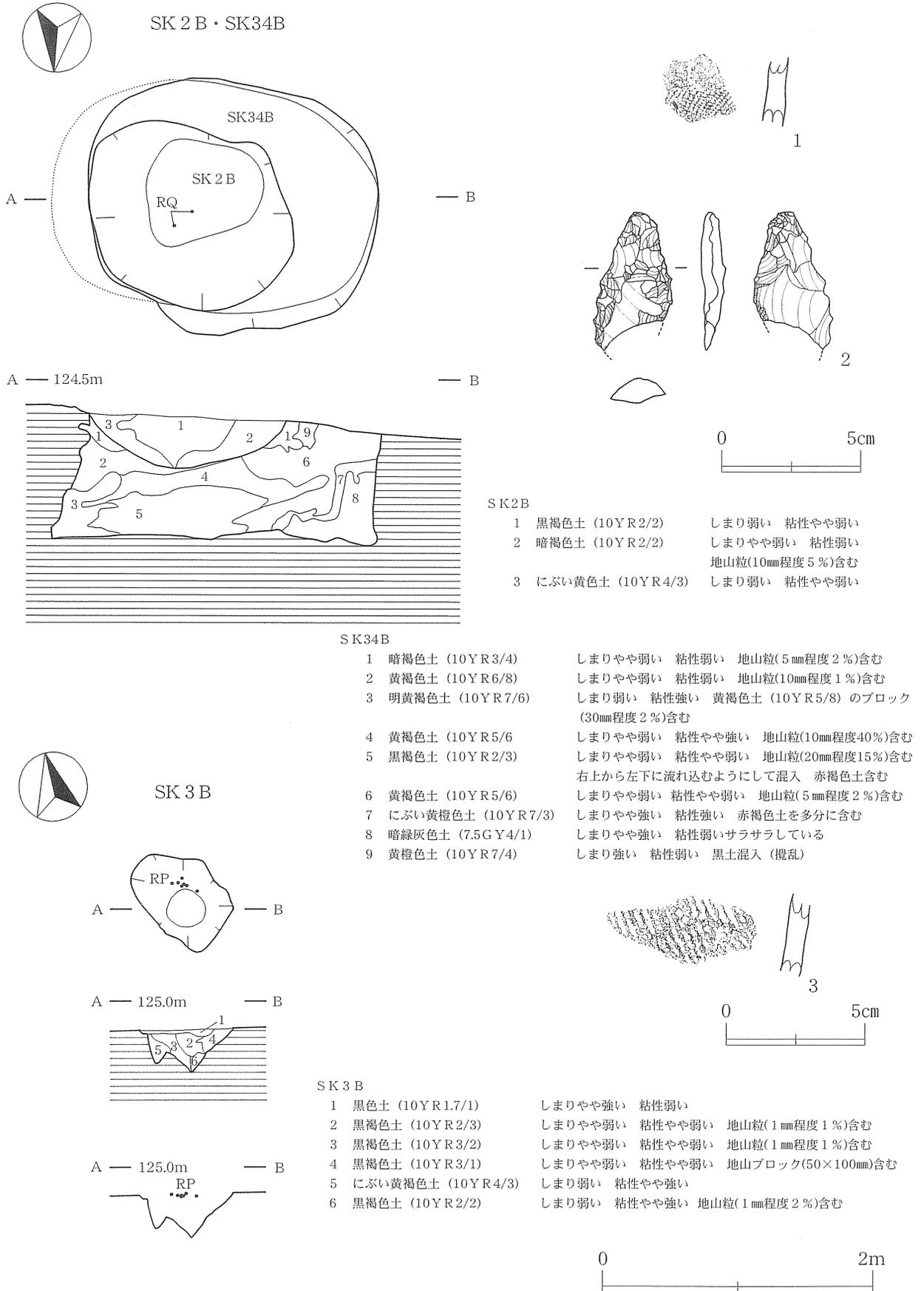
- 《位置》 西側調査区ML46グリッドほぼ中央に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸2.2m、短軸0.7mの不整な楕円形で、南側が浅く地山面より0.1m程度で北側が0.3mと深くなっている。土坑の北側に、長軸0.18m、短軸0.1m、深さ0.15mのピットがある。
- 《埋土》 3層に分かれた。
- 《壁》 南側はゆるやかであるが、それ以外は急な立ち上がりである。
- 《底面》 平坦でしまっている。
- 《出土遺物》 確認面で、土器片が4点出土した。第29図1（図版8）は、深鉢形土器の口縁部破片で、第29図2（図版8）は胴部破片である。いずれもR L 縄文が施文されている。

S K 11 B 土坑（第29図、図版5）

- 《位置》 西側調査区MH43グリッドほぼ中央に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面でS K 12 B、S K 13 Bと並んであるのを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 径1.1mの円形で、深さは地山面より0.28mである。
- 《埋土》 1層である。
- 《壁》 全体的にゆるやかに立ち上がっている。
- 《底面》 鍋底状を呈し、底面中央に径0.25m、深さ0.2mのピットがあり、ピットの底は平坦で堅くしまっている。
- 《出土遺物》 なし。

S K 12 B 土坑（第29図）

- 《位置》 西側調査区MH44・MI44グリッド南側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。



第28図 SK 2B・34B・3B土坑及び出土遺物

- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 径0.9mの円形で、深さは、地山面より0.1mである。
- 《埋土》 1層である。
- 《壁》 東側は急な立ち上がりであり、西側はゆるやかである。
- 《底面》 平坦で堅くしまっており、底部中央に径0.5m、深さ0.2mのピットがある。
- 《出土遺物》 なし。

S K 13 B 土坑（第29図、図版5）

- 《位置》 西側調査区M I 44グリッドの東側に位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 径0.95mの円形で、深さは、地山面より0.28mである。
- 《埋土》 3層に分けられた。
- 《壁》 全体的にやや急な立ち上がりになっている。
- 《底面》 堅くしまっており、底面のやや西側に径0.4m、深さ0.25mのピットがある。
- 《出土遺物》 なし。

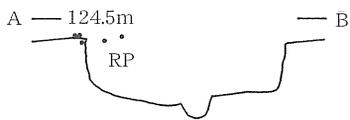
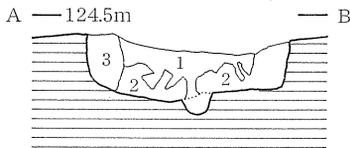
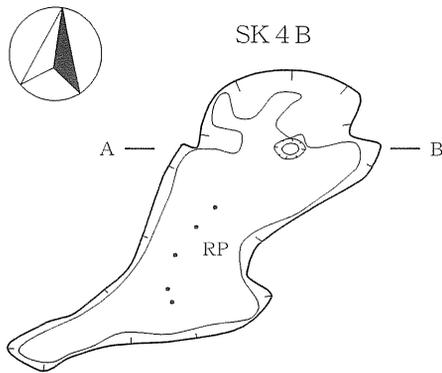
S K 34 B 土坑（第28図、図版8）

- 《位置》 西側調査区MM45グリッドの北側に位置する。
- 《確認》 S K 2 Bの完掘後、この土坑の下より検出した。
- 《重複》 本土坑をS K 2 Bが掘り込んでいる。
- 《規模と平面形》 長軸2.1m、短軸1.8mの楕円形で、深さは地山面より1mである。
- 《埋土》 9層に分けられ、土坑中央部分に西側から東側に黒褐色土が流れ込んでいた。
- 《壁》 全体的に急な立ち上がりで、東側は内傾しながら立ち上がっている。
- 《底面》 平坦で堅くしまっている。
- 《出土遺物》 第28図2（図版8）の石器が1点出土した。折損しており器種は不明である。周縁に押圧剥離が見られる。

(3) 土器埋設遺構

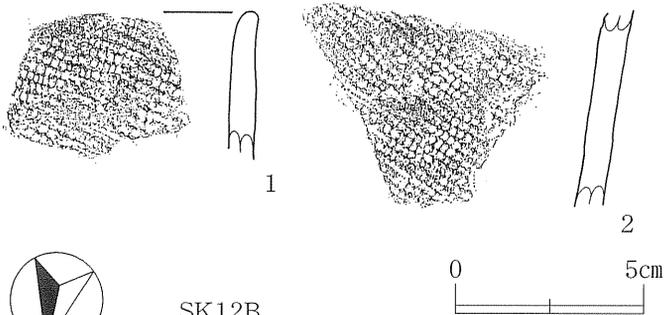
S R 1 B 土器埋設遺構（第30図、図版5・8）

- 《位置》 西側調査区M J 44グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に、地山面より土器片と掘り込みを確認した。土器は、口縁部が削平されており、胴部が東側半分には埋設されているだけであった。その後、西側にも土器片を出土した。掘り込みは、黒褐色土で径0.1m程度である。
- 《形態》 土器内埋土は黒褐色土のみであった。西側にその黒褐色土が流れ込んでおり、底は盛り上がっていた。この土器は、当初から下半を欠失して正位に埋設されていた可能性がある。
- 《出土遺物》 出土した土器は、口縁部と底部を欠失し、胴部が無文の深鉢形土器（第30図1、図版8）である。丁寧に磨かれており、焼成もよい。

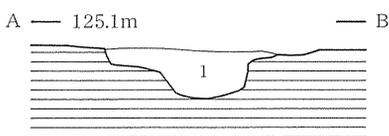
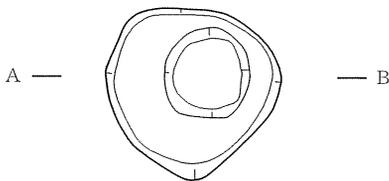


SK4B

- | | |
|---------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色土 (10YR3/1) | しまり弱い 粘性弱い
地山粒(10~30mm程度3%)含む |
| 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/2) | しまりやや弱い 粘性やや弱い |
| 3 黒褐色土 (10YR3/2) | しまりやや弱い 粘性やや弱い
地山粒(10~30mm程度10%)含む |

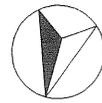


SK12B

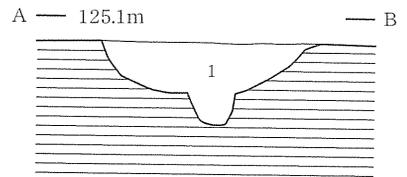
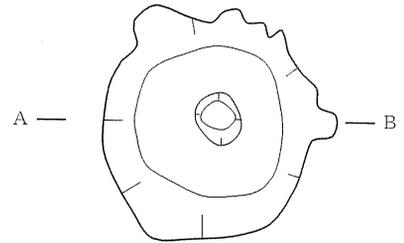


SK12B

- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1 黒色土 (10YR2/1) | しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(3mm程度2%)含む |
|-----------------|--------------------------------|

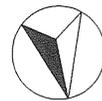


SK11B

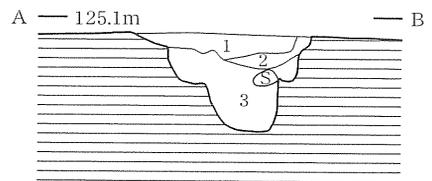
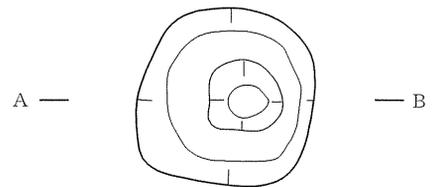


SK11B

- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1 黒色土 (10YR2/1) | しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(5mm程度2%)含む |
|-----------------|--------------------------------|



SK13B



SK13B

- | | |
|------------------|-----------------------------------|
| 1 黒色土 (10YR2/1) | しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(2mm程度1%)含む |
| 2 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(3mm程度2%)含む |
| 3 黒褐色土 (10YR2/2) | しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(5~10mm程度2%)含む |



第29図 SK4B・11B・12B・13B土坑及びSK4B出土遺物

(4) 柱穴様ピット

S K P 19 B 柱穴様ピット (第30図)

《位置》 西側調査区MM43グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面で確認した。

《形態》 長軸0.4m、短軸0.25mの楕円形で、深さは地山面より0.2mである。鍋底状になっており、全体的にゆるやかな立ち上がりである。

《出土遺物》 なし。

S K P 21 B 柱穴様ピット (第30図)

《位置》 西側調査区MM43グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面で確認した。

《形態》 径0.35mの円形で、深さは地山面より0.6mである。立ち上がりが急で、東側の壁に礫が露出していた。

《出土遺物》 なし。

S K P 33 B 柱穴様ピット (第25図)

《位置》 西側調査区M J 45グリッド南側に位置する。

《確認》 精査中に地山面より柱穴6基とともに検出した。当初SI14Bの竪穴住居跡の柱穴の一つと考えたが、完掘後に他の柱穴よりかなり深いことから竪穴住居跡のものではないと判断した。

《形態》 長軸0.35m、短軸0.2mの楕円形で、深さは地山面より0.3mである。壁の立ち上がりが急で、底面は平坦で堅い。

《出土遺物》 なし。

第4節 東側調査区遺構外出土遺物

出土した遺物は、土器・土製品・石器・石製品である。

1. 土器

【第I群土器】 縄文時代早期末葉から前期初頭の土器 (第31図1～18、図版9)

1類：(第31図1～17)

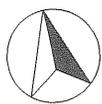
縄の回転施文によって文様が施された、所謂表裏縄文の土器である。1は深鉢形の口縁部破片、その他は胴部破片である。

2類：(第31図18)

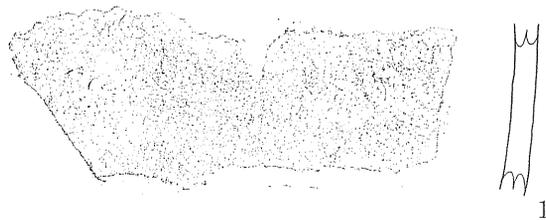
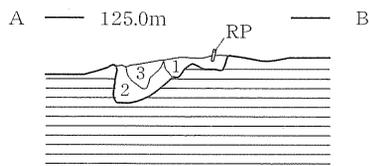
丸底を呈する深鉢形土器である。器壁が分厚く、胎土に植物繊維を多量に含んでいる。底部から胴部の順にLR縄文を施文している。

【第II群土器】 縄文時代前期の土器 (第32図19～51、図版10)

胎土に繊維を含む深鉢形土器である。19～24・26～45は縄文のみの文様であり、26と27は同一個体である。46～48は縦位に細い撚糸文を施し、その後方向を変えて撚糸文を施している。49は、縦位と横位の撚糸文を施文している。25・50・51は結束のある羽状縄文である。

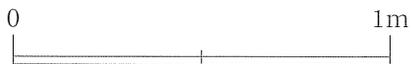


SR1B

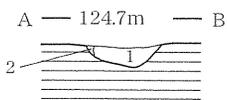


SR1B

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱い 粘性やや弱い
地山粒(1mm以下0.1%)含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱い 粘性やや強い
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱い 粘性やや弱い
地山粒(3mm以下5%)含む

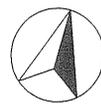


SKP19B

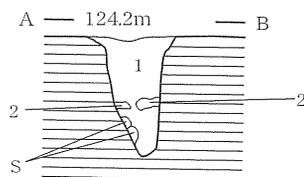


SKP19B

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや強い 粘性弱い
地山粒(5mm程度2%)含む
- 2 明黄褐色土 (10YR6/8) 地山ブロック しまり強い
粘性弱い



SKP21B



SKP21B

- 1 黒色土 (10YR2/1) しまり弱い 粘性やや強い
地山粒(1mm程度3%)含む
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) しまり弱い 粘性やや強い
地山ブロック



第30図 SR1B土器埋設遺構及び出土遺物、SKP19B・21B柱穴様ピット

【第Ⅲ群土器】 縄文時代中期の土器（第33図52～第37図110、第45図309～325、図版10～13・16）

1類：（第33図52）

4個の大形の弁状突起を持つ深鉢形土器である。口唇外縁と頸部に縄の側面圧痕を施文した太い隆帯を巡らし、三角状隆線文で区画している。隆線上にも、縄の側面圧痕が緻密に施文されており、区画内部には縄の側面圧痕による爪形文を充填している。

2類：（第33図53～58、61、66～68）

細い粘土紐の隆線文を主要文様として施文する深鉢形土器である。山形突起の先端部分が2つに分かれる口縁のもの（53・54）、ゆるやかな波状口縁を呈するもの（55）、平縁のもの（56～58、61）がある。66～68は胴部破片であり、縦位に粘土紐を貼り付けている。

3類：（第34図69～76、第35図77～79、81～第36図98）

沈線文を主要文様帯として施文する深鉢形土器である。粘土紐の隆帯文と沈線文を施しているもの（69～79、81・83）と沈線文のみのももの（82、84～98）がある。山形突起の土器や波状口縁の土器が多く、平縁のものは少ない。72は、山形突起の中央部分に小孔を有している。90は横位に棒状工具による円形刺突文を施文している。

4類：（第33図59～65、第35図80、第36図99～101）

沈線文や貼付文を施文する土器である。60は、口唇外縁に円形刺突列を施文し、口縁に平行に粘土紐を貼り付け、その下部に横走る渦巻隆線を施文している口縁部破片である。59と80は同一個体である。99は、口縁部が内湾する小形の深鉢形土器で、口唇から縦位に粘土紐の貼付文を垂下させている。100、101とも内湾する浅鉢の口縁部破片で、100は口縁部に沈線文を、101は口縁部に貼付文を施している。

5類：（第37図102・103）

渦巻文を主体とする土器である。102は、口唇外縁に粘土紐を貼り付けし、口縁部には横位に4条の沈線文を、胴部には沈線による縦位の渦巻文を施している深鉢形土器である。103は、注口部周囲に細い粘土紐を渦巻状に貼付した注口土器である。注口上部に貫通する小孔を有する。

6類：（第37図104～108）

口唇外縁に幅広な断面凹状の粘土紐を巡らした土器である。104は、胴部の膨らむ小形の深鉢形土器であり、その他は深鉢形土器の口縁部破片である。

7類：（第37図109・110）

縄文のみ土器である。109は山形突起を有する小形の深鉢形土器である。110は、アスファルトが付着している深鉢形土器の胴部破片である。

8類：（45図309～314）

縄文を地文とし、沈線で文様を施している土器である。

9類：（45図315～325）

縄文のみ、または無文の土器である。

【第Ⅳ群土器】 縄文時代後期の土器（第37図111～第45図306、図版13～15）

1類：（第37図111～第41図226）

平行沈線文、多条沈線文、渦巻文、縄の側面圧痕や貼付粘土紐などで区画し、磨消を施した土器

である。200は、沈線でクランク形に区画し、その中をていねいに磨消を施している土器である。クランク形の交点には、棒状工具で施した刺突文を有する。

2類：(第41図227～第42図269)

沈線文を施文し、磨消を施していない土器である。259は、口縁部に太い粘土紐の貼付を施し、胴部には縦位に細い粘土紐を貼り付けて区画している。区画内には、楕円形の沈線文を配している。266・267は、撚糸文を地文とし沈線を施している土器である。ボタン状の貼付を有する。

3類：(第42図270～第43図281)

撚糸文を施文した土器である。270・273は、折り返し口縁の土器であり、270の折り返し部分には、方向の異なる撚糸文を施文している。274～281は、網目状撚糸文を施した土器である。

4類：(第43図282～288)

粘土紐による貼付文を主要文様にする土器である。

5類：(第43図289～第44図298)

縄文だけを施した土器である。289は、口唇外縁に刻目を施している。

6類：(第44図299～第45図306)

無文の土器である。

【第V群土器】 縄文時代晩期の土器 (第45図307・308、図版15)

入組工字状文の施文された土器である。307は、壺形土器の口縁部である。口縁部上端には、陽刻技法を用いて入組工字状文が施されている。また、口唇内縁には1条の沈線を巡らしている。308は、高台付土器で入組工字状文を施文している。

【第VI群土器】 (第46図326～334、図版16)

土器底部を一括した。326～328は簾状圧痕、329は縄文の圧痕が見られる。331は、底部が張り出している。332は、高台付土器の底部であり、333は上げ底の土器である。334の表面には、赤色顔料が塗られている。

2. 土製品

土偶 (第46図335、図版16)

頭部、体部下半、腕部を欠いており、体部上半のみの破片である。2つの乳房を持ち、胸元から腹部に貫通孔を有している。体部両面には縄の側面圧痕を配している。

円盤状土製品 (第46図336～344、図版16)

土器片を丸く打ち欠いて使用したもので、いわゆる「メンコ」と呼ばれる土製品である。

3. 石器

石鏃 (第46図345～第47図348、図版17)

石鏃の出土は4点と少なかった。345・346は尖基鏃であり、347・348は円基鏃である。

石槍 (第47図349～358、図版17)

石槍は10点出土したが、すべて木葉形である。349・351・357は基部が折損している。349は、両面調整され非常に薄い。

石錐 (第47図359～第48図379、図版17)

石錐は28点出土したが、全体的に錐部が短い。

石匙（第48図380～第50図399、図版17～18）

石匙は20点出土した。380～395は縦型石匙であり、396～399は横型石匙である。385のつまみ部分には、アスファルトが付着している。

石篋（第50図400～第54図467、図版18）

石器の中でもっとも多く、103点出土した器種である。400～405は頭部が尖り刃部に向けて大きく開いているもので、400～402は円刃、403・404・451は直刃、405は偏刃である。406～450は、頭部にやや幅のあるもので、406～439・451は円刃、440～443は直刃、444～450は偏刃である。452～454は楕円形に近い形である。455～467は、頭部が折損しており刃部のみである。

トランシェ様石器（第55図468～第57図493、図版18）

剥片を取り出す際の剥離によって生じた鋭い縁辺や、自然面をそのまま刃部としたもので、26点出土した。刃部は直刃で、468～474は側縁が直線になるもの、475～477は側縁がくびれるもの、478～484は側縁が膨らみをもつものである。485～493は、側縁の片方がくびれもう一方が膨らむものである。

打製石斧（第57図494～第60図530、図版19）

打製石斧は50点出土した。494～497は頭部が尖り刃部に向けて大きく開くものである。494・495は円刃であり、496・497は偏刃である。498～521は頭部にやや幅のあるもので、498～512は円刃、513・514は直刃、515～521は偏刃である。522は楕円形に近い形である。

磨製石斧（第61図531～538 図版19）

磨製石斧は8点出土した。531は乳房状磨製石斧、532・533は定角式磨製石斧である。536は表面のみ研磨されており、裏面は自然石のままである。534～538は頭部が折損している。534・535には使用痕が見られる。

スクレイパー（第61図539～第62図558、図版19）

スクレイパーは35点出土した。539～544、546～554はサイドスクレイパーである。また、555～557はノッチドスクレイパー、545・558はラウンドスクレイパーである。558は両面とも精密に調整されている。

石錘（第63図559～561、図版19）

3点出土しているが、平面形が楕円形あるいは円形を呈するほぼ扁平な礫を素材とし、両面からの打ち欠きにより抉りを入れ完成させている。

石皿（第63図562、図版20）

欠損しているが、使用面の縁辺がほぼ垂直に立ち上がり、縁取りされている。1点のみ出土した。

凹石（第63図563～第64図564、図版20）

礫材の面に敲打による凹を有する石器である。2点出土した。

石核（第64図565～第65図568、図版20）

石核は40点出土しており、そのほとんどが頁岩である。石核と剥片の接合作業を行ったが、接合できるものはなかった。

4. 石製品

石冠（第65図569・570、図版20）

石冠は2点出土している。いずれも頭部が尖っており、基底部は長方形または楕円形を呈する。569の石質は緑色泥岩で、570は閃緑岩である。どちらも、全面がていねいに磨かれている。

球状の磨石（第65図571～第66図572、図版20）

いずれも石質は砂岩である。風化が著しくひび割れている。

線刻礫（第66図573、図版21）

折損しているが、中央部分に小孔を有し、両面に4本の線刻と周辺に刻目を施している。

垂飾品（第66図574、図版21）

折損しているが、中央部に円形の孔を有し、各周辺に3本ずつ刻目を施している。

不明（第66図575、図版21）

底部が半円状で頭部は尖っており、磨られた跡がある。石質は、珪化木である。

第5節 西側調査区遺構外出土遺物

出土した遺物は、土器・石器で出土量はきわめて少ない。

1. 土器

第66図1～11は後期の土器（図版21）である。1～7は、沈線文主体の土器である。8、11は網目状撚糸文、9は撚糸文を施文している。10は縄文のみを施文している。

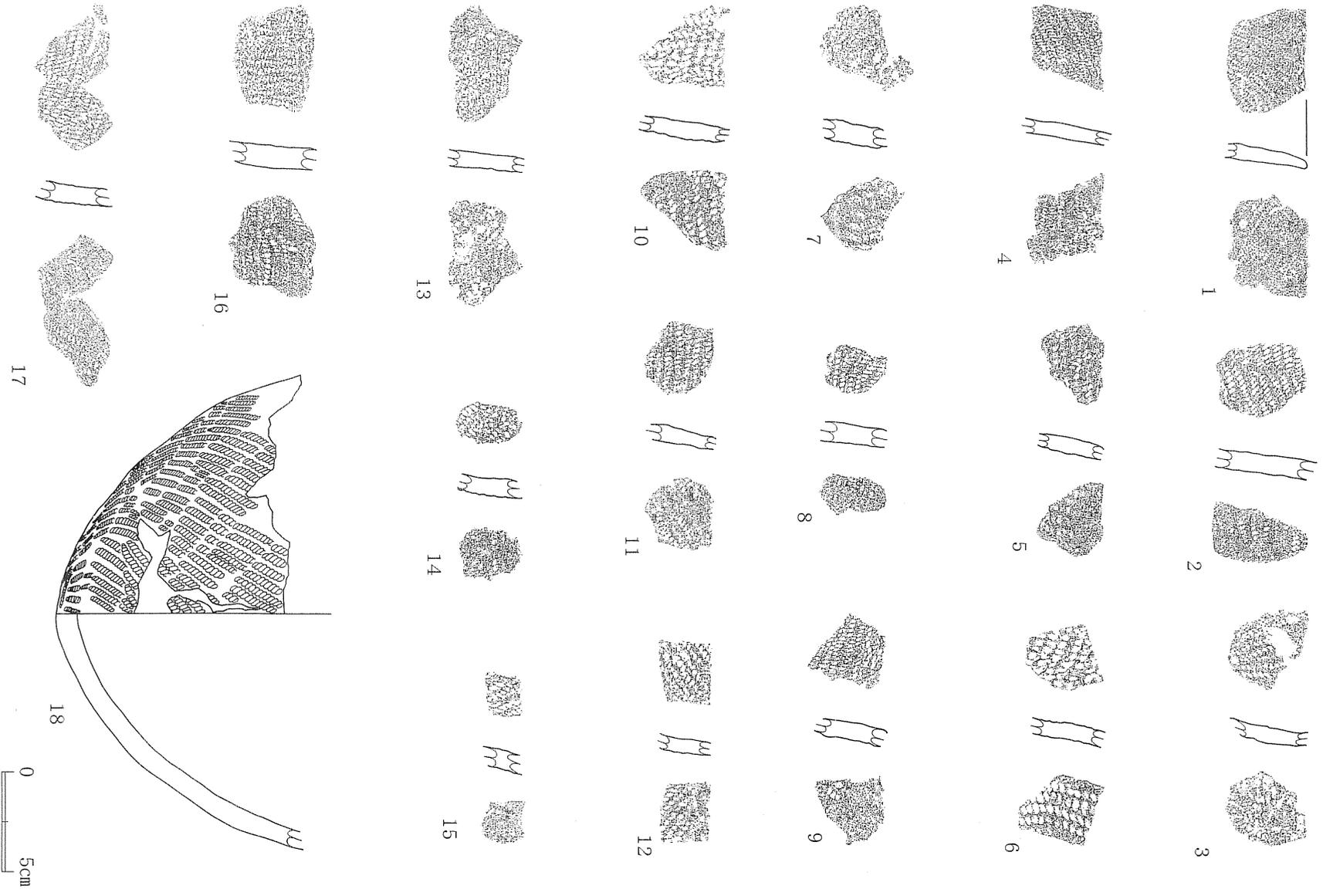
2. 石器

石篋（第66図12、図版21）

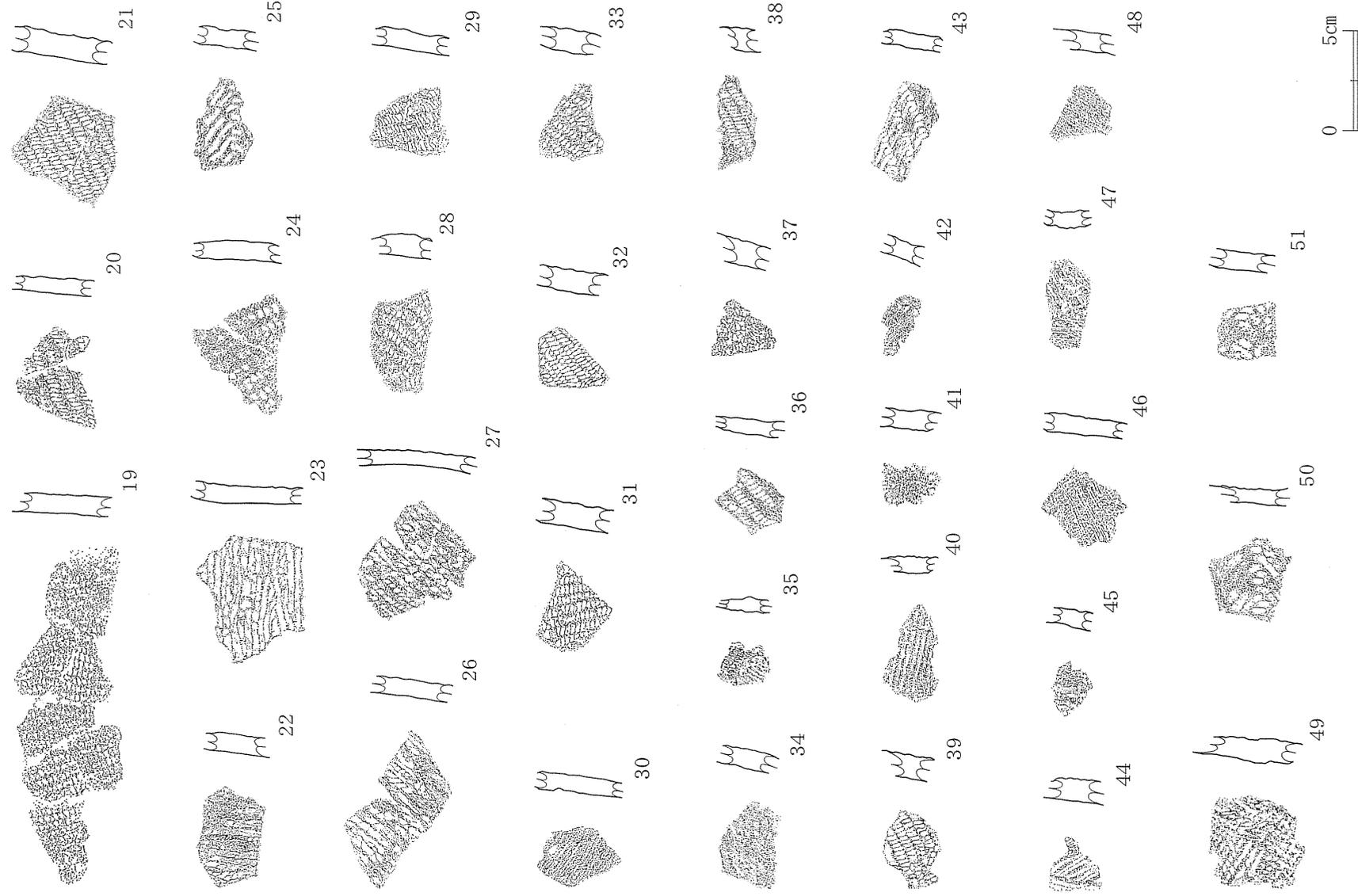
1点のみの出土である。頭部に幅があり、裏面側縁部にも調整を施している。

スクレイパー（第66図13、図版21）

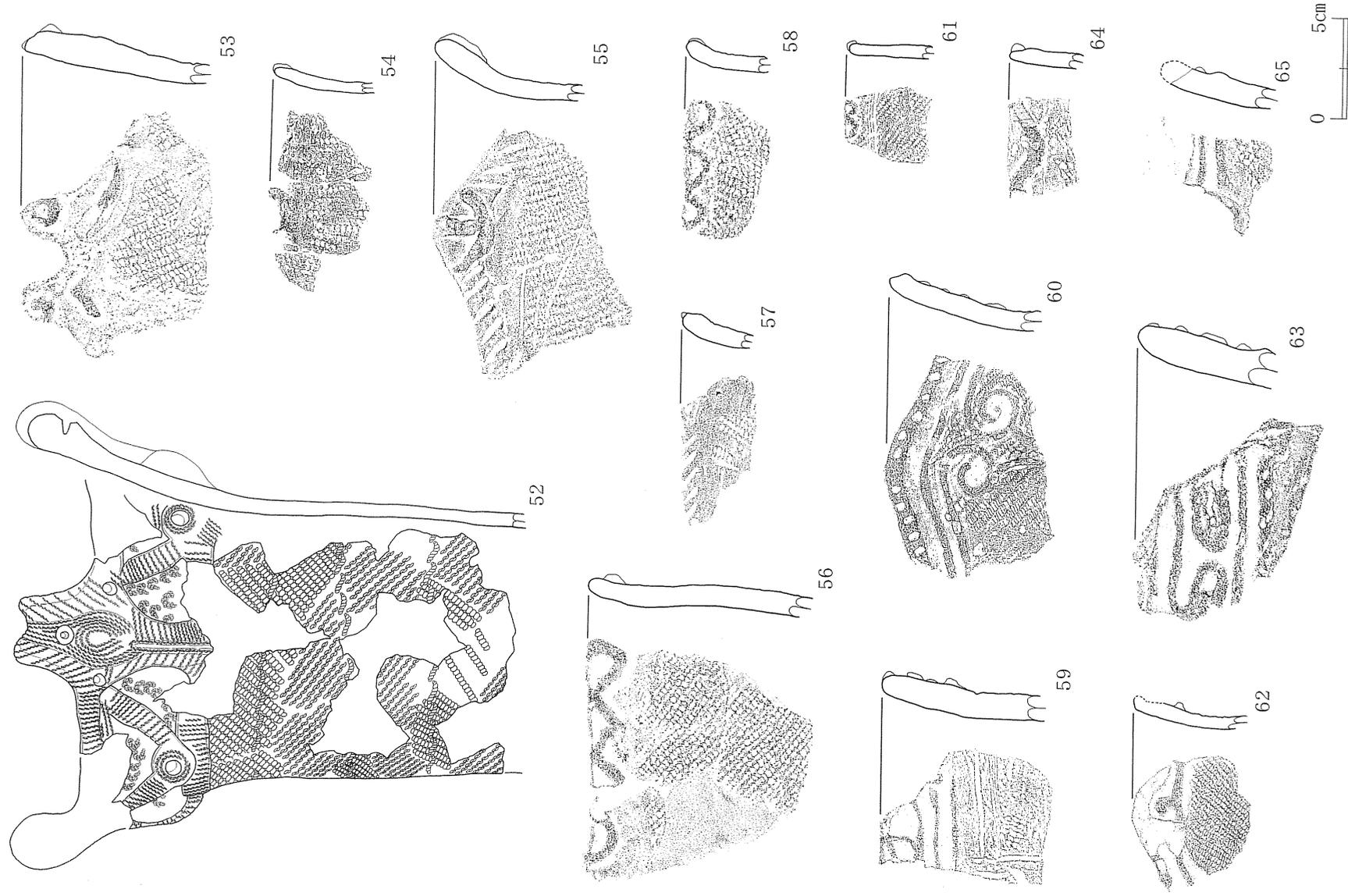
エンドスクレイパーである。折損している。



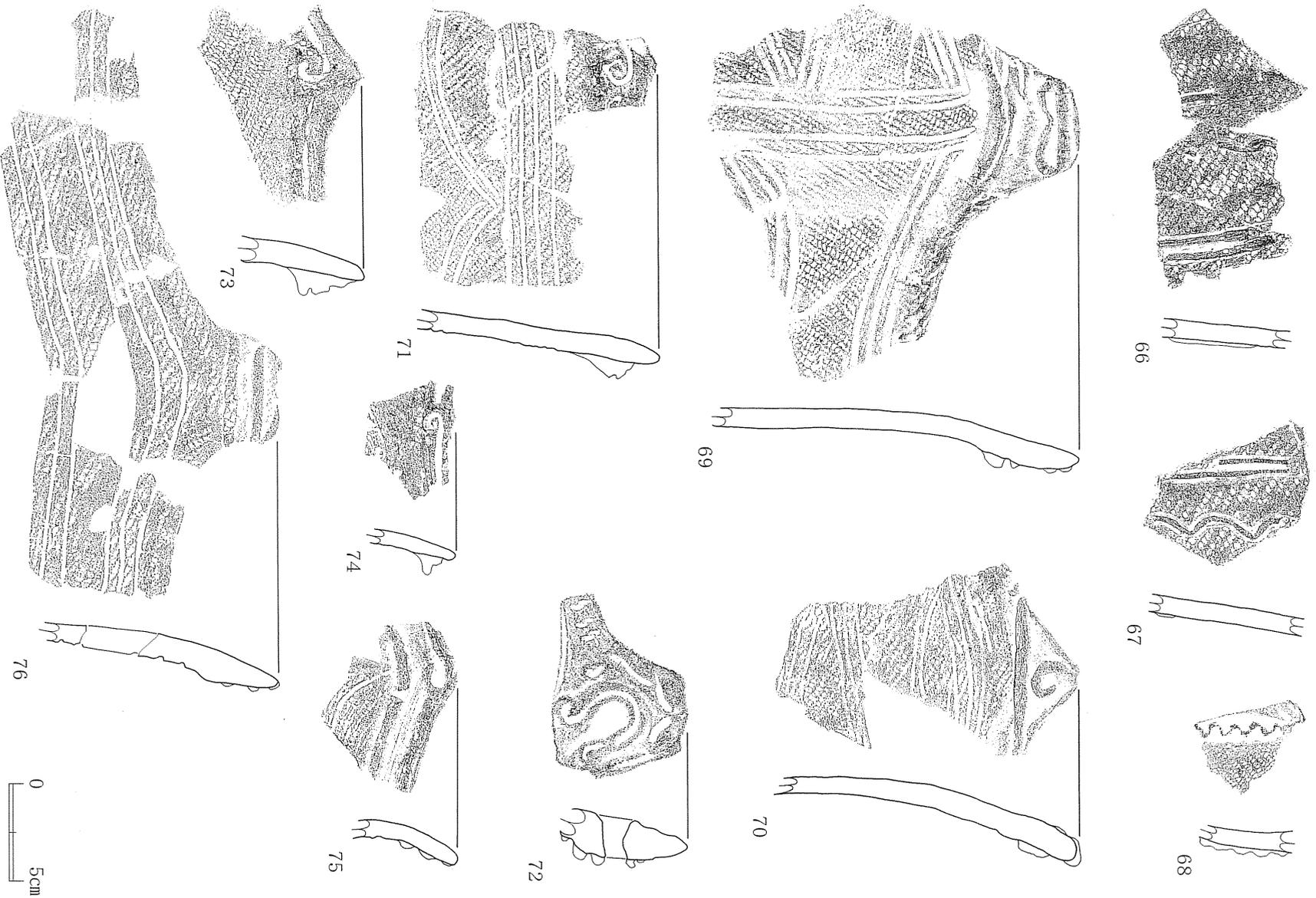
第31図 東側調査区遺構外出土遺物 (1)



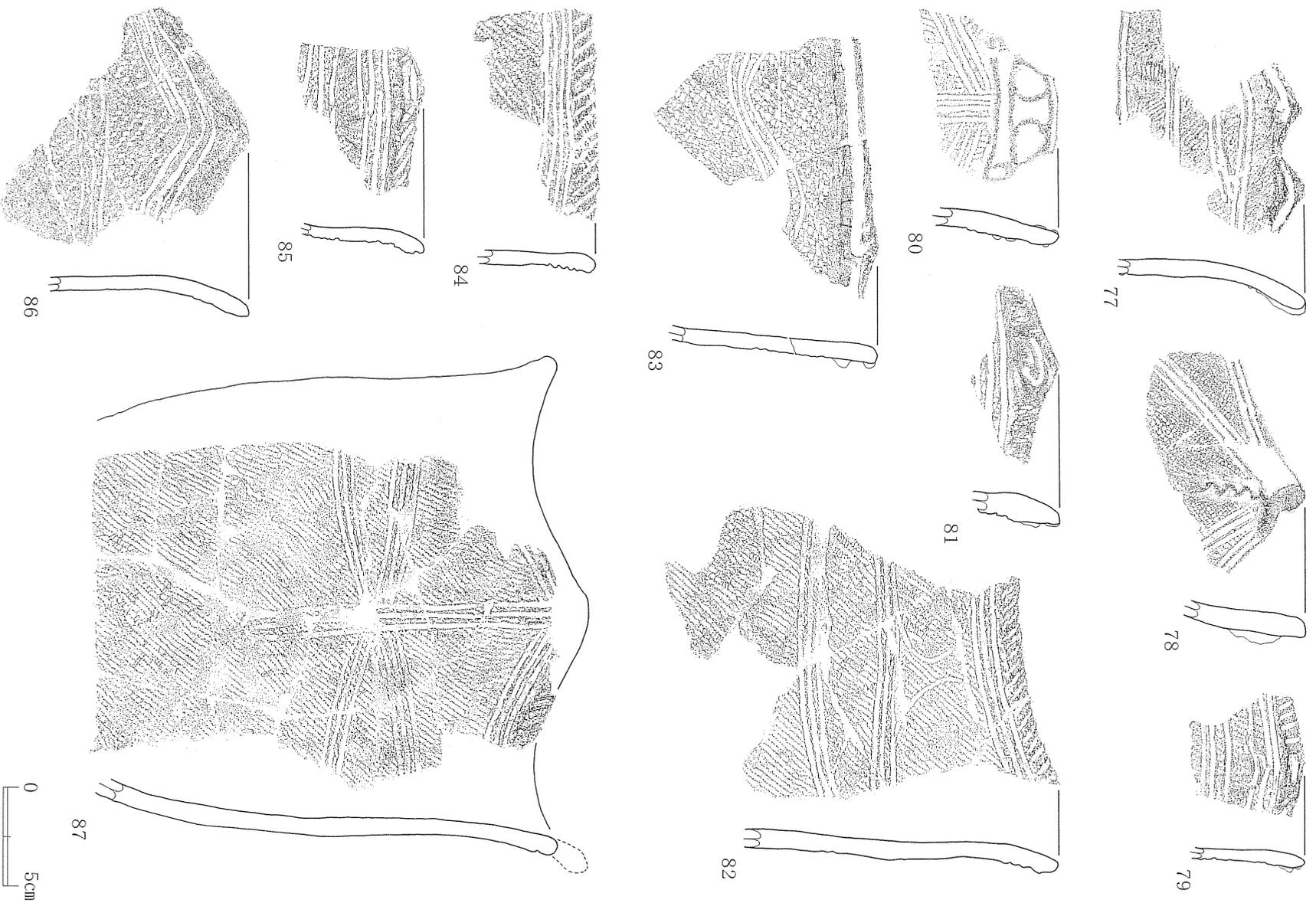
第32図 東側調査区遺構外出土遺物(2)



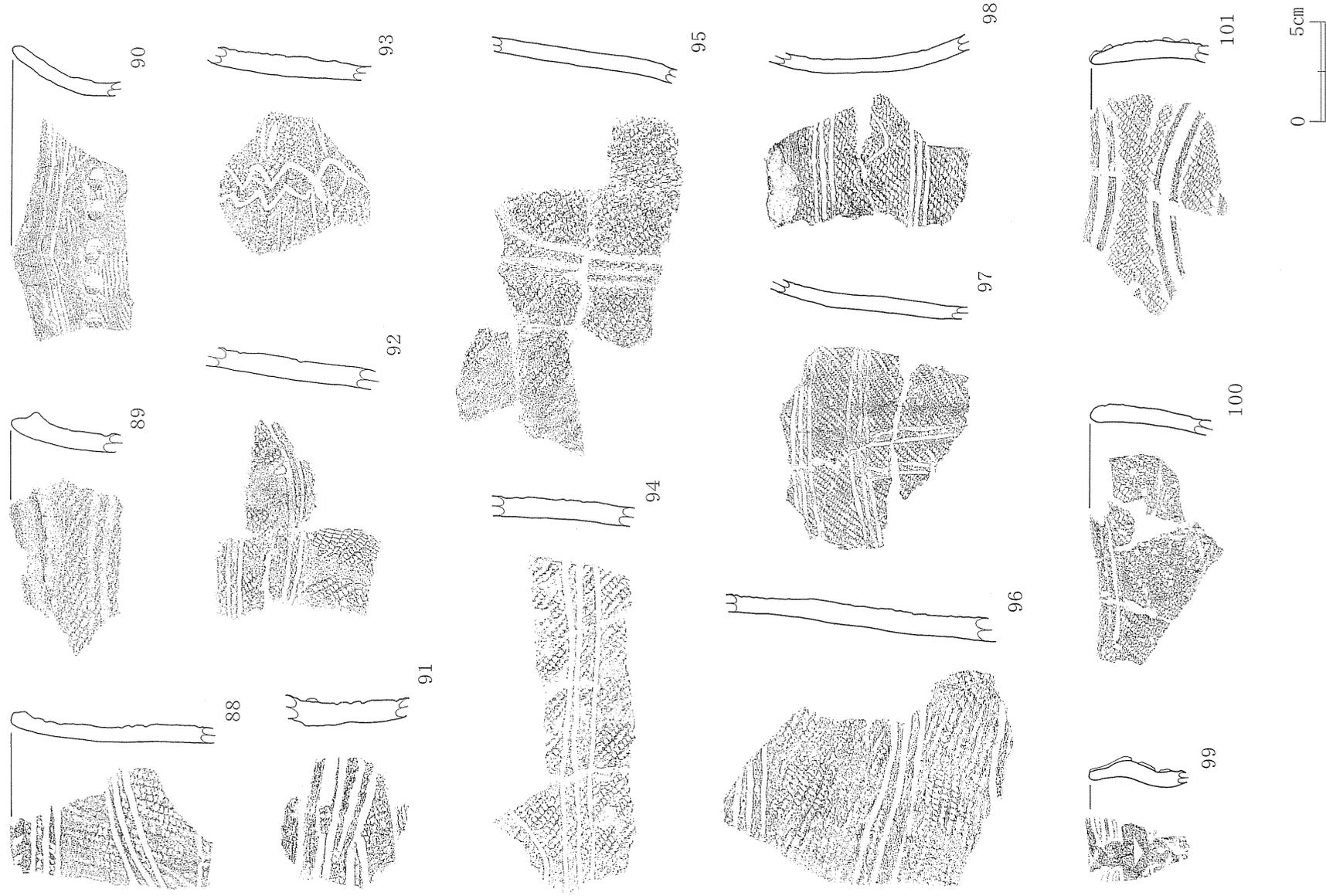
第33図 東側調査区遺構外出土遺物（3）



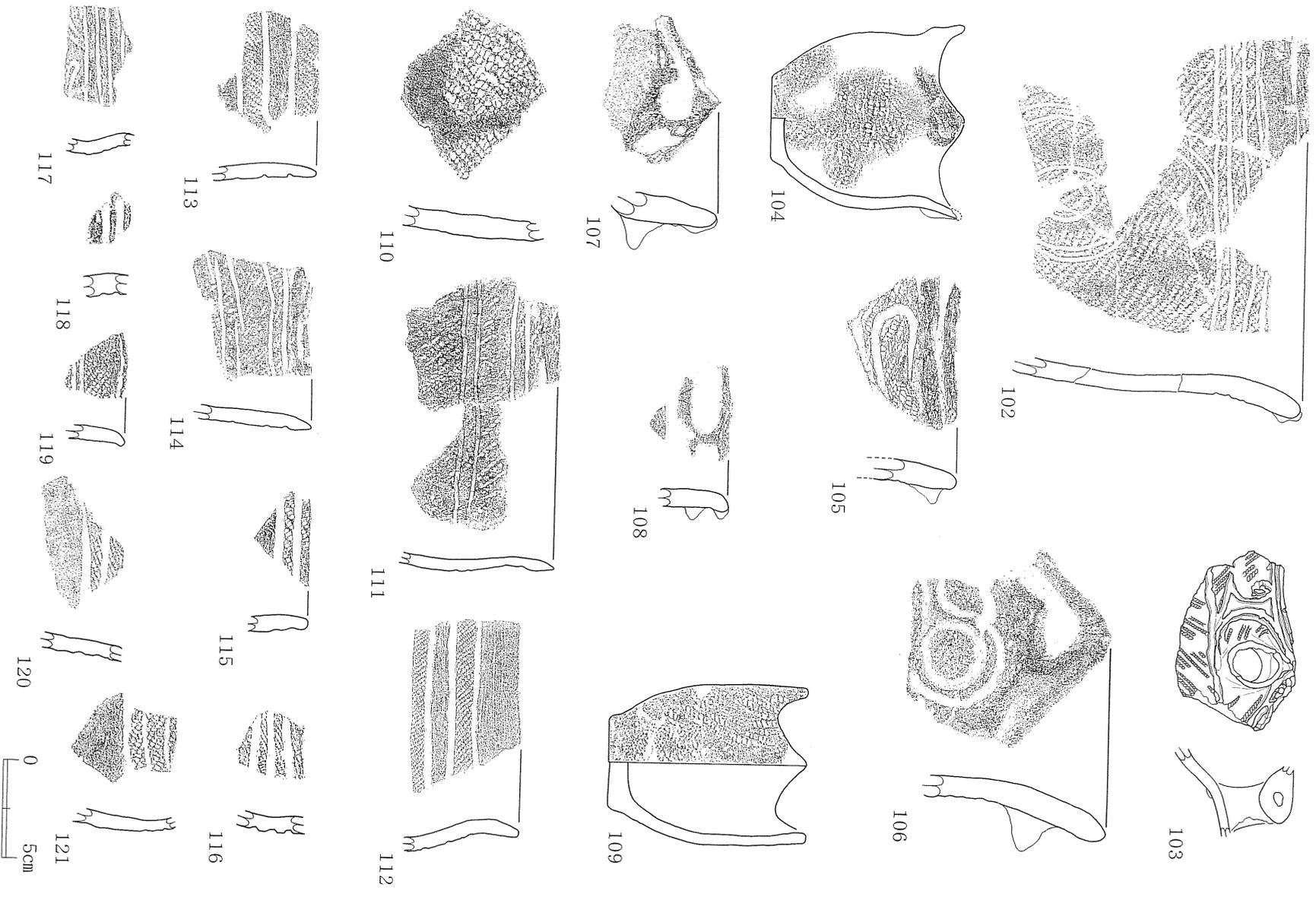
第34図 東側調査区遺構外出土遺物(4)



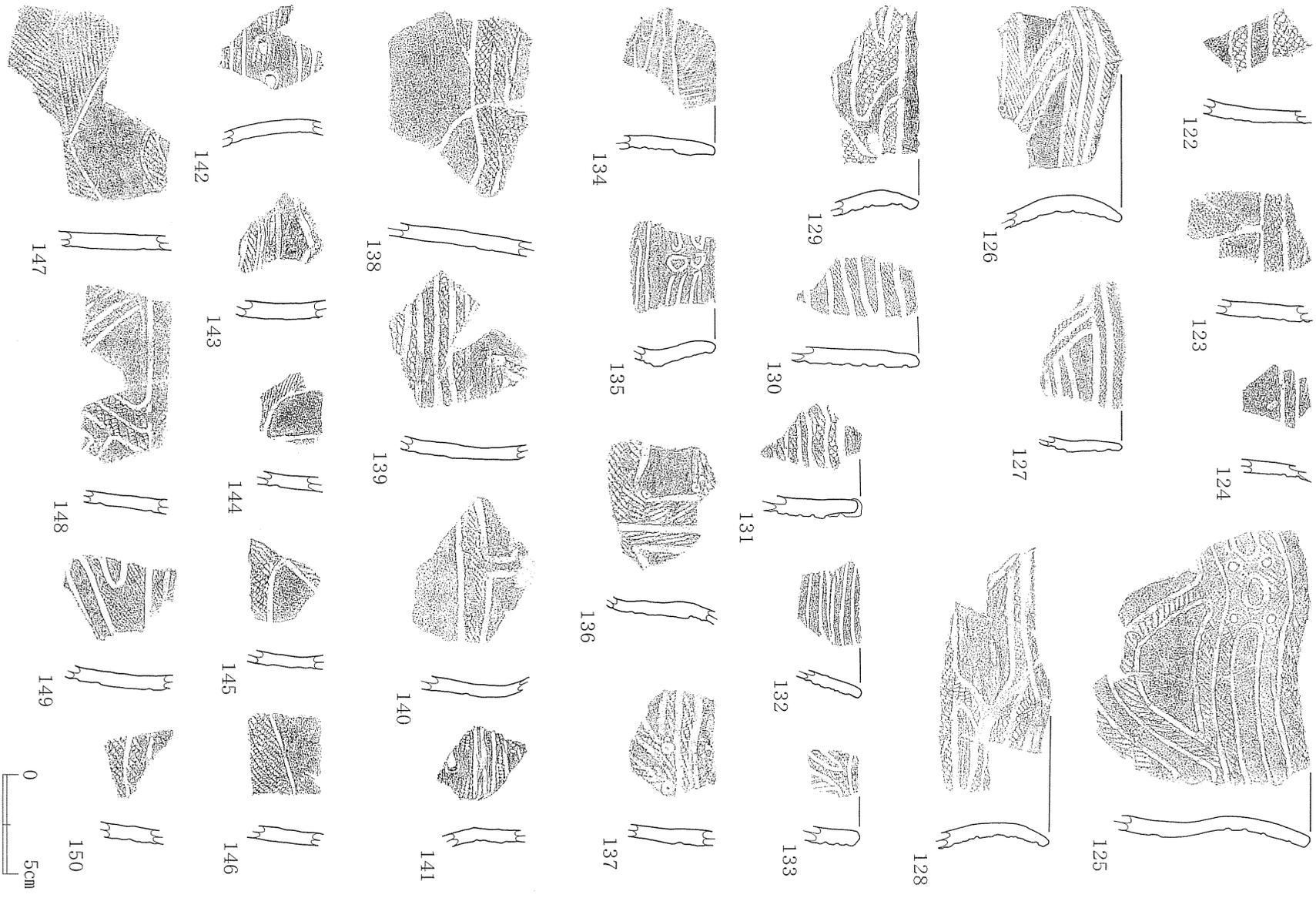
第35図 東側調査区遺構外出土遺物 (5)



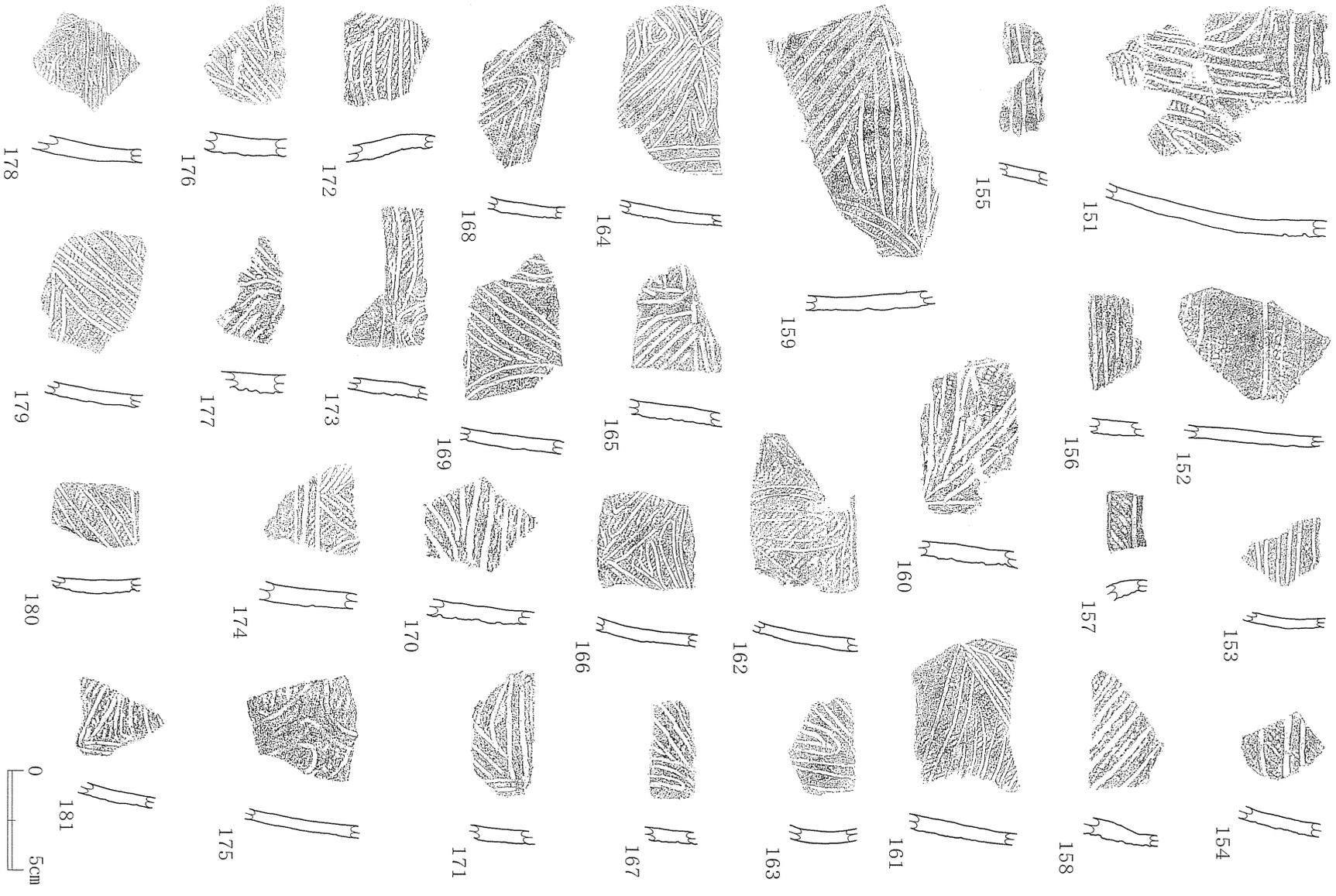
第36図 東側調査区遺構外出土遺物(6)



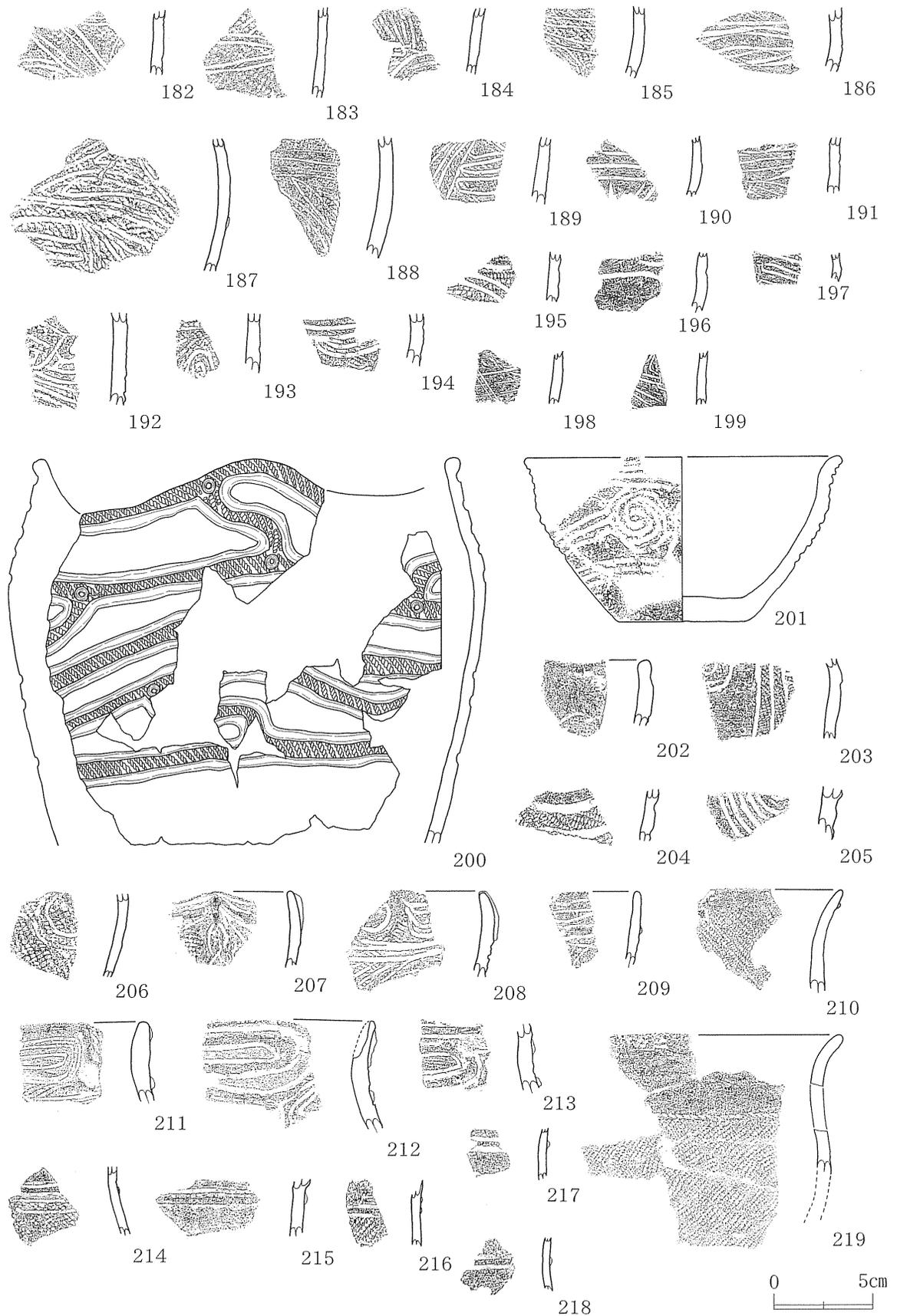
第37図 東側調査区遺構外出土遺物 (7)



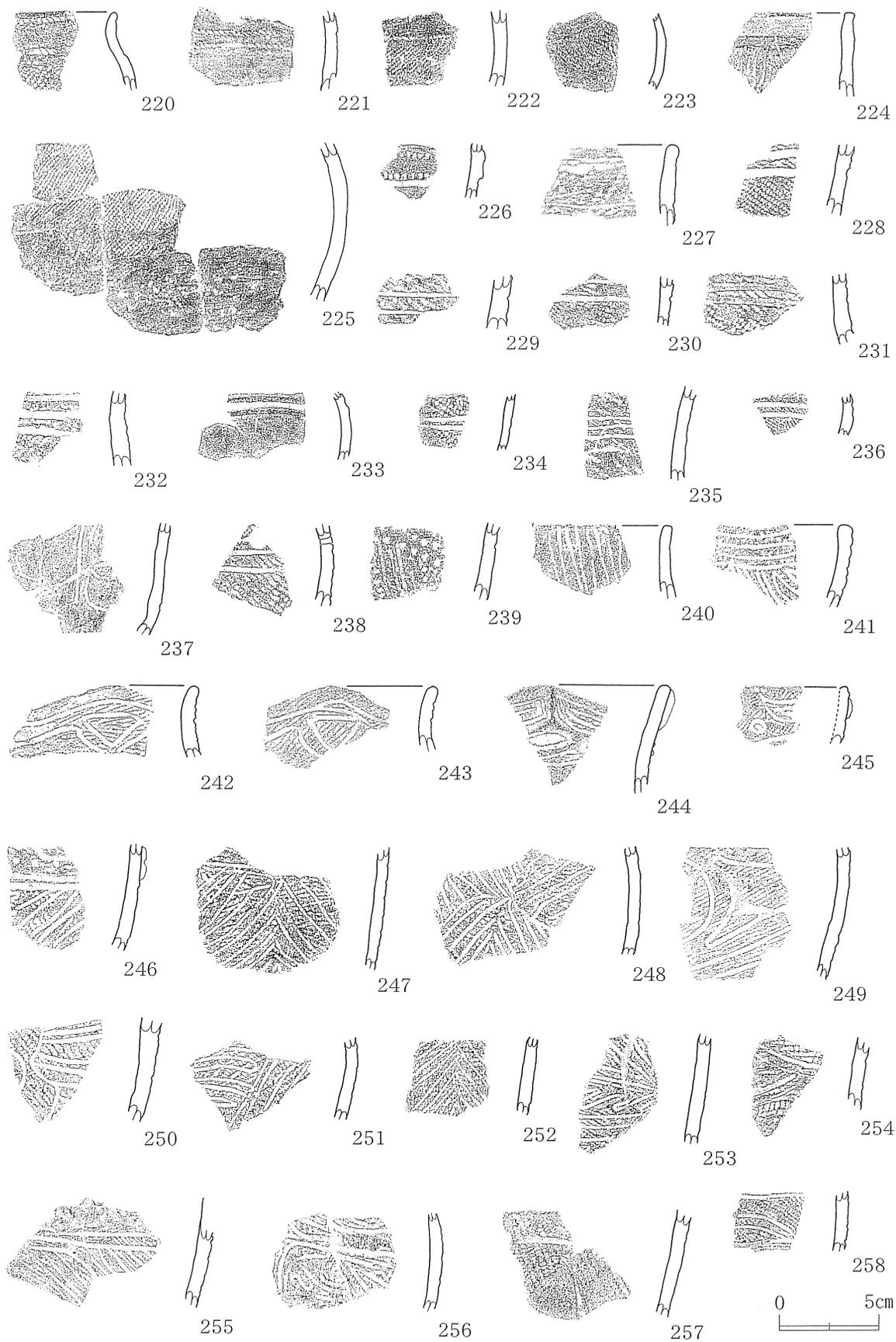
第38図 東側調査区遺構外出土遺物 (8)



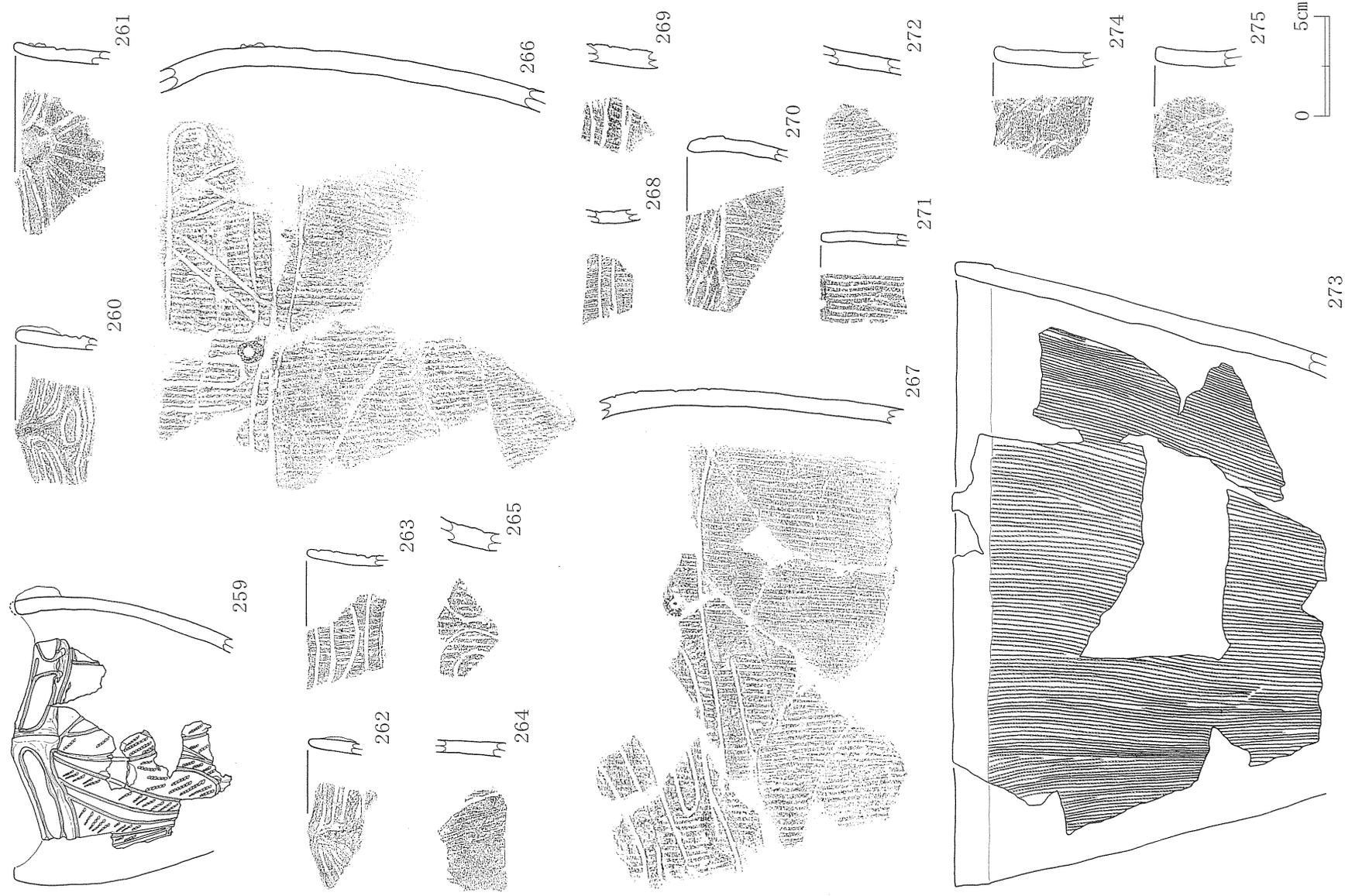
第39図 東側調査区遺構外出土遺物 (9)



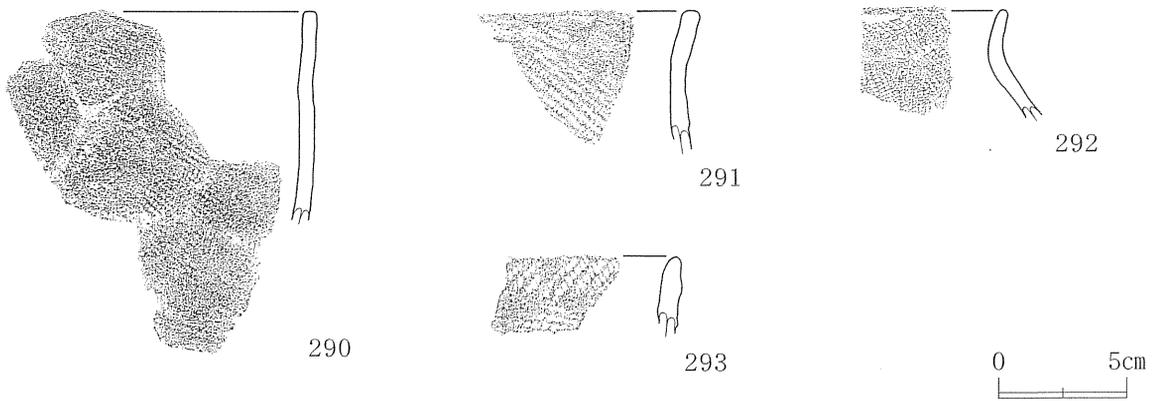
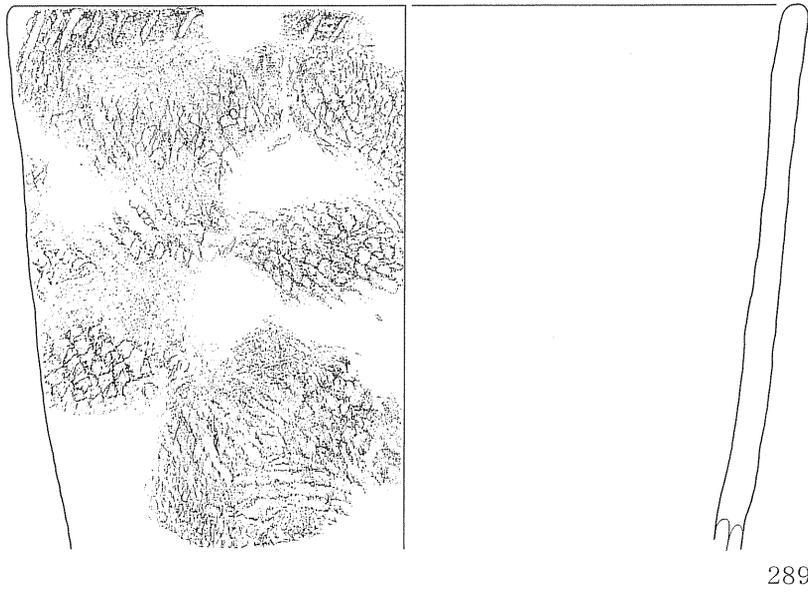
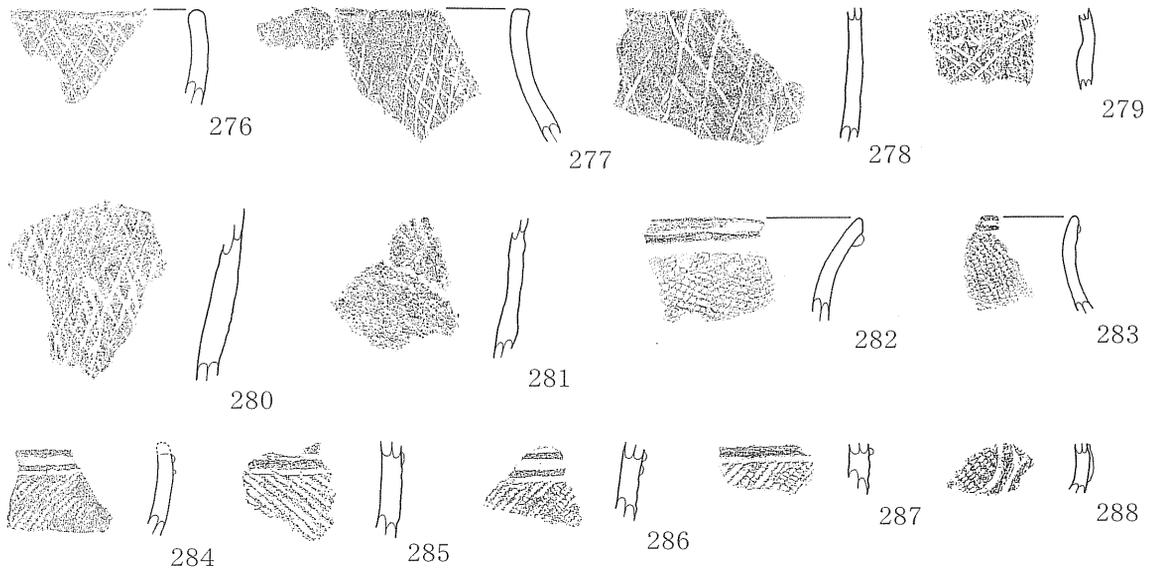
第40図 東側調査区遺構外出土遺物 (10)



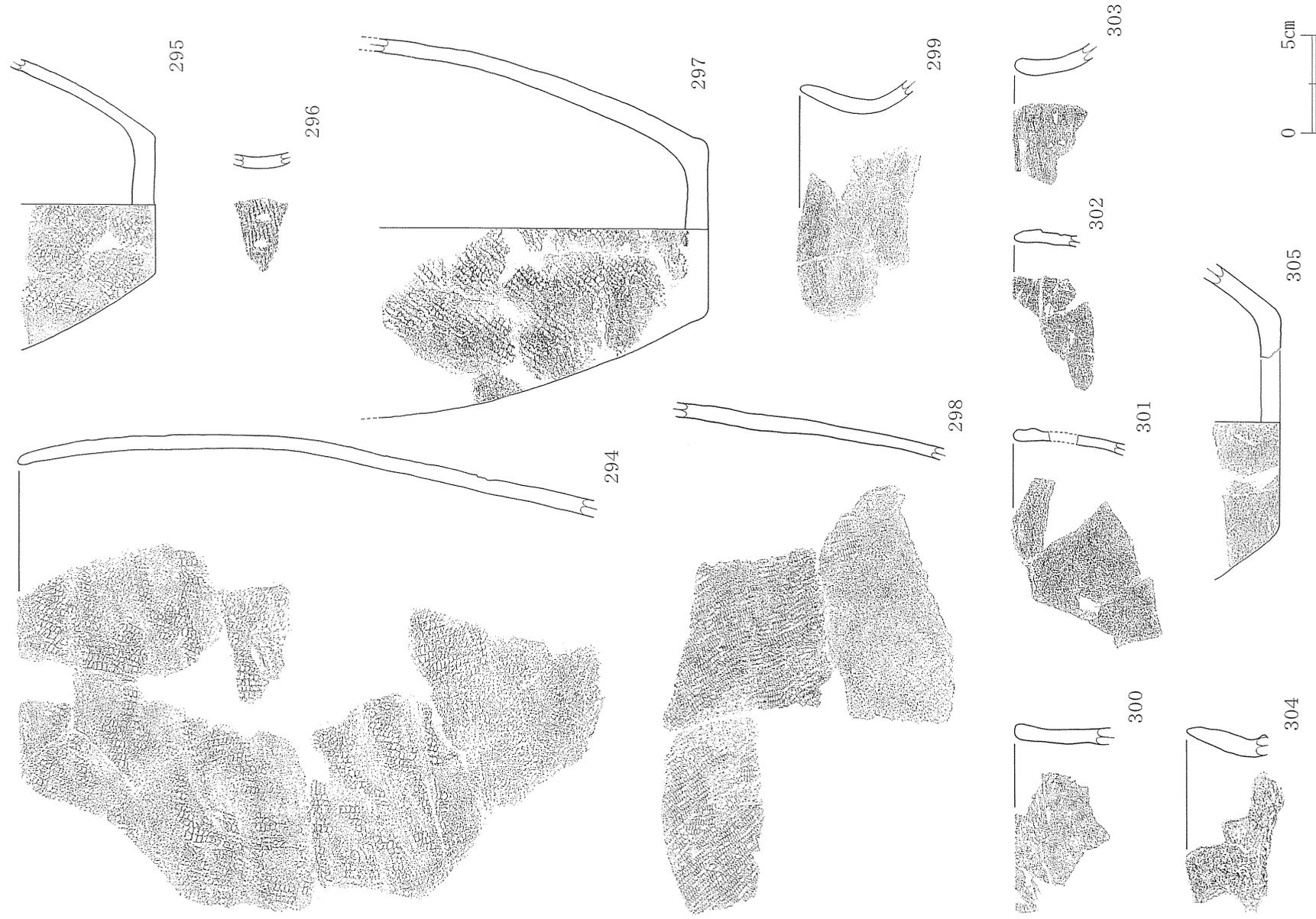
第41図 東側調査区遺構外出土遺物 (11)



第42図 東側調査区遺構外出土遺物 (12)

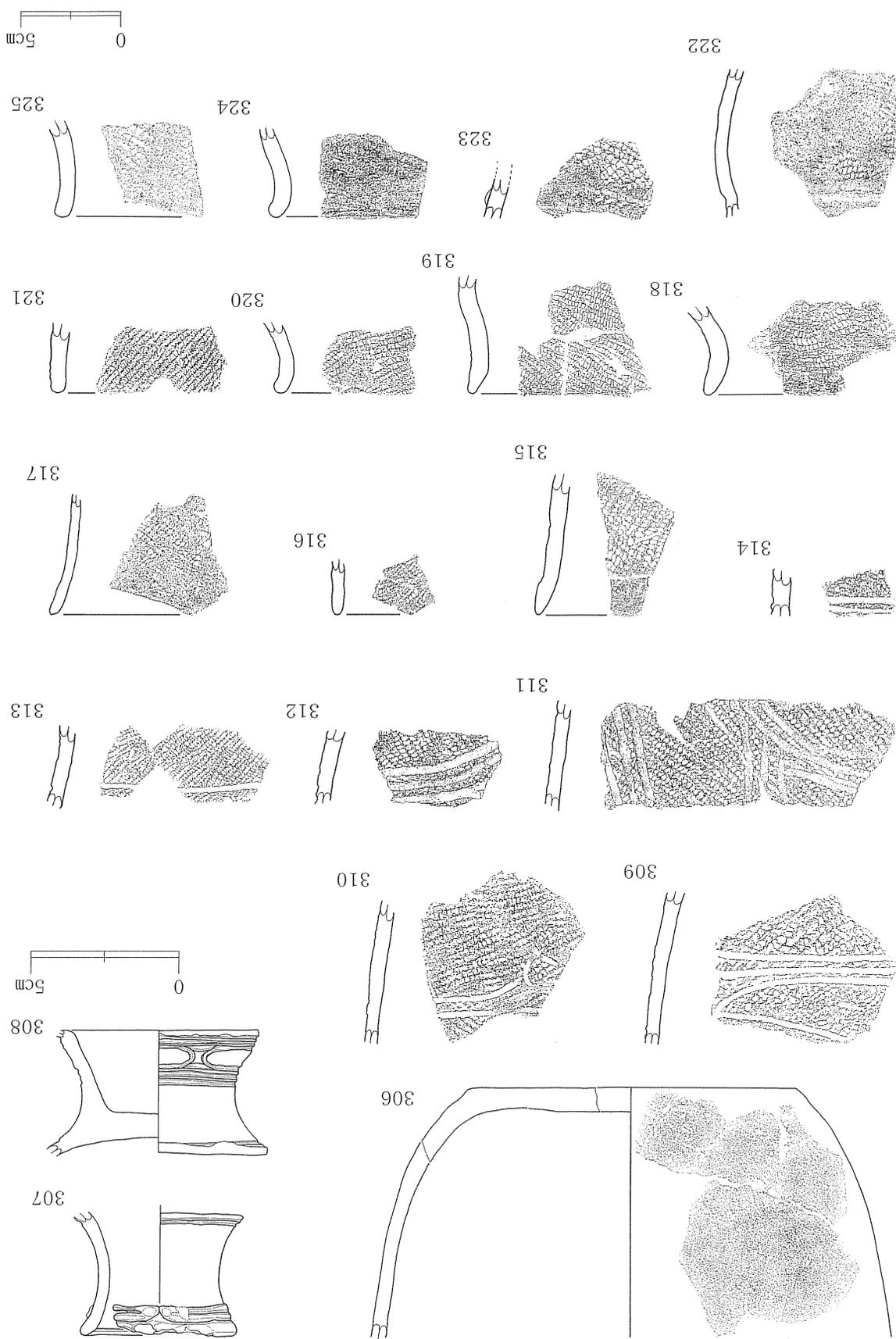


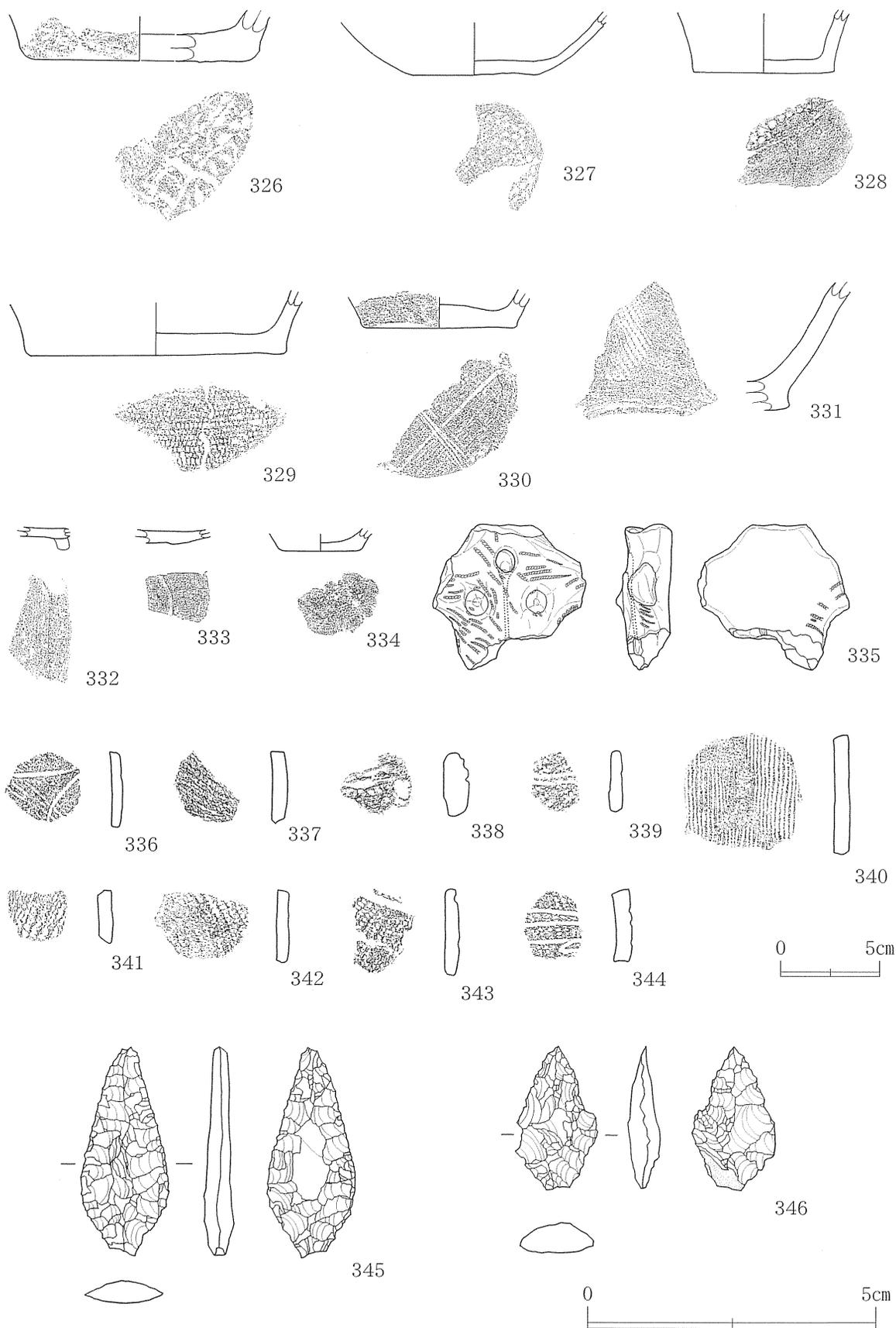
第43図 東側調査区遺構外出土遺物 (13)



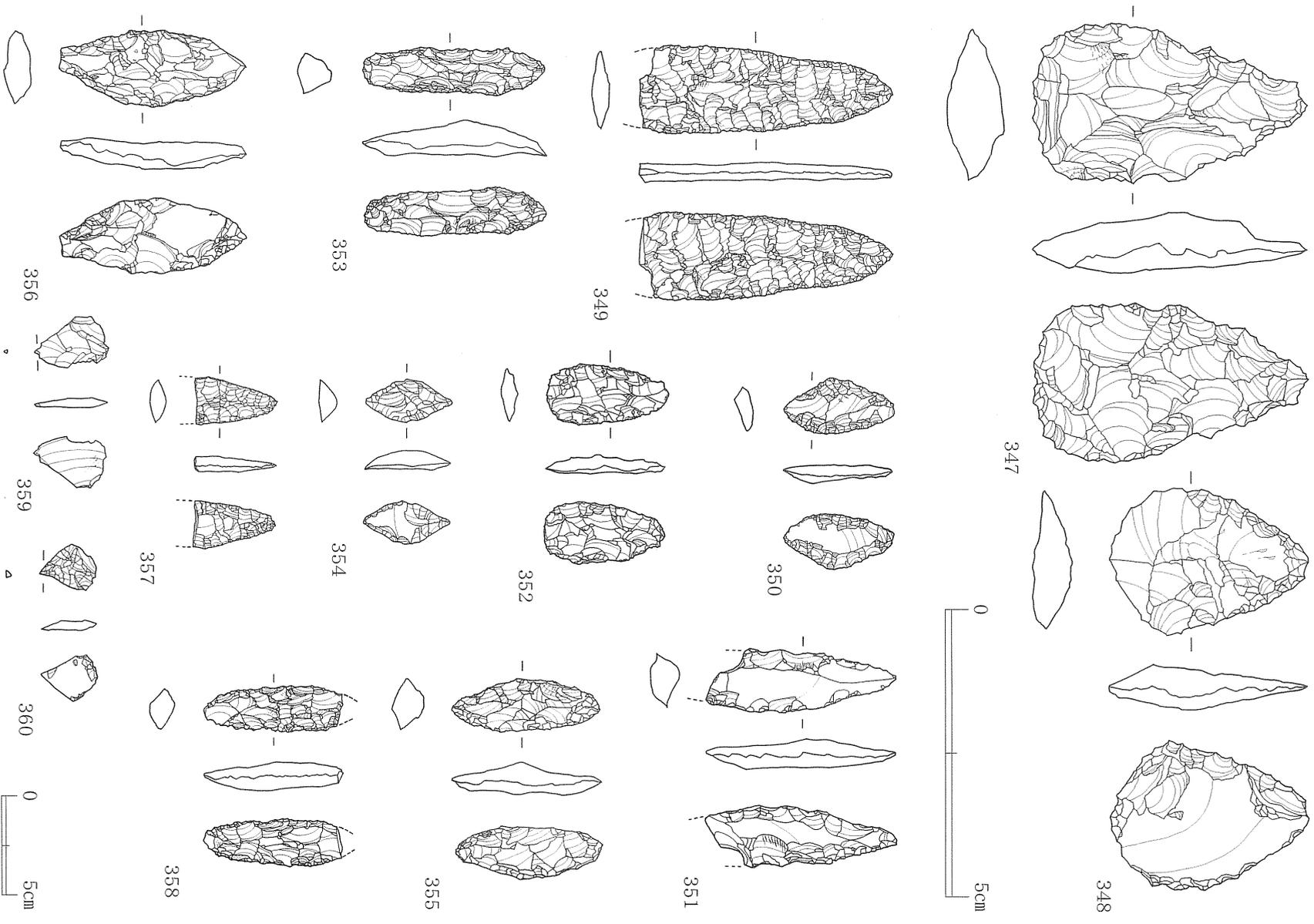
第44図 東側調査区遺構外出土遺物 (14)

第45図 東側調査区遺構外出土遺物 (15)

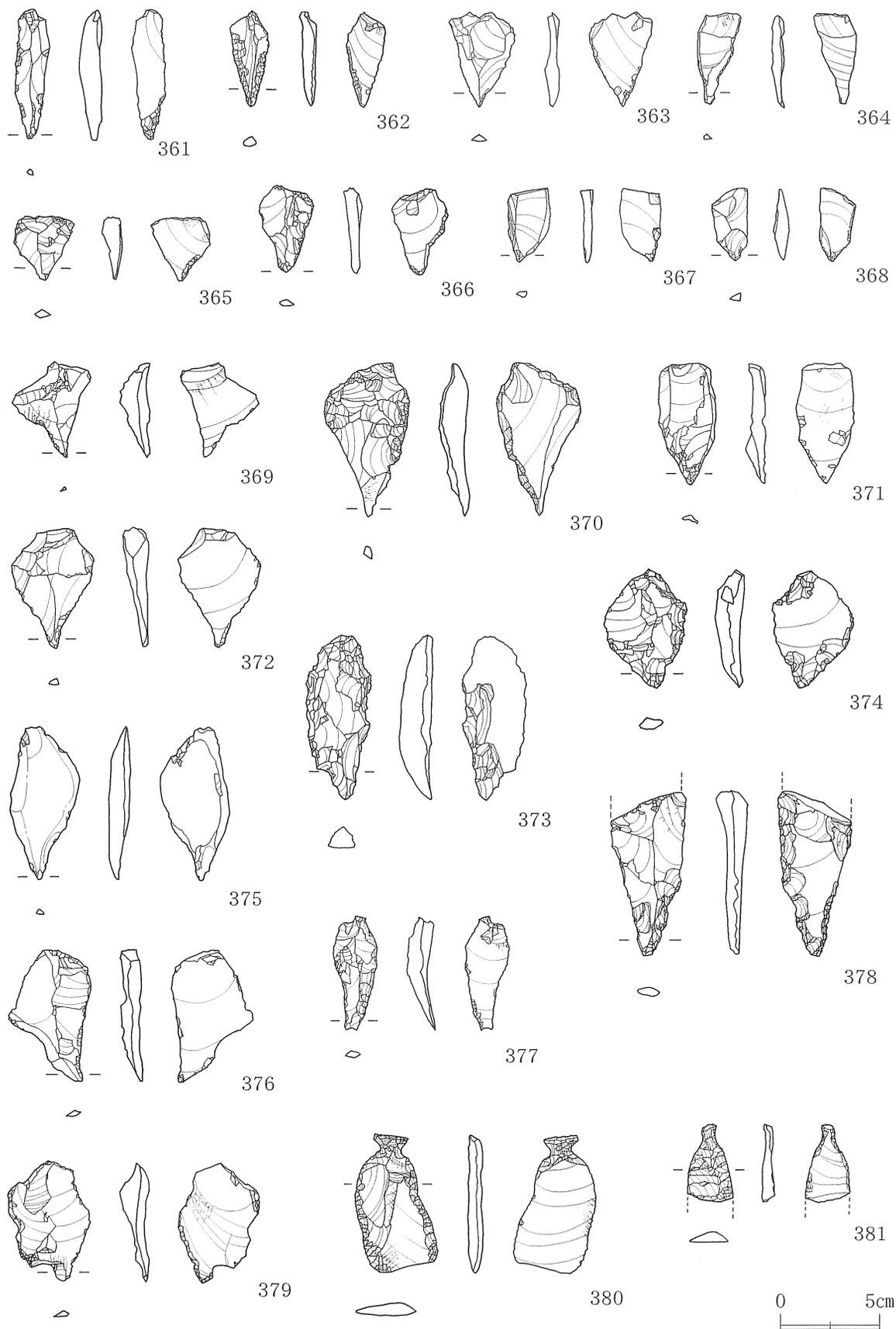




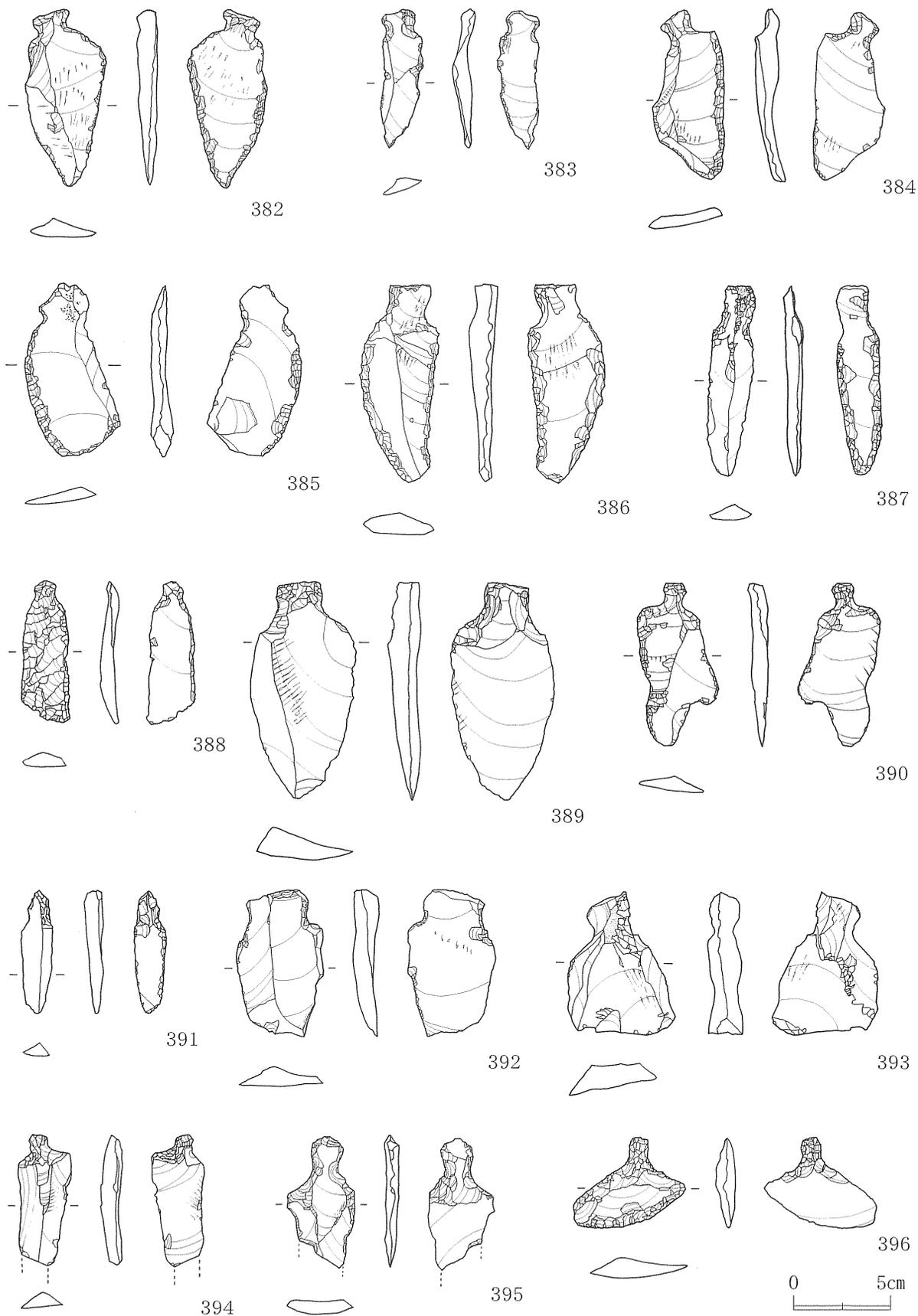
第46図 東側調査区遺構外出土遺物 (16)



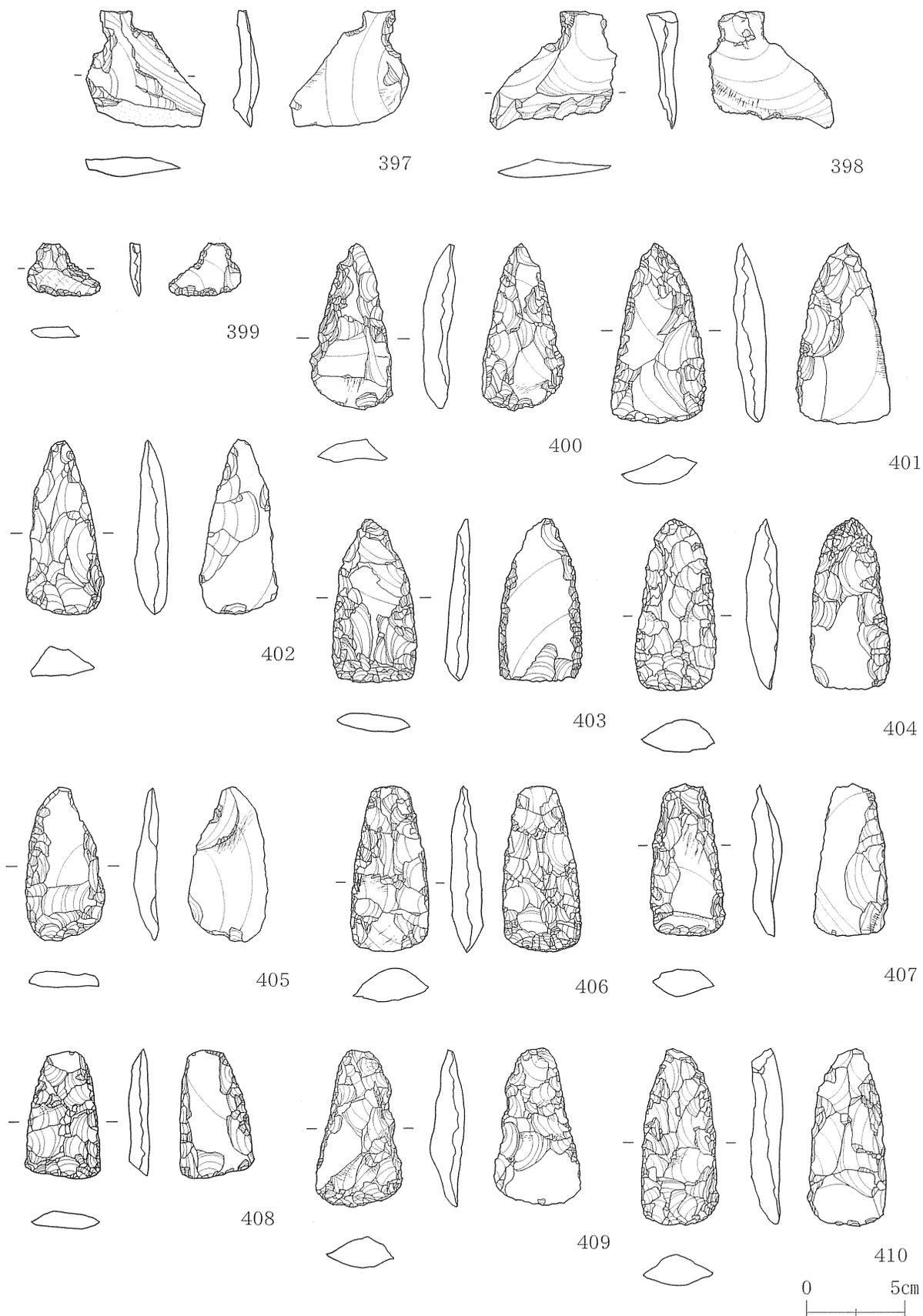
第47図 東側調査区遺構外出土遺物 (17)



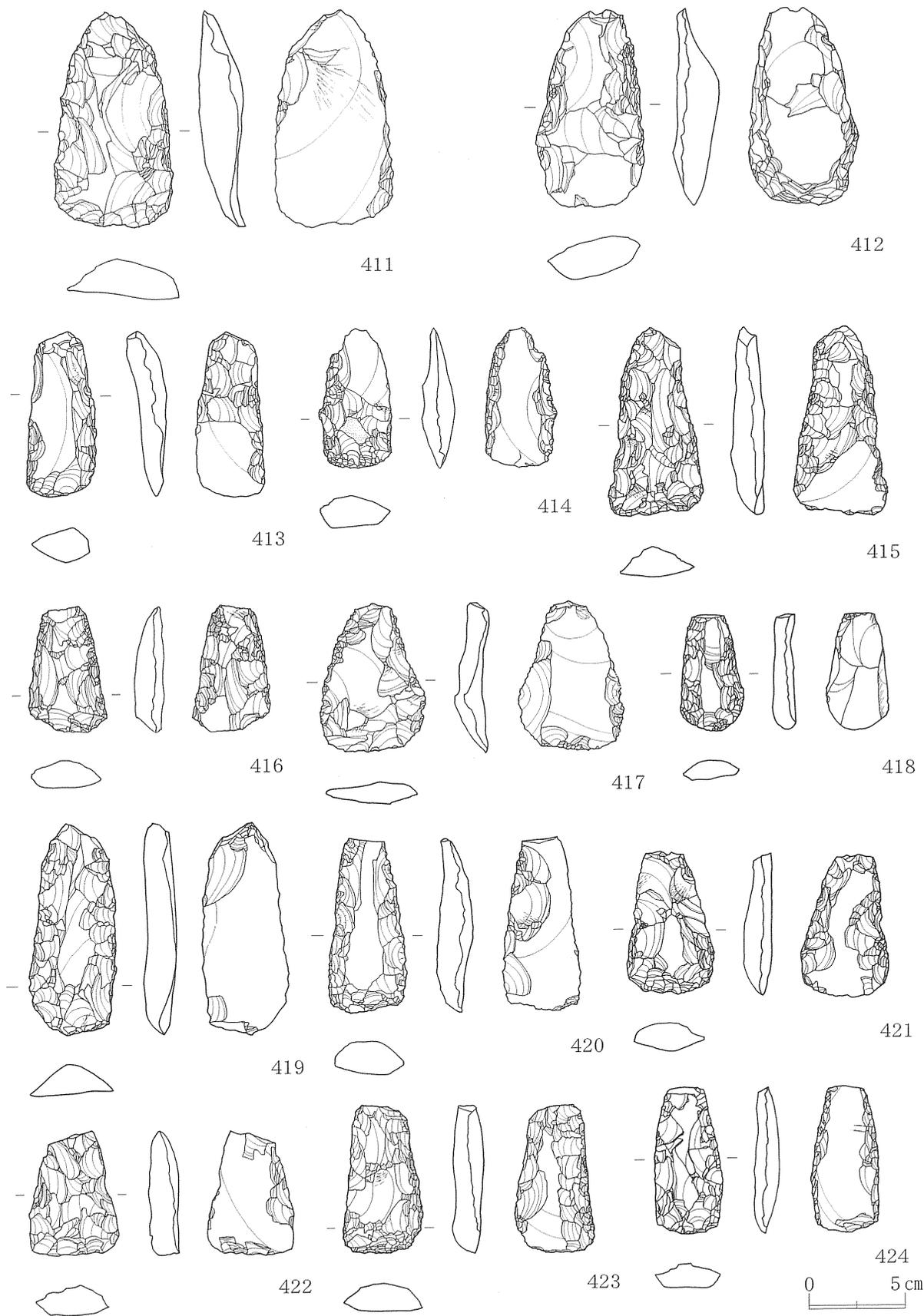
第48図 東側調査区遺構外出土遺物 (18)



第49図 東側調査区遺構外出土遺物 (19)

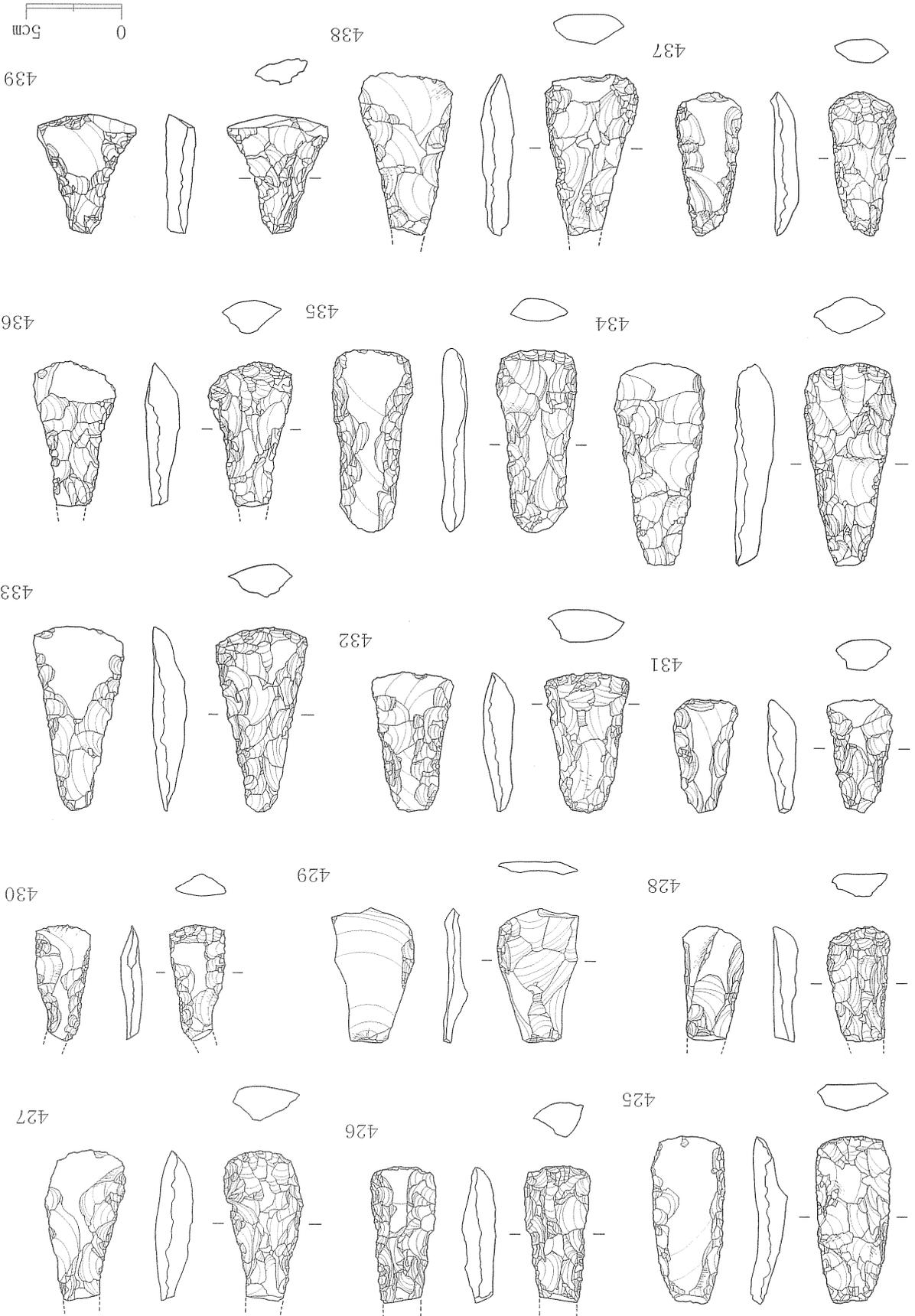


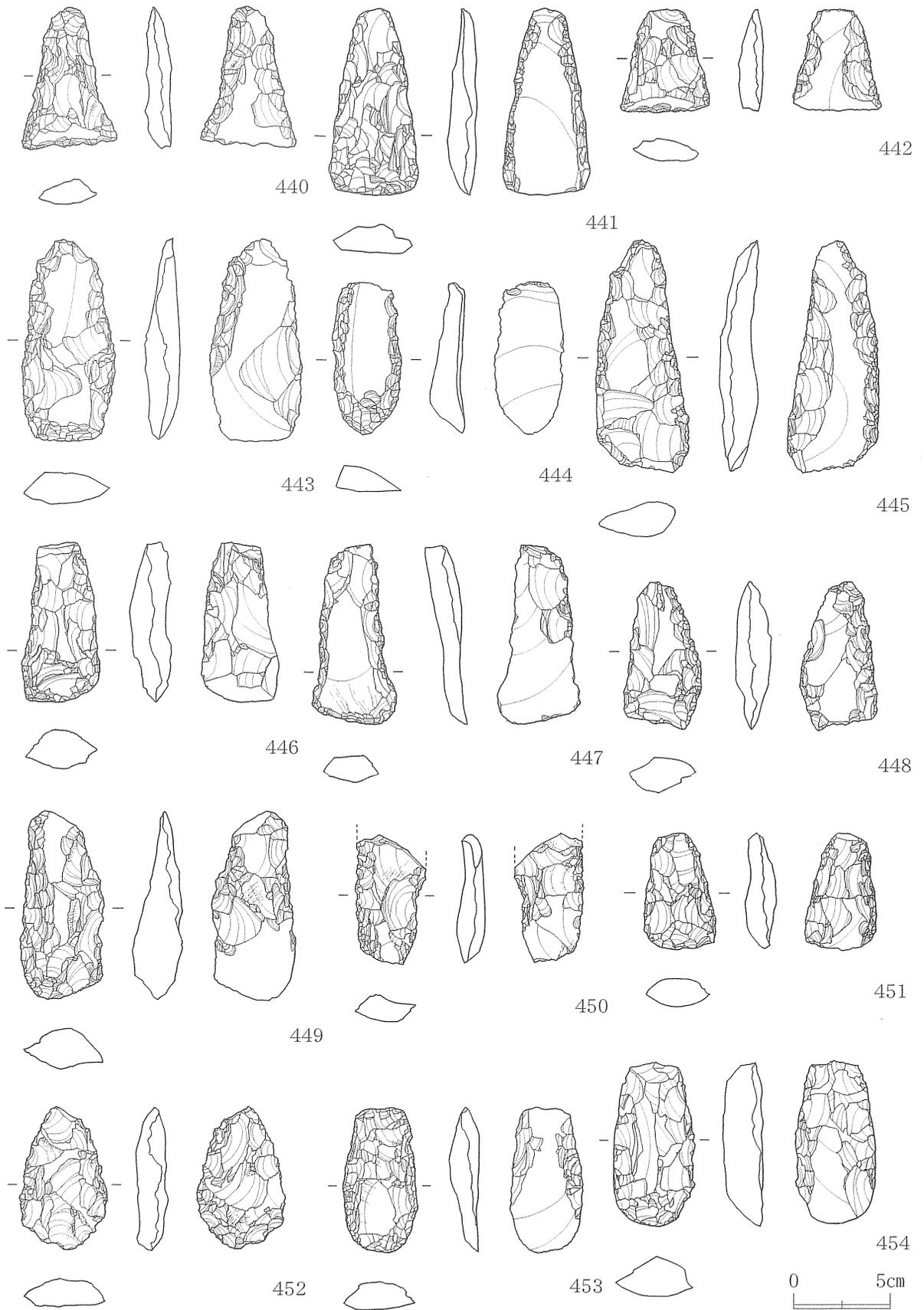
第50図 東側調査区遺構外出土遺物 (20)



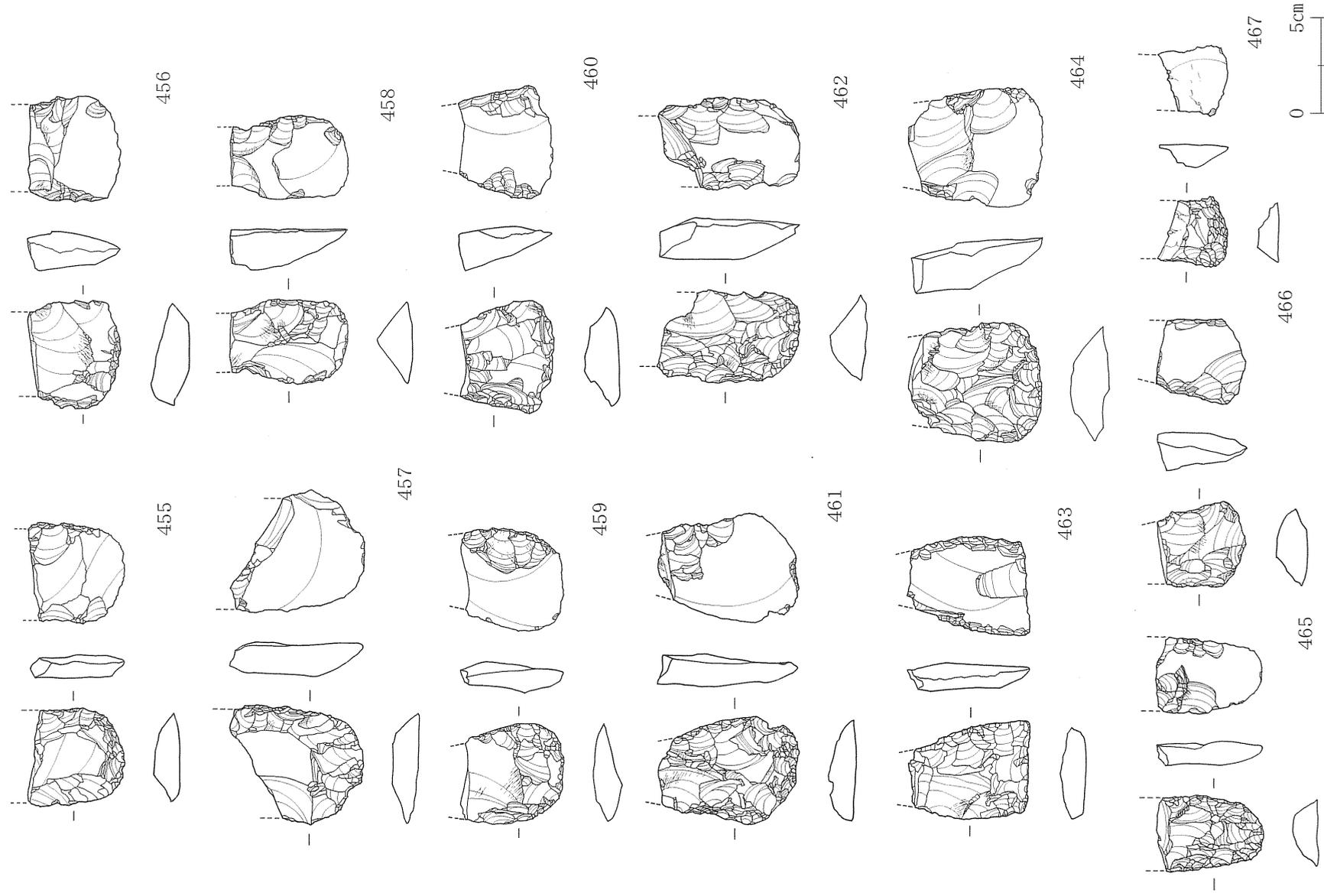
第51図 東側調査区遺構外出土遺物 (21)

第52図 東側調査区遺構外出土遺物 (22)

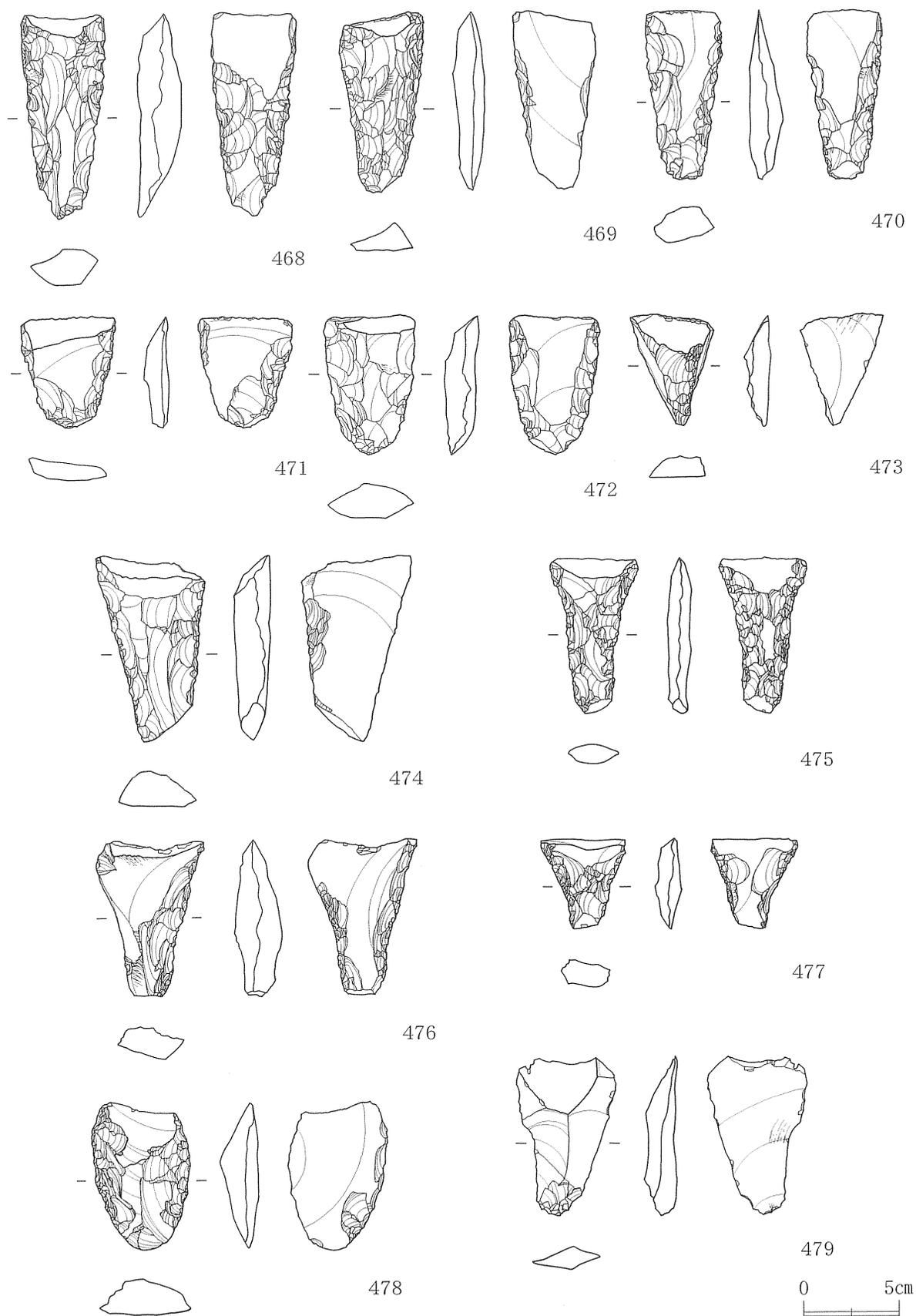




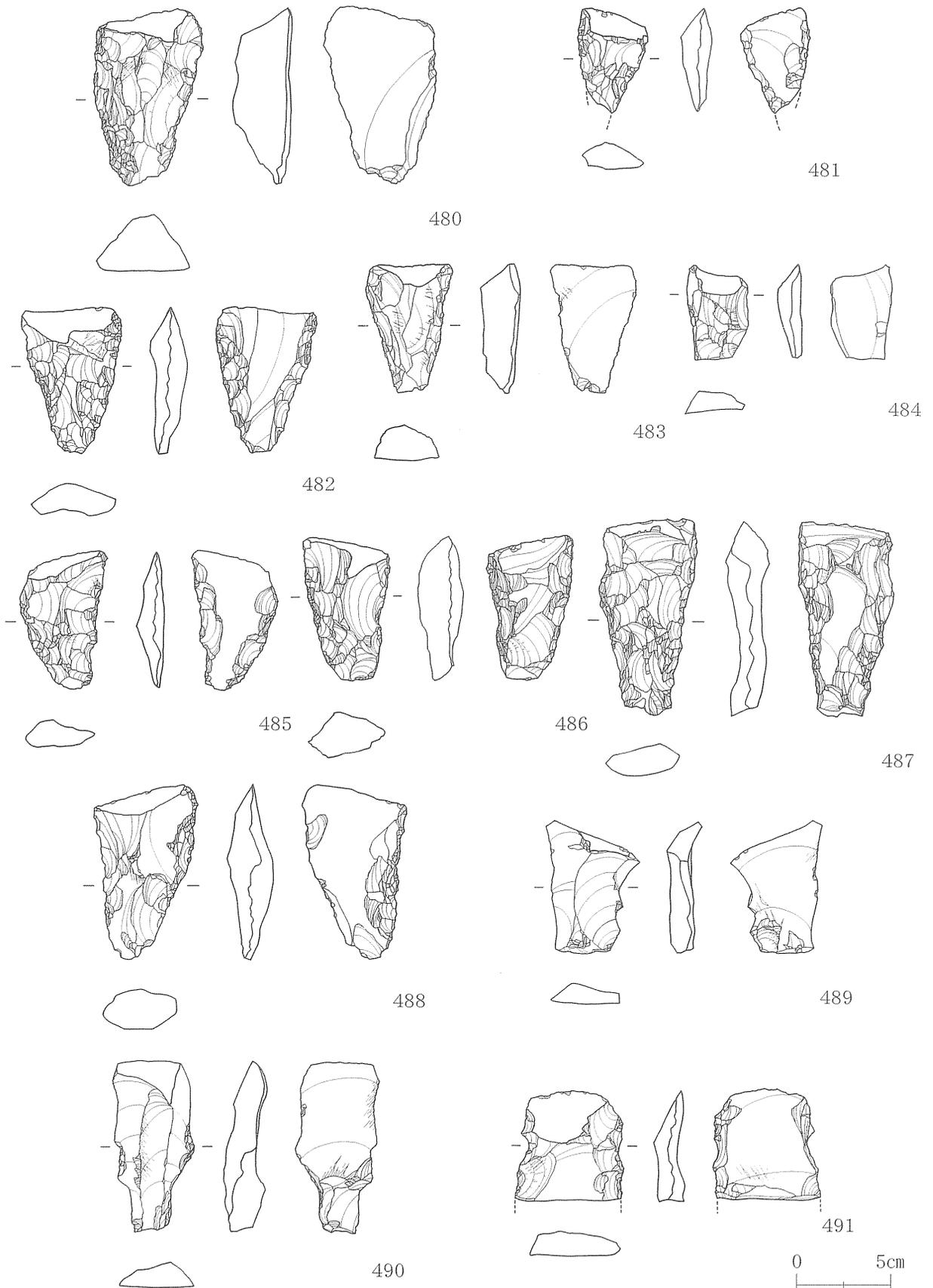
第53図 東側調査区遺構外出土遺物 (23)



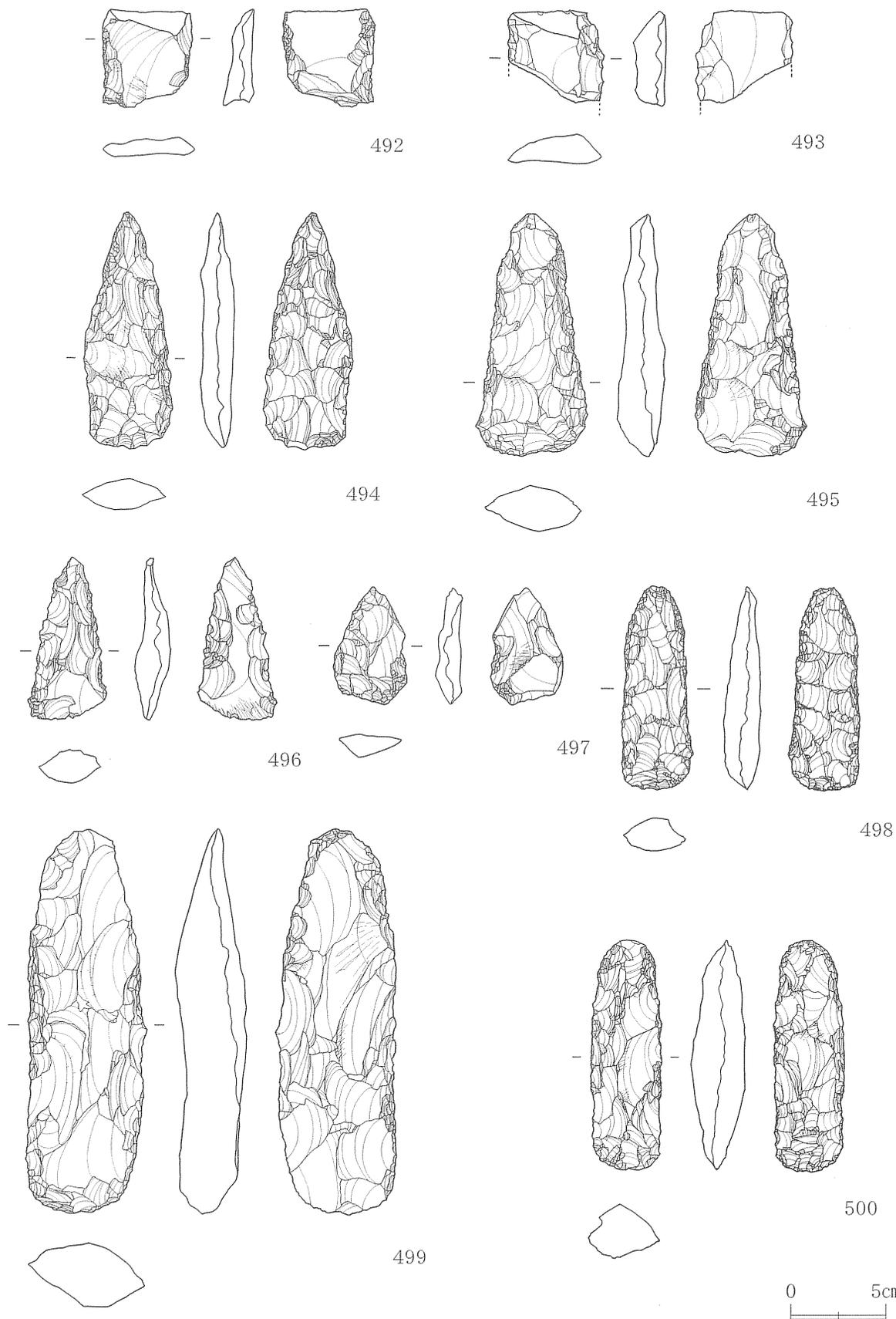
第54図 東側調査区遺構外出土遺物 (24)



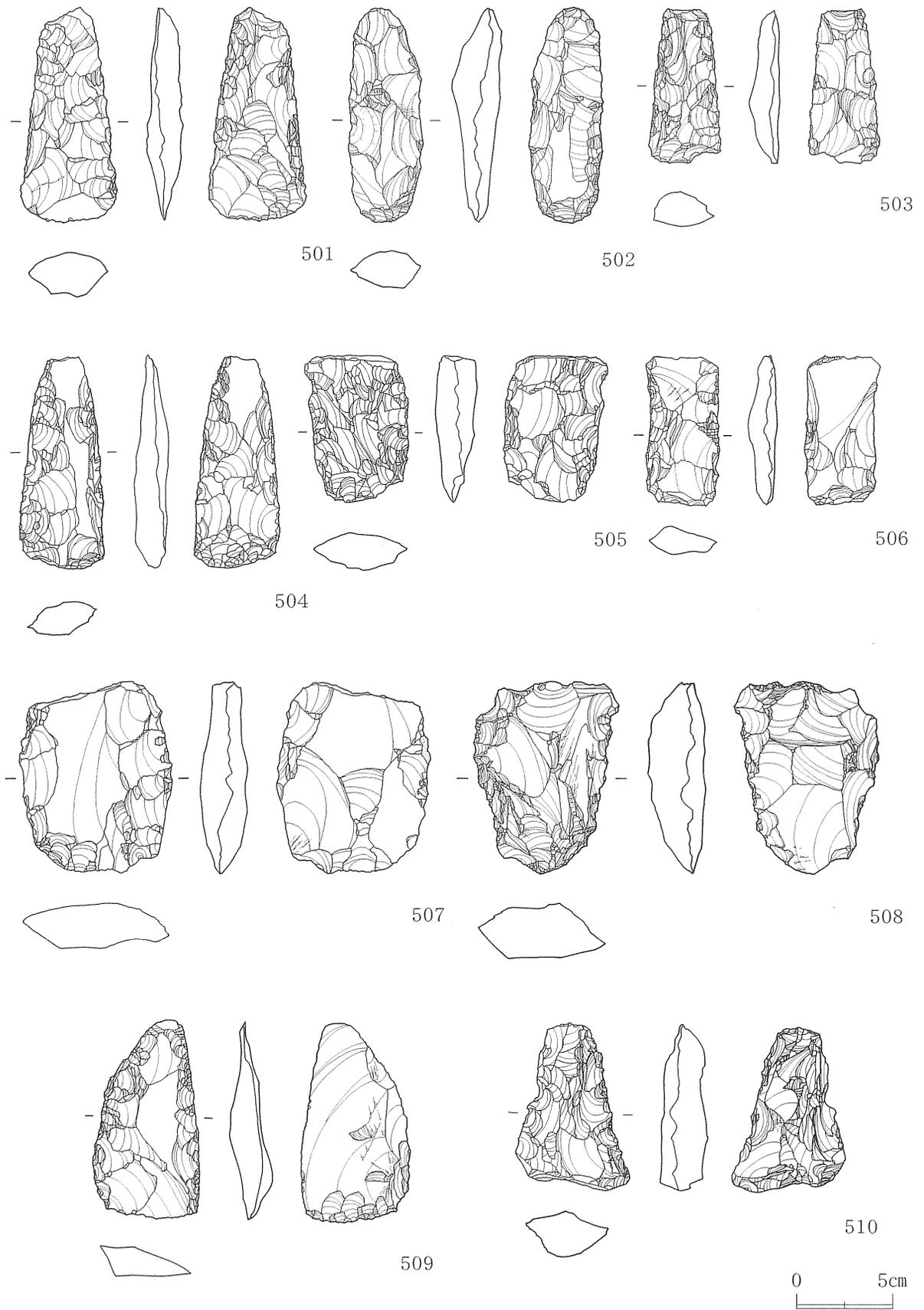
第55図 東側調査区遺構外出土遺物 (25)



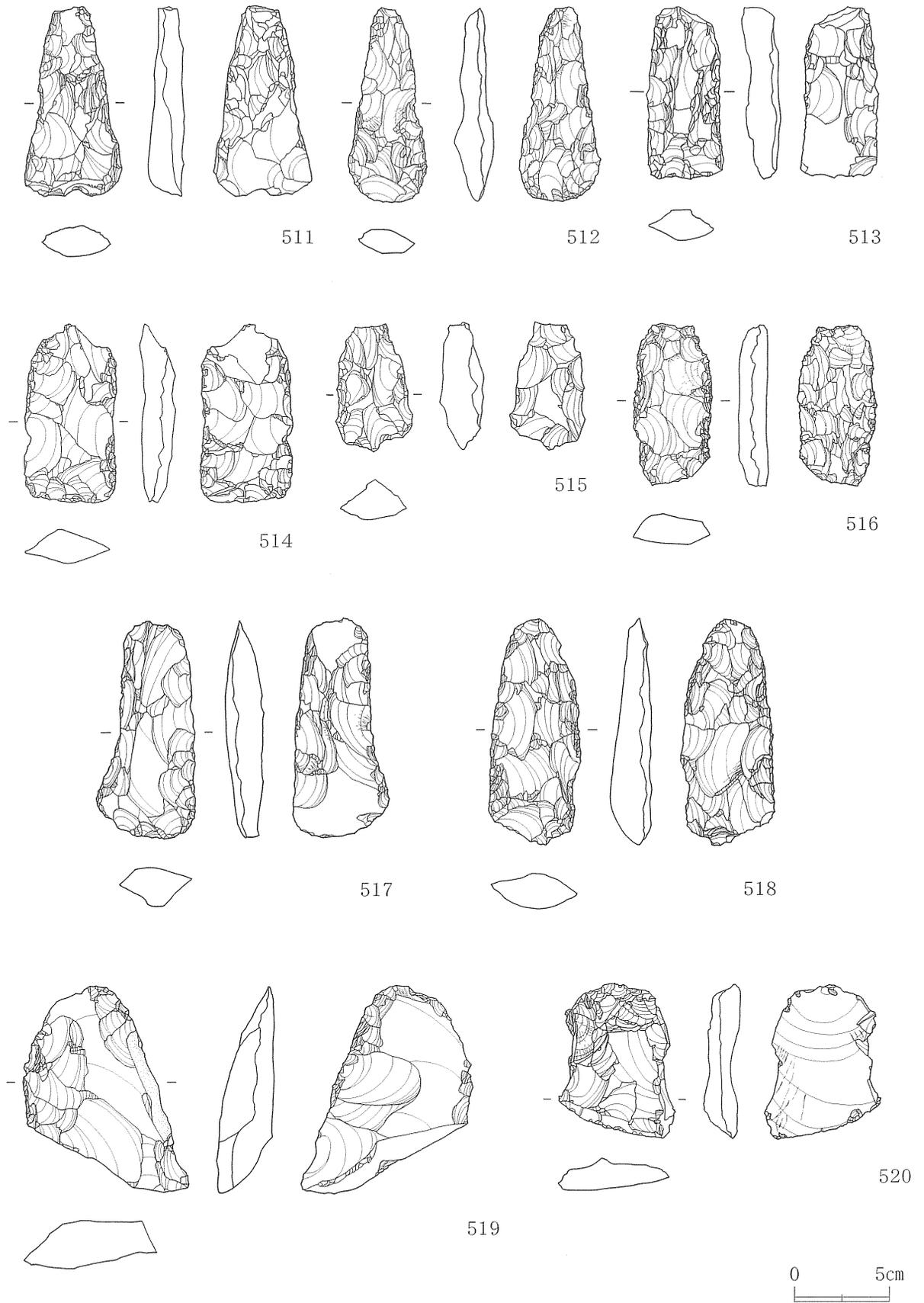
第56図 東側調査区遺構外出土遺物 (26)



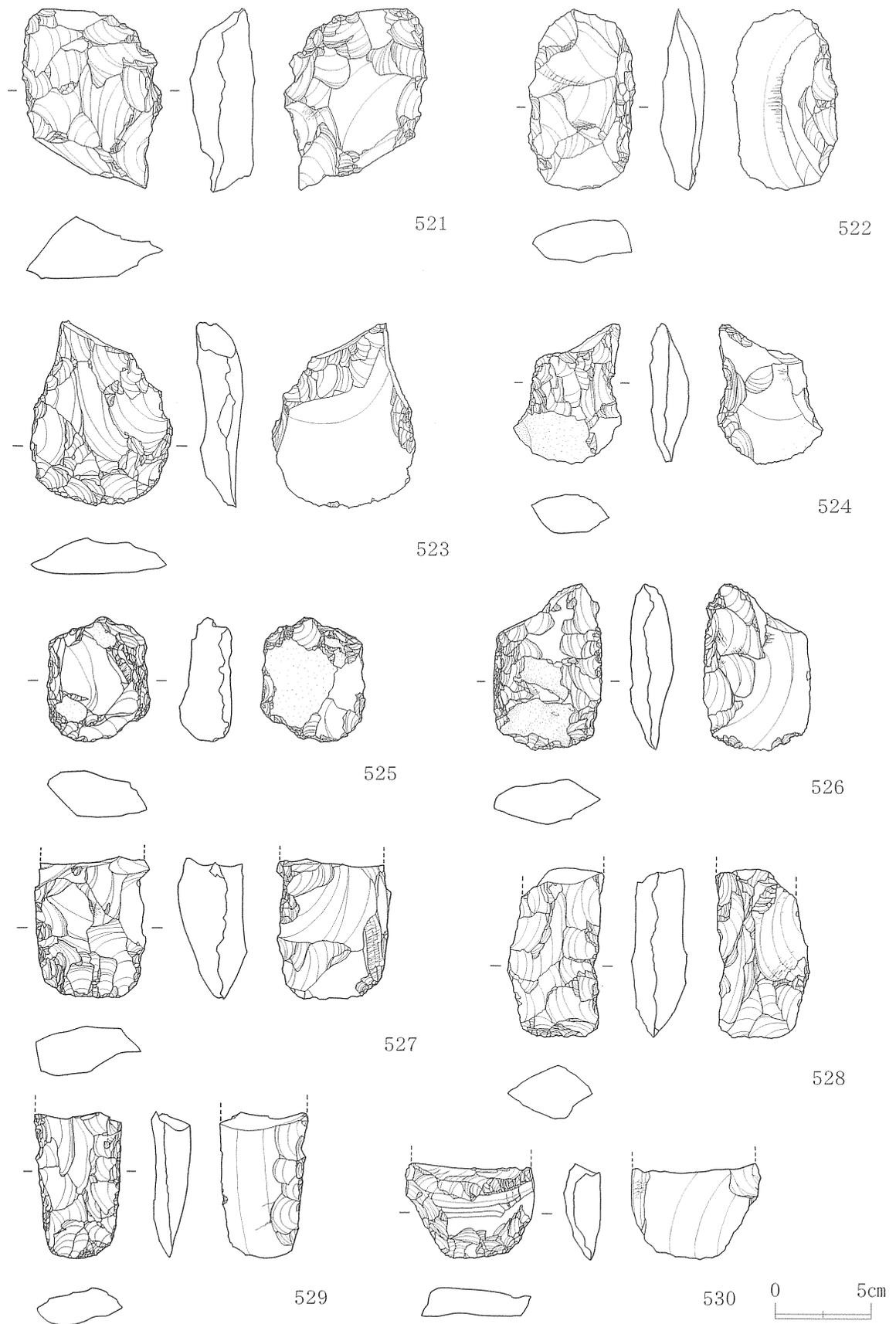
第57図 東側調査区遺構外出土遺物 (27)



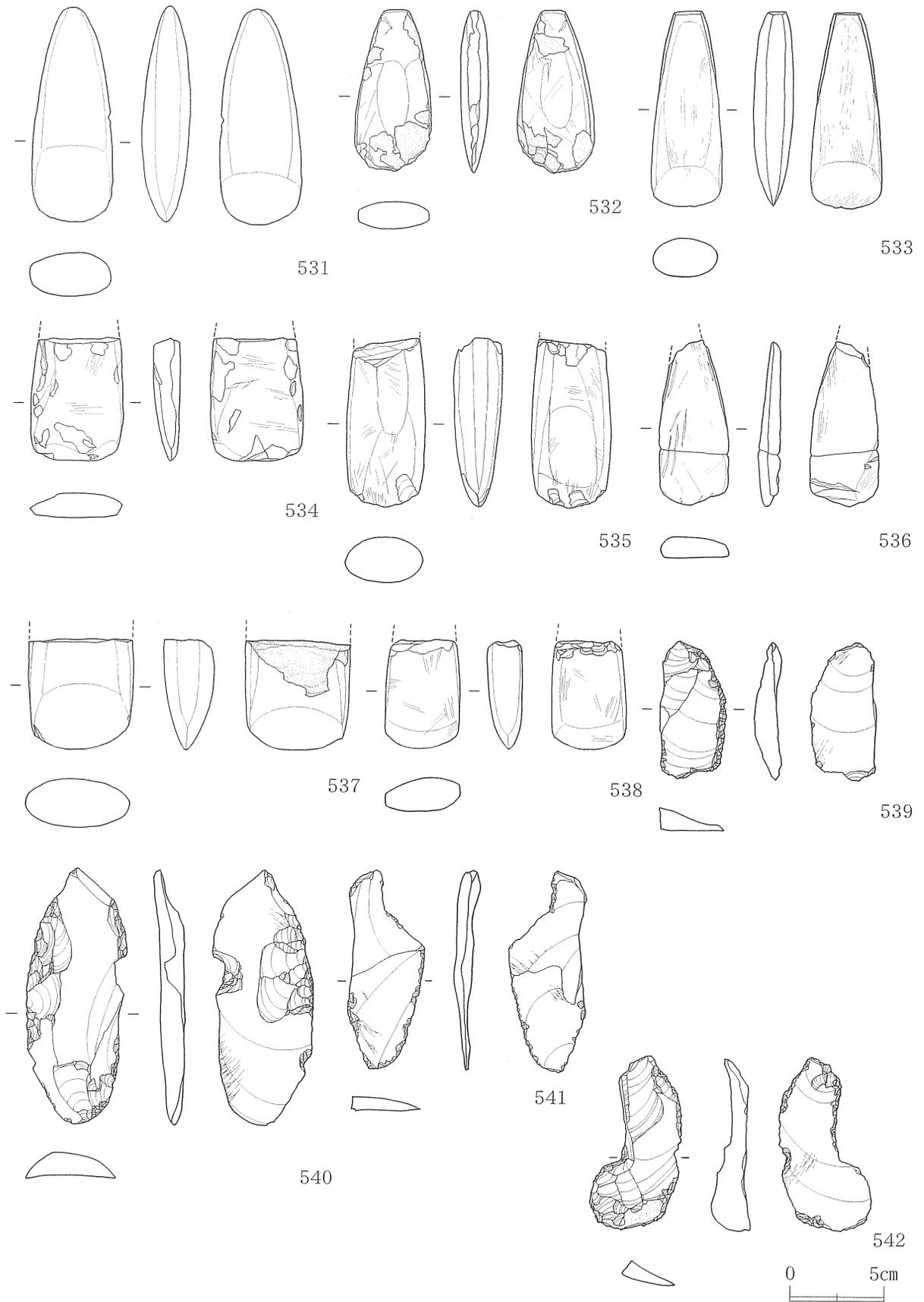
第58図 東側調査区遺構外出土遺物 (28)



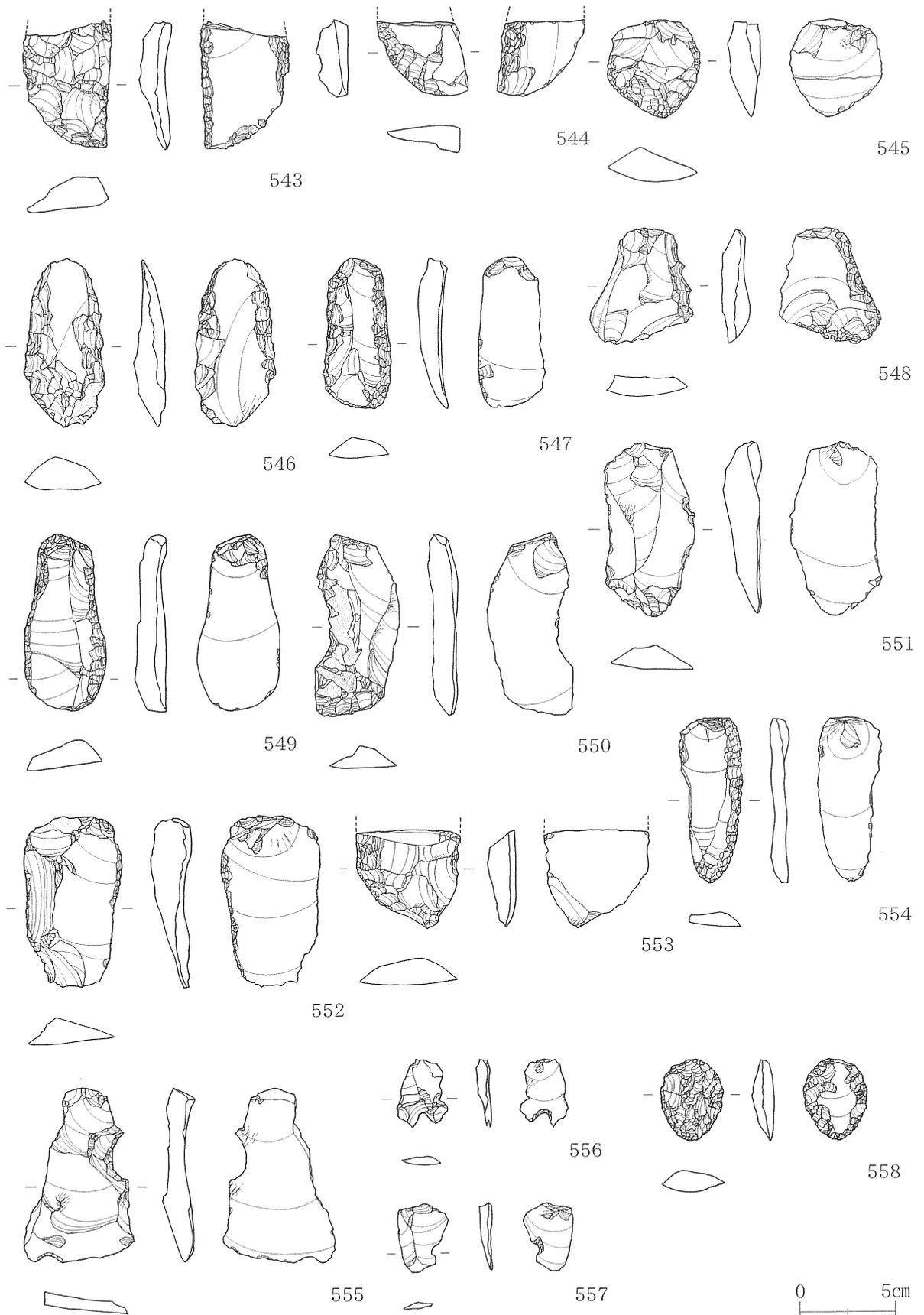
第59図 東側調査区遺構外出土遺物 (29)



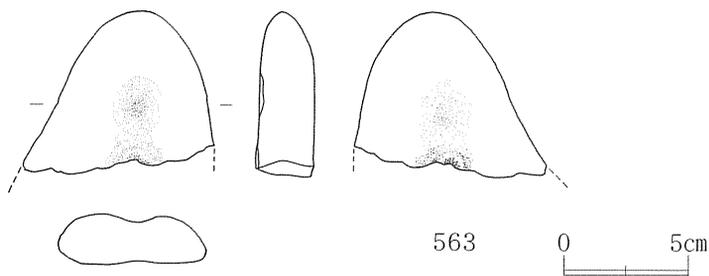
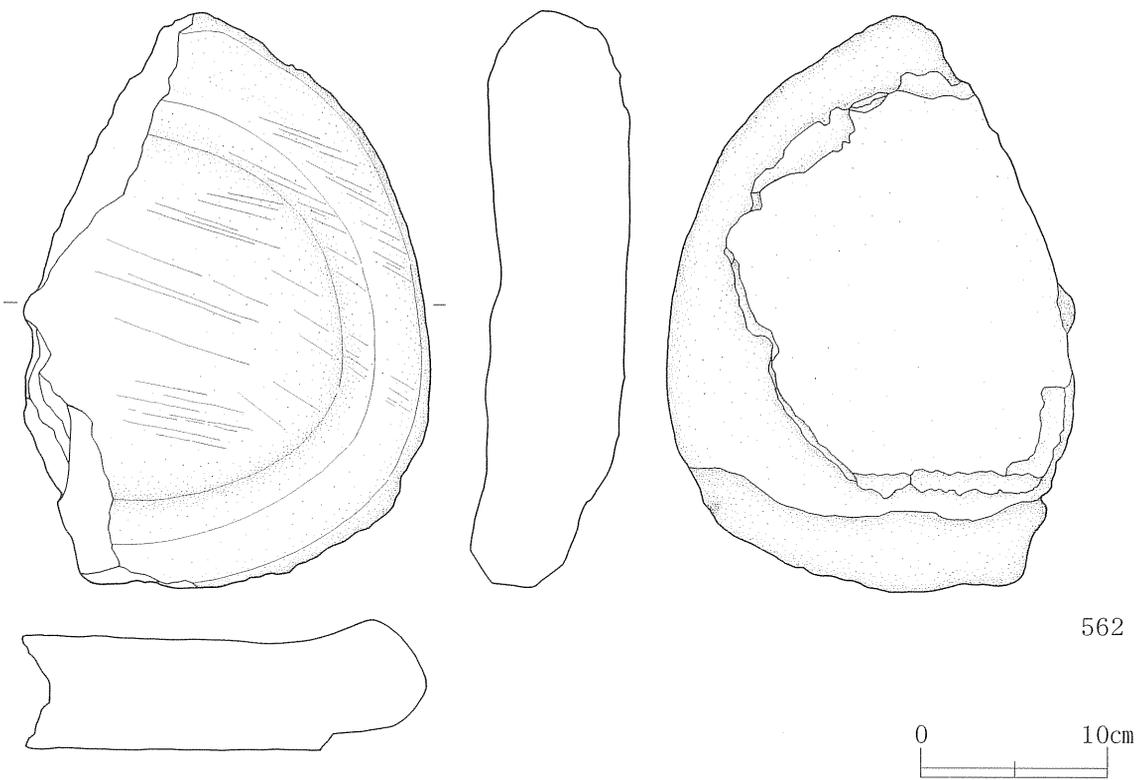
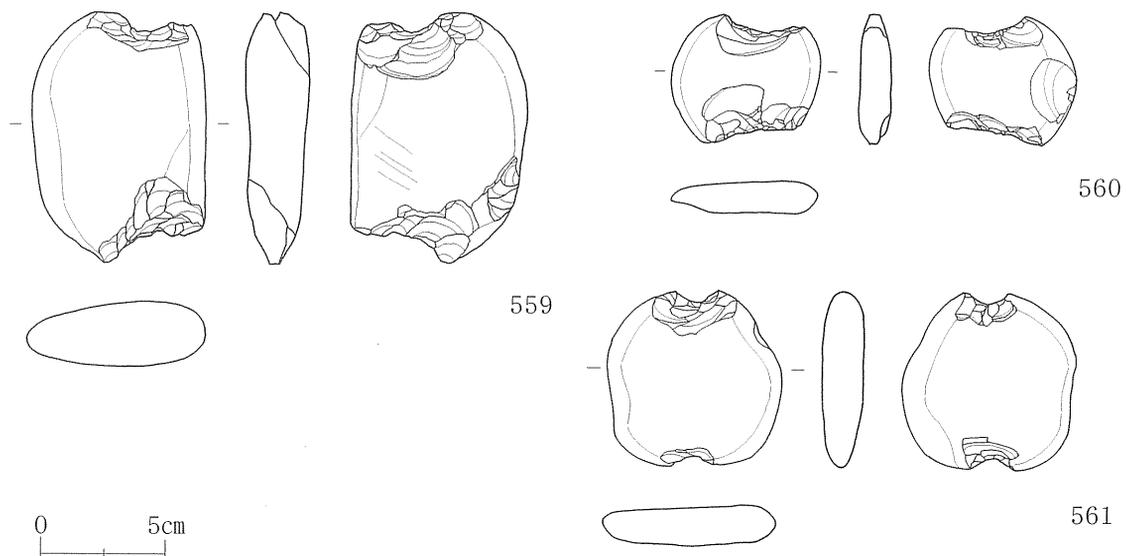
第60図 東側調査区遺構外出土遺物 (30)



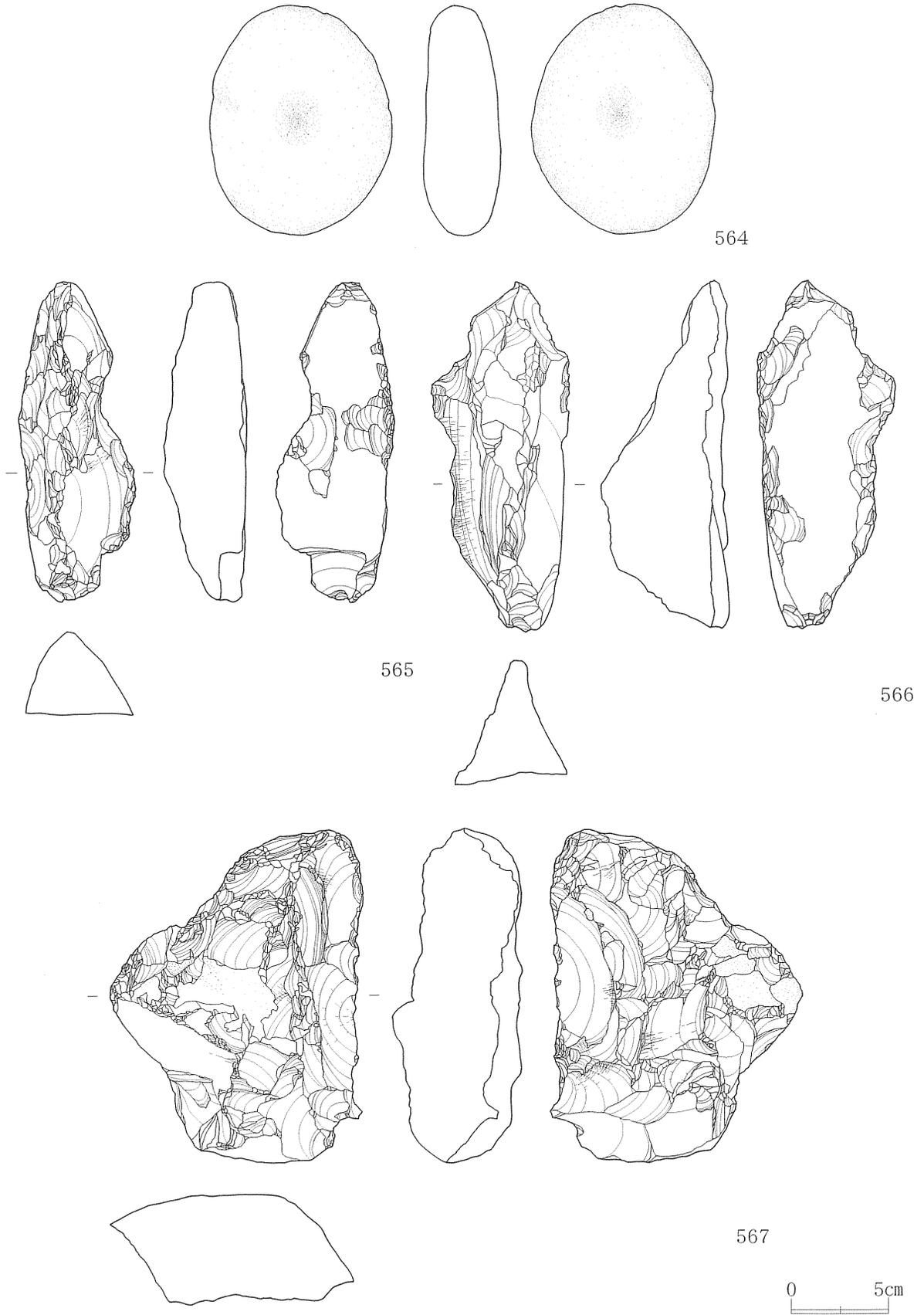
第61図 東側調査区遺構外出土遺物 (31)



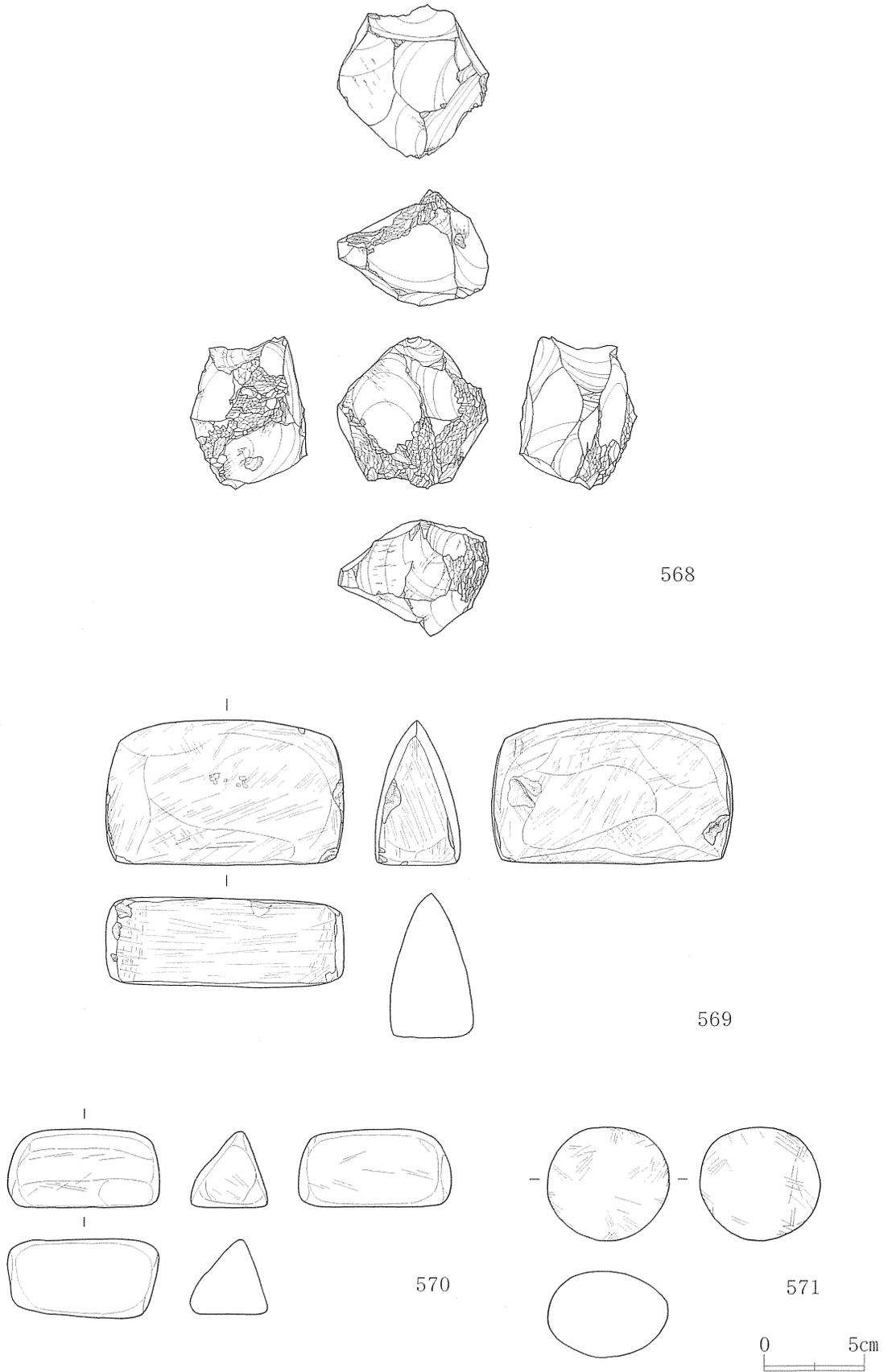
第62図 東側調査区遺構外出土遺物 (32)



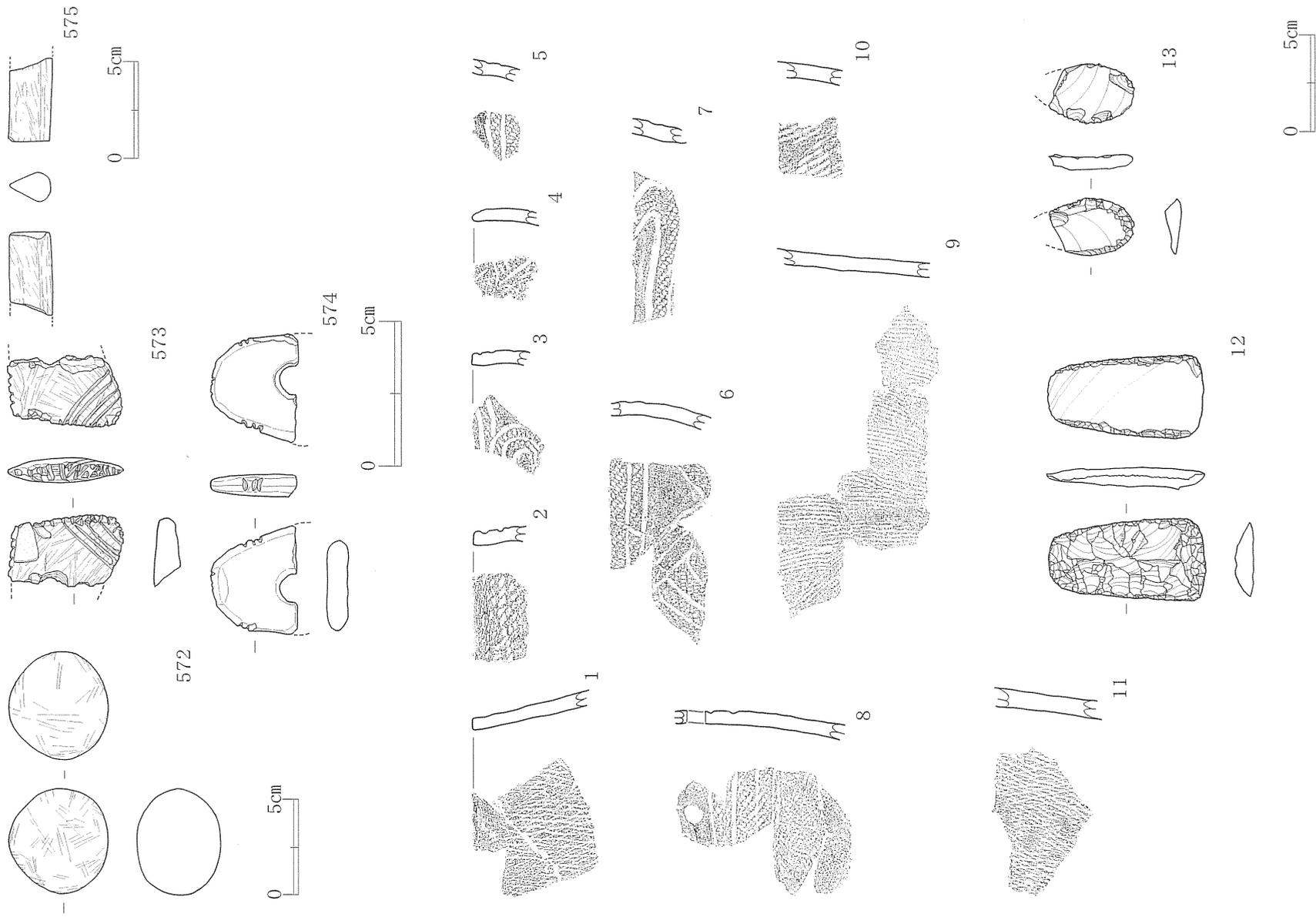
第63図 東側調査区遺構外出土遺物 (33)



第64図 東側調査区遺構外出土遺物 (34)



第65図 東側調査区遺構外出土遺物 (35)



第66図 東側調査区遺構外出土遺物と西側調査区遺構外出土遺物 (36)

挿図番号	番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
9	2	SI36-P-2	石槍	頁岩	67.5	60.5	15.0	57.5
11	5	SI38-P-1	スクレイパー	頁岩	55.0	33.0	5.0	6.0
12	7	SI38-P-1	打製石斧	頁岩	242.5	115.5	33.0	1,123.8
13	7	SK01	スクレイパー	頁岩	33.2	47.5	9.0	14.2
14	8	SK01	石皿	玄武岩	217.5	190.5	56.0	2,850.0
14	9	SK01	棒状の石	礫岩	315.5	140.0	106.0	6,710.0
16	11	SK08	スクレイパー	頁岩	44.0	59.5	2.0	10.9
20	1	SK28	スクレイパー	頁岩	50.5	32.0	5.0	5.3
28	2	SK34	不明	頁岩	50.0	28.5	9.0	8.5
46	345	KH64	石鏃	頁岩	36.0	15.3	4.0	2.2
46	346	JIG1	石鏃	チャート	34.0	26.0	7.0	4.8
47	347	KQ61	石鏃	珪礫	47.0	28.0	9.5	11.5
47	348	KP61	石鏃	チャート	24.5	14.5	5.5	1.6
47	349	KP54	石槍	頁岩	130.0	45.0	9.0	57.4
47	350	JE53	石槍	頁岩	56.0	28.5	8.0	10.7
47	352	JP46	石槍	頁岩	62.0	31.0	1.0	15.2
47	351	KR59	石槍	頁岩	98.0	32.0	14.5	45.9
47	353	KP63	石槍	チャート	93.5	24.5	17.5	39.3
47	354	KO60	石槍	頁岩	44.0	22.0	9.5	7.3
47	355	KM62	石槍	頁岩	76.5	23.0	16.5	29.6
47	358	KC61	石槍	チャート	71.5	24.0	23.0	22.1
47	357	KT57	石槍	チャート	42.0	24.6	8.0	7.8
47	356	KO61	石槍	頁岩	96.0	39.5	13.5	48.4
48	362	KI62	石鏃	頁岩	48.0	19.0	5.0	5.4
48	361	KQ62	石鏃	頁岩	66.0	18.0	3.5	9.0
47	360	KB65	石鏃	頁岩	29.0	24.0	3.0	2.4
47	359	KH58	石鏃	頁岩	37.5	26.5	1.5	4.2
48	367	JN48	石鏃	頁岩	37.5	22.0	3.0	4.3
48	365	KM68	石鏃	頁岩	32.3	31.0	4.0	7.1
48	363	KN62	石鏃	頁岩	48.0	34.0	3.5	5.8
48	364	JS62	石鏃	頁岩	46.0	21.5	2.5	2.7
48	366	KO63	石鏃	頁岩	44.0	28.0	3.5	6.3
48	369	KQ62	石鏃	頁岩	49.0	40.5	1.5	12.1
48	372	KI59	石鏃	頁岩	60.7	42.0	3.0	17.6
48	368	JC65	石鏃	頁岩	37.0	18.0	4.0	4.2
48	370	KS57	石鏃	頁岩	78.0	43.5	5.0	33.8
48	371	KK59	石鏃	頁岩	61.0	30.0	3.0	16.3
48	376	JQ64	石鏃	頁岩	67.0	42.0	2.5	18.6
48	373	KI59	石鏃	頁岩	84.0	31.5	11.0	44.3
48	374	KR61	石鏃	頁岩	60.5	42.0	5.5	24.6
48	375	JG62	石鏃	頁岩	79.0	36.0	3.0	28.3
48	377	JB52	石鏃	珪質頁岩	58.0	22.5	3.0	10.5
48	378	KP63	石鏃	頁岩	84.0	39.0	4.5	30.4
48	379	MM44	石鏃	珪質頁岩	61.5	42.0	3.0	19.6
48	381	JK63	石匙	頁岩	39.5	23.5	5.5	4.8
48	380	KM62	石匙	頁岩	71.0	43.0	7.0	19.0
49	386	KK60	石匙	頁岩	101.5	41.5	11.0	54.3
49	387	KH59	石匙	頁岩	97.5	24.0	7.0	23.1
49	388	KK59	石匙	頁岩	73.0	25.0	6.5	13.9
49	389	JM47	石匙	頁岩	113.0	53.0	15.0	75.8
49	390	IN57	石匙	頁岩	94.0	43.0	7.5	19.7
49	392	KO63	石匙	頁岩	76.0	45.0	10.5	36.4
49	391	KN58	石匙	頁岩	64.0	17.0	6.5	7.4
49	393	JF51	石匙	頁岩	74.0	56.0	12.5	55.0
49	394	KR61	石匙	頁岩	67.5	27.0	8.0	17.3
49	395	LM50	石匙	頁岩	68.0	35.0	7.0	14.3
49	396	KR60	石匙	頁岩	46.5	58.0	10.0	16.1
50	397	KH62	石匙	珪質頁岩	60.0	62.0	10.0	31.8
50	399	KN59	石匙	頁岩	27.5	37.5	6.0	5.0
49	382	JQ57	石匙	頁岩	41.0	90.0	11.0	34.5
50	398	KL58	石匙	頁岩	61.0	65.0	9.5	26.6

挿図番号	番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
49	383	JB64	石匙	頁岩	31.5	70.5	6.0	10.6
49	384	JE60	石匙	頁岩	38.0	96.5	7.0	27.1
49	385	JF69	石匙	頁岩	62.5	72.0	9.5	27.5
50	401	KM57	石籠	頁岩	92.0	49.5	14.5	56.5
50	400	JF64	石籠	頁岩	85.0	43.0	9.5	49.7
50	402	KO60	石籠	頁岩	88.5	40.0	15.0	47.8
50	403	KC65	石籠	頁岩	83.0	44.5	7.5	46.7
50	404	KM59	石籠	頁岩	88.0	42.0	17.0	62.1
50	409	KR60	石籠	頁岩	81.0	45.0	16.0	50.5
50	406	KM63	石籠	頁岩	85.5	40.5	16.0	55.8
50	407	KO59	石籠	頁岩	77.5	39.0	14.0	38.1
51	411	KL55	石籠	頁岩	111.0	62.0	18.5	133.0
50	410	KK59	石籠	頁岩	90.2	40.5	15.5	56.4
50	408	JJ57	石籠	頁岩	65.5	39.0	8.5	29.3
51	412	KP61	石籠	頁岩	102.0	57.0	19.0	122.2
51	413	KP60	石籠	頁岩	85.0	36.0	17.0	52.9
51	414	JJ54	石籠	頁岩	72.0	37.0	16.5	40.6
51	415	KL59	石籠	頁岩	97.0	49.0	16.0	74.1
51	416	KP60	石籠	頁岩	65.0	40.5	14.0	36.4
51	419	KR59	石籠	頁岩	109.0	45.5	15.5	80.1
51	417	KR60	石籠	頁岩	77.0	54.5	11.5	52.3
51	420	KL58	石籠	頁岩	89.5	41.0	17.0	70.0
51	418	KS61	石籠	頁岩	59.0	33.5	10.0	25.5
51	421	KM59	石籠	頁岩	74.0	46.0	14.5	39.5
51	422	KO63	石籠	頁岩	64.0	46.0	16.0	39.5
51	423	KP61	石籠	頁岩	76.5	41.0	14.5	54.0
52	425	JO64	石籠	頁岩	86.5	36.0	13.5	52.1
51	424	JR62	石籠	頁岩	75.0	36.0	13.0	36.5
52	426	KL63	石籠	頁岩	70.0	34.0	18.0	41.0
52	427	KT58	石籠	頁岩	78.0	42.0	17.5	51.6
52	428	KM60	石籠	頁岩	60.0	33.0	11.5	28.2
52	429	KM68	石籠	頁岩	54.0	42.0	10.0	24.0
52	430	KS61	石籠	頁岩	60.0	29.0	11.5	18.1
52	431	KP61	石籠	頁岩	59.0	34.5	16.0	27.3
52	433	表採	石籠	頁岩	95.0	47.0	17.5	57.0
52	434	KP59	石籠	頁岩	104.0	47.0	17.5	89.5
52	435	KS60	石籠	頁岩	94.0	42.0	11.0	53.9
52	432	KO61	石籠	頁岩	72.0	43.0	16.5	45.9
52	436	表採	石籠	頁岩	74.5	43.0	16.5	45.5
52	437	KI56	石籠	頁岩	74.0	35.0	12.0	32.9
52	438	KS61	石籠	頁岩	84.0	48.3	15.5	55.3
53	440	KS62	石籠	頁岩	73.0	50.0	12.0	34.5
52	439	KL58	石籠	頁岩	60.0	52.5	12.0	33.0
53	442	KS61	石籠	頁岩	52.5	46.0	11.5	28.8
53	443	KL63	石籠	頁岩	104.0	49.0	16.5	89.5
53	441	JO48	石籠	頁岩	96.0	46.0	14.5	62.3
53	444	KS62	石籠	頁岩	78.0	36.5	12.0	48.2
50	405	KP59	石籠	頁岩	79.0	41.5	8.5	36.1
53	448	KP61	石籠	頁岩	76.5	40.5	18.0	47.5
53	445	KK58	石籠	頁岩	119.0	48.0	111.0	98.3
53	446	KH60	石籠	頁岩	83.0	38.0	18.0	69.9
53	447	KO63	石籠	頁岩	92.5	44.0	14.0	48.5
53	450	KM60	石籠	頁岩	66.0	36.0	13.5	36.9
53	449	KP60	石籠	頁岩	98.0	39.0	20.0	86.5
53	452	KJ60	石籠	頁岩	74.0	46.5	15.0	51.6
53	451	KN58	石籠	頁岩	84.0	42.0	20.5	82.9
53	453	KO59	石籠	頁岩	75.0	38.5	14.0	46.1
54	459	KP61	石籠	頁岩	53.0	53.0	14.5	38.5
54	467	KM62	石籠	頁岩	35.5	37.0	10.5	14.2
54	456	KM58	石籠	頁岩	48.0	56.5	18.0	52.2
54	458	KP61	石籠	頁岩	60.5	44.0	18.0	48.9

第3表 出土石器観察表(1)

第4章 調査の記録

挿図番号	番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
53	454	KJ58	石筥	頁岩	60.0	38.0	16.0	35.1
54	455	KQ57	石筥	頁岩	50.5	52.0	14.0	40.5
54	460	KS62	石筥	頁岩	48.5	59.0	19.0	48.5
54	465	KN60	石筥	頁岩	55.5	41.0	13.0	37.0
54	457	KQ58	石筥	頁岩	66.0	59.0	13.0	58.8
54	462	KS61	石筥	硬質頁岩	74.0	49.0	18.5	58.9
54	461	KL59	石筥	頁岩	73.0	57.0	14.0	63.4
54	464	KP63	石筥	安山岩	68.0	63.0	20.0	95.6
54	463	JR60	石筥	頁岩	63.0	51.5	13.0	57.1
54	466	KF59	石筥	頁岩	46.5	44.0	16.0	38.1
55	468	KS61	トランシェ様	頁岩	106.0	44.0	18.5	84.5
55	469	KJ59	トランシェ様	頁岩	92.0	43.5	14.0	59.5
55	470	KP63	トランシェ様	頁岩	87.0	39.5	17.0	52.2
55	479	KL57	トランシェ様	頁岩	82.0	51.5	12.0	34.7
56	483	KJ60	トランシェ様	頁岩	67.0	46.0	19.0	53.6
55	471	KM63	トランシェ様	頁岩	57.0	49.3	9.0	31.6
55	472	KS62	トランシェ様	頁岩	71.0	47.0	17.0	40.5
56	482	KQ61	トランシェ様	頁岩	77.0	53.0	18.0	62.4
56	481	KL58	トランシェ様	頁岩	55.0	37.0	14.5	25.5
55	477	KS61	トランシェ様	頁岩	46.5	44.5	12.0	19.0
55	473	KJ60	トランシェ様	頁岩	57.0	43.5	11.0	25.7
56	485	KP60	トランシェ様	頁岩	73.0	46.0	14.0	41.0
56	488	KP63	トランシェ様	珪質頁岩	92.0	55.5	21.0	87.5
56	484	IT64	トランシェ様	頁岩	49.5	33.0	11.0	18.0
56	480	KO63	トランシェ様	頁岩	92.0	59.0	29.5	155.9
55	474	KM58	トランシェ様	頁岩	95.0	57.0	18.0	92.5
56	486	KP61	トランシェ様	頁岩	75.5	45.0	22.0	59.7
55	478	KS61	トランシェ様	頁岩	75.0	51.5	17.5	68.7
56	487	KH60	トランシェ様	頁岩	101.5	52.0	14.5	105.1
56	489	KL55	トランシェ様	頁岩	70.0	50.0	12.5	40.5
55	476	KJ62	トランシェ様	頁岩	79.5	52.0	15.5	45.6
55	475	KS61	トランシェ様	珪質頁岩	79.5	46.0	10.5	31.9
57	492	KR61	トランシェ様	頁岩	51.0	47.5	9.0	32.1
56	490	KL58	トランシェ様	頁岩	90.5	45.0	15.0	57.3
56	491	KP63	トランシェ様	珪質頁岩	59.0	58.5	13.0	59.6
57	493	KP63	トランシェ様	頁岩	47.5	50.0	15.0	40.1
57	494	KS61	打製石斧	頁岩	121.0	47.0	16.0	91.8
57	495	KH59	打製石斧	頁岩	124.0	58.5	22.5	144.7
57	499	KP61	打製石斧	頁岩	200.0	62.0	28.0	326.5
57	497	KP61	打製石斧	頁岩	59.7	38.5	12.0	25.6
57	496	KJ59	打製石斧	頁岩	83.5	41.5	17.5	40.8
57	500	KL58	打製石斧	頁岩	119.0	36.5	27.5	109.0
57	498	JR53	打製石斧	頁岩	103.0	37.5	17.0	63.8
58	501	KR60	打製石斧	頁岩	111.0	50.5	22.5	116.9
58	502	KI59	打製石斧	頁岩	111.0	39.0	19.0	92.4
58	503	KP60	打製石斧	頁岩	80.0	38.0	18.0	60.1
58	504	JN57	打製石斧	頁岩	110.0	44.5	16.5	79.9
58	505	KS61	打製石斧	頁岩	76.0	54.0	18.5	88.9
59	513	KI59	打製石斧	頁岩	90.0	41.0	16.0	68.8
58	507	JB60	打製石斧	頁岩	99.0	79.5	23.0	197.5
58	508	KK61	打製石斧	頁岩	99.0	75.5	28.0	202.5
58	509	KN62	打製石斧	頁岩	103.0	56.0	16.0	94.7
58	506	KJ58	打製石斧	頁岩	77.0	39.0	14.5	51.2
59	512	KN61	打製石斧	頁岩	111.0	42.5	13.0	59.0
59	511	KO63	打製石斧	頁岩	98.0	51.0	16.0	80.3
58	510	KR61	打製石斧	珪質頁岩	86.0	59.5	24.0	101.0
59	514	KS62	打製石斧	頁岩	92.5	48.5	17.5	82.4
59	516	KR59	打製石斧	頁岩	84.5	41.0	16.0	65.2
59	515	KI57	打製石斧	頁岩	66.0	41.0	20.5	49.8
59	517	KS61	打製石斧	頁岩	113.0	52.0	20.5	96.6

挿図番号	番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
59	518	KR60	打製石斧	頁岩	118.0	48.5	18.0	116.9
60	521	KS61	打製石斧	頁岩	94.0	73.5	32.0	192.0
59	519	KO60	打製石斧	頁岩	108.0	88.0	24.0	194.6
59	520	ML42	打製石斧	頁岩	80.0	61.0	16.5	74.9
60	522	KP61	打製石斧	頁岩	93.0	55.0	21.0	93.8
60	523	KM61	打製石斧	頁岩	94.5	74.0	19.0	149.5
60	524	KP63	打製石斧	頁岩	70.0	55.5	20.0	69.4
60	525	KA63	打製石斧	頁岩	63.5	53.5	22.5	90.0
60	526	KS61	打製石斧	珪質頁岩	85.0	56.0	21.0	97.6
60	528	KH59	打製石斧	頁岩	87.0	49.5	27.5	103.9
60	527	KS61	打製石斧	頁岩	72.0	58.5	24.5	137.1
60	529	KR59	打製石斧	頁岩	75.0	45.5	15.5	65.5
60	530	KL58	打製石斧	頁岩	51.0	67.5	15.0	56.8
61	531	JQ46	磨製石斧	砂岩	112.5	43.5	23.0	2,010.0
61	532	JP46	磨製石斧	砂岩	85.0	40.5	14.5	74.3
61	533	JP47	磨製石斧	緑色泥岩	102.0	37.5	21.0	120.8
61	538	KT54	磨製石斧	頁岩	56.5	40.0	18.0	80.1
61	537	KO62	磨製石斧	砂岩	58.0	55.0	25.0	133.1
61	536	IR59	磨製石斧	泥岩	85.5	37.0	11.0	17.7
61	535	KP63	磨製石斧	砂岩	88.0	41.0	23.5	142.0
61	534	KK61	磨製石斧	砂岩	64.0	49.5	13.5	75.0
61	539	JJ55	スクレイパー	頁岩	71.5	35.0	11.0	28.8
61	540	KP61	スクレイパー	頁岩	133.5	53.5	12.0	93.9
61	541	KP63	スクレイパー	珪質頁岩	50.0	101.5	9.5	32.9
61	542	JJ61	スクレイパー	頁岩	48.5	90.5	22.5	52.2
62	544	KS62	スクレイパー	珪質頁岩	38.5	48.0	14.0	24.7
62	543	KE62	スクレイパー	珪質頁岩	66.0	41.5	16.0	50.5
62	545	KK56	スクレイパー	頁岩	49.0	49.0	17.0	35.8
62	548	KP61	スクレイパー	珪質頁岩	60.0	53.5	10.5	36.7
62	546	KO63	スクレイパー	頁岩	86.5	43.0	16.5	50.0
62	550	LM53	スクレイパー	珪質頁岩	94.0	45.0	13.0	56.5
62	549	JM63	スクレイパー	珪質頁岩	92.0	44.0	13.0	61.0
62	551	KL57	スクレイパー	珪質頁岩	90.0	47.0	13.5	58.2
62	547	JG56	スクレイパー	頁岩	77.5	36.0	10.5	36.8
62	552	KQ61	スクレイパー	頁岩	88.0	52.0	14.5	70.8
62	553	KI59	スクレイパー	頁岩	51.0	54.5	13.5	39.9
62	554	JL49	スクレイパー	頁岩	85.0	34.0	7.5	26.8
62	555	JO59	スクレイパー	頁岩	90.0	58.5	7.0	48.5
62	556	KS61	スクレイパー	頁岩	35.0	26.0	3.0	3.9
62	557	KS61	スクレイパー	珪質頁岩	35.0	26.0	4.5	3.9
62	558	JS62	スクレイパー	珪質頁岩	42.0	34.0	11.0	13.6
63	559	KD60	石錘	流紋岩	70.0	99.0	25.0	220.7
63	560	JJ55	石錘	頁岩	58.5	50.5	12.0	49.0
63	561	JL60	石錘	頁岩	68.5	70.0	18.5	113.2
63	562	IT54	石皿	溶岩	303.0	218.0	63.0	4,730.0
63	563	KQ59	凹石	砂岩	65.0	77.0	21.0	115.3
64	564	KP63	凹石	閃緑岩	117.5	94.0	40.0	487.2
64	565	KM61	石核	頁岩	164.5	61.5	43.0	319.1
64	566	KF62	石核	頁岩	178.5	71.0	58.0	508.9
64	567	KR61	石核	頁岩	172.0	130.0	56.0	1,375.0
65	568	JC64	石核	頁岩	75.0	75.0	57.0	293.1
65	569	IT57	石冠	緑色泥岩	71.0	117.0	42.0	558.1
65	570	JA65	石冠	閃緑岩	36.0	76.0	37.0	151.2
65	571	IT54	球状の磨石	砂岩	56.0	59.5	43.0	189.9
66	572	IT54	球状の磨石	砂岩	51.0	55.0	43.5	149.9
66	573	KH62	線刻磯	砂岩	40.5	25.0	9.0	6.5
66	574	表採	垂飾品	砂岩	30.0	38.0	7.0	8.0
66	575	JN47	不明	珪化木	22.5	43.5	15.5	21.9
66	12	MN42	石筥	頁岩	81.0	43.0	9.5	44.2
66	13	MK42	スクレイパー	頁岩	44.0	31.5	9.0	11.5

第4表 出土石器観察表(2)

第1節 桐内C遺跡出土炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、S I - 36、S Q N - 13、S N - 23、S R - 37から出土した4点の炭化材である。

2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果は表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 桐内C遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	地点・層準	樹種（和名／学名）	
No. 1	S I - 36	カエデ属	<i>Acer</i>
No. 2	S Q N - 13	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
No. 3	S N - 23	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No. 4	S R - 37	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

a. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版22

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

b. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版22

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

c. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

図版22

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

d. カエデ属 *Acer* カエデ科

図版23

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。カエデ属は北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

4. 所見

同定された樹種は、カエデ属、コナラ属コナラ節、スギ、クリであった。これらの樹種はナラやブナを主とする落葉広葉樹林域やスギやクリの多い温帯中間林域に生育する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木からもたらされたものと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

第2節 桐内C遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	S I - 36	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	S Q N - 13	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.3	S N - 23	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.4	S R - 37	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	3680±50	-28.6	3620±50	交点: BC1955 1σ: BC2025~1900 2σ: BC2125~2065, BC2060~1875 BC1805~1795	125385
No.2	3760±60	-25.3	3760±60	交点: BC2145 1σ: BC2270~2110, BC2090~2040 2σ: BC2335~1975	125386
No.3	800±70	-23.3	830±70	交点: AD1225 1σ: AD1170~1275 2σ: AD1035~1295	125387
No.4	3890±60	-25.3	3890±60	交点: BC2350 1σ: BC2460~2280 2σ: BC2490~2175	125388

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

δ ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。

1σ （68%確率）・ 2σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

第6章 まとめ

桐内C遺跡の発掘調査は、1998（平成10）年5月12日から9月24日までの90日間行われた。発掘調査で検出した主な遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑19基、石囲炉1基、土器埋設遺構4基、焼土遺構2基、性格不明遺構1基である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品・石製品である。

東側調査区で検出した2軒の竪穴住居跡のうち、S I 36は、沈線文の施文された土器片の出土により縄文時代後期と考えられる。また、S I 38は、円筒上層e式土器、大木8b式土器の出土により縄文時代中期中葉の所産と考えられる。西側調査区では、3軒の竪穴住居跡を検出した。S I 14 Bでは土器片が出土したが、その他の竪穴住居跡では遺物が出土しなかった。しかし、西側調査区で出土した土器は、すべて縄文時代後期の土器であることから、この3軒の竪穴住居跡も縄文時代後期の遺構と考えられる。

東側調査区で検出した土坑は、ほとんどが十腰内I群土器を伴っており、縄文時代後期の所産と考えられる。西側調査区では、沢沿いにSK11B・12B・13Bの土坑が3基並んでいた。底面中央にピットがあり、逆茂木を立てた陥し穴であろう。

土器埋設遺構は4基検出したが、復元できたのはSR37の土器のみである。この土器は、縄文時代後期の土器と推測される。また、西側調査区で検出したSR1Bの土器も、焼成等から縄文時代後期と推測されるが、残り2基についての時期は不明である。

遺構外から出土した土器は、以下の通りに分類される。第I群1類は、縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての所謂表裏縄文の土器、2類は丸底の土器であり、長七谷地Ⅲ群に極めて近く、縄文時代前期初頭の土器と考えられる。第II群は縄文時代前期の土器であり、円筒下層式の土器である。第Ⅲ群は縄文時代中期の土器であり、1類は円筒上層b式土器、2類は円筒上層d式土器、3類は円筒上層e式土器である。第4類は大木7～8a式土器に、第5類は大木8b式土器に、第6類は大木9～10式土器に比定されよう。7類の106の土器は、円筒上層式直後の土器に比定されよう。8類・9類は、土器型式が不明の土器である。第IV群の土器は十腰内I群の土器と思われる。第V群の土器は、大洞A～A'式の土器であろう。なお、土器型式については、今後さらに検討する必要がある。

本遺跡から出土した唯一の土偶は、円筒土器文化圏における縄文時代中期の代表的な十字型土偶と考えられる。

桐内C遺跡の特徴として、石器の出土数の多さがあげられる。縄文時代早期に位置づけられているトランシェ様石器が26点も出土している。また、石篋の出土数は100点を超えている。石錐は、不定形の剥片の一端に加工調整をして錐部を作り出したものが多い。石匙は、横型石匙より縦型石匙が多い。これらの石器と土器の出土分布を見ると、表裏縄文の土器、丸底の土器、縄文時代前期の土器、縄文時代中期の土器が多く出土している場所と重なる。つまり、遺跡中央付近では縄文時代中期までの遺物の出土が多い。これは、土偶の出土位置とも重なる。このことより、縄文時代早期から中期までは、遺跡中央付近が生活の場であり、縄文時代後期になると、生活の場は遺跡中央部付近の沢より東側に移っていったのであろう。石器の出土位置より推測すると、本遺跡で出土した多くの石器は、縄文時代中期までに制作されたものが多いと考えられる。このようにたくさんの石器が出土したのににもかかわらず、竪穴住居跡の検出が少ない。県道を挟んだ桐内D遺跡には、これらの石器を使用した

縄文人の住居跡が残されているのだろうか。アスファルトの付着した土器や石器の出土は、他の地域との交易・交流をうかがわせるし、ていねいに磨られて作られている石冠は、縄文時代の祭祀を想像させる。この地域での今後の調査により、桐内C遺跡の性格等がより解明されると思われる。

参考文献

- 村越 潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974（昭和49）年
- 加藤邦雄 「縄文尖底土器」 『縄文文化の研究 3 縄文土器Ⅰ』 雄山閣 1994（平成6）年
- 三宅徹也 「円筒土器」 『縄文文化の研究 3 縄文土器Ⅰ』 雄山閣 1994（平成6）年
- 高橋正勝 「北海道南部の土器」 『縄文文化の研究 4 縄文土器』 雄山閣 1994（平成6）年
- 丹羽 茂 「大木式土器」 『縄文文化の研究 4 縄文土器』 雄山閣 1994（平成6）年
- 成田滋彦 「青森県の土器」 『縄文文化の研究 4 縄文土器』 雄山閣 1994（平成6）年
- 鈴木道之助 『図録・石器入門事典（縄文）』 柏書房 1994（平成6）年
- 東北歴史資料館 『東北地方の土偶』 1996（平成8）年
- 鈴木克彦 「円筒式土器の土偶」 土偶シンポジウム『東北・北海道の土偶』 1994（平成6）年
- 戸沢充則 『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994（平成6）年
- 大川 清 鈴木公雄 工楽善通 『日本土器事典』 1996（平成8）年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 一萩ノ台Ⅱ遺跡一』
1993（平成5）年
- 秋田県教育委員会 『深渡遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ一』
1999（平成11）年
- 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財
発掘調査～』 1997（平成9）年
- 青森県教育委員会 『表館(1)遺跡Ⅲ』 1989（平成元）年



桐内C遺跡全景



2 調査前遺跡全景（北西→）



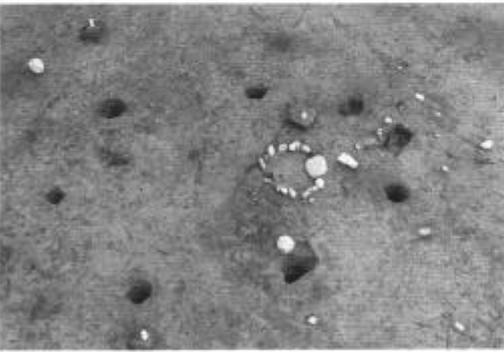
3 調査前遺跡全景（北→）



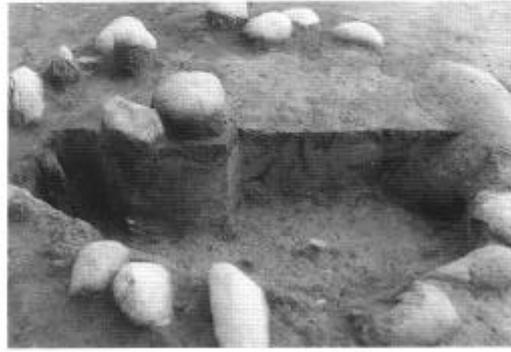
4 作業風景



5 作業風景



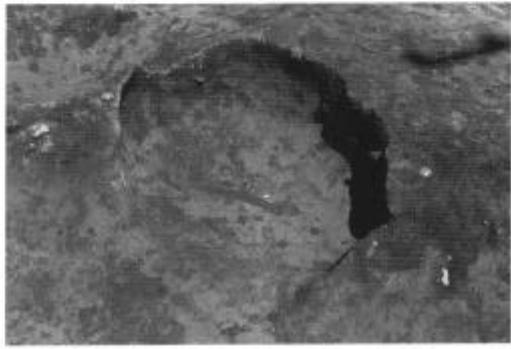
6 S I 36 竪穴住居跡完掘（西→）



7 S I 36 石囲炉断面（南→）



8 S I 38 竪穴住居跡完掘（南→）

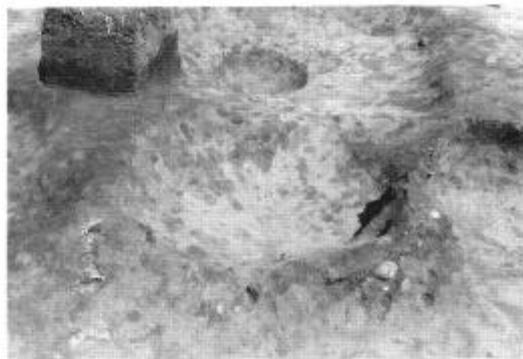


9 SK01 完掘（南西→）

調査前遺跡の全景・検出遺構（1）



10 SK02完掘 (南→)



11 SK06完掘 (西→)



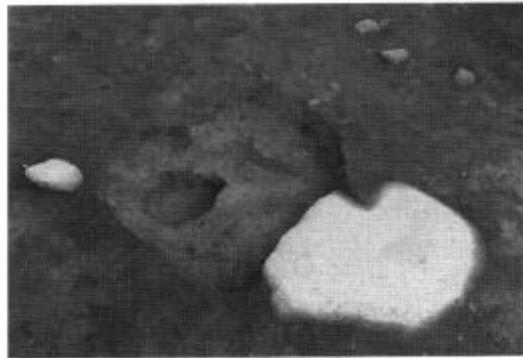
12 SK08完掘 (北西→)



13 SK10自然石出土状況 (南→)



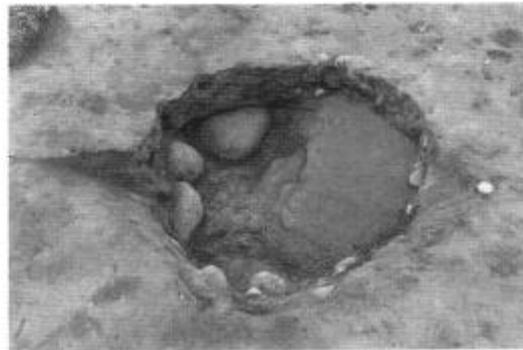
14 SK11遺物出土状況 (北西→)



15 SK12完掘 (南→)

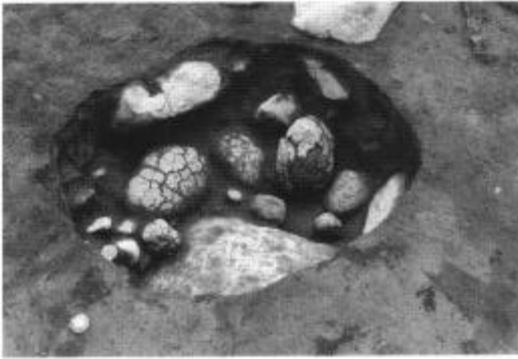


16 SK18完掘 (北→)



17 SK19完掘 (南→)

検出遺構(2)



18 SK20完掘 (北→)



19 SK28遺物出土状況 (南東→)



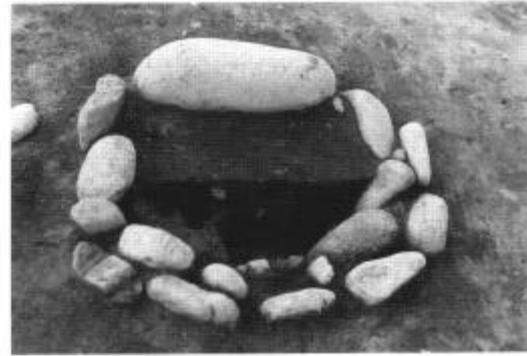
20 SR16断面 (西→)



21 SR37確認 (南→)



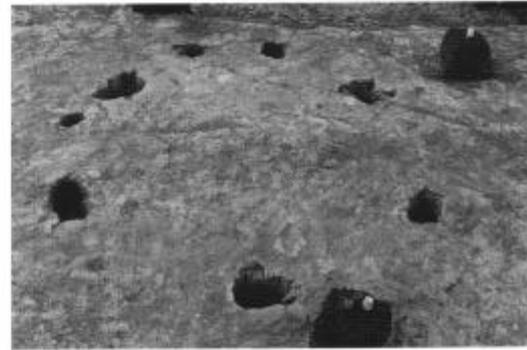
22 SR37断面 (南→)



23 SQN13断面 (南→)



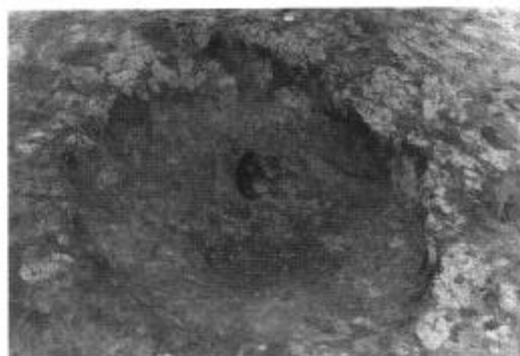
24 S I 14B完掘 (西→)



25 S I 15B完掘 (南→)



26 SI 16B完掘 (南→)



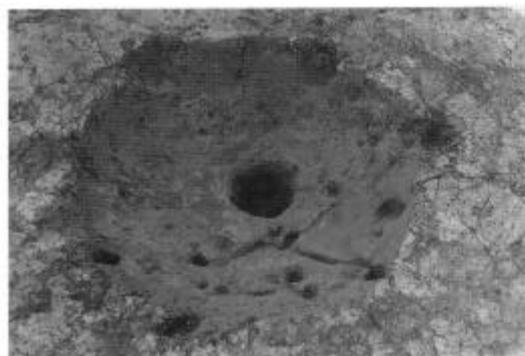
27 SK 2B完掘 (北西→)



28 SK 3B完掘 (南→)



29 SK 4B完掘 (東→)



30 SK 11B完掘 (北→)



31 SK 13B完掘 (東→)

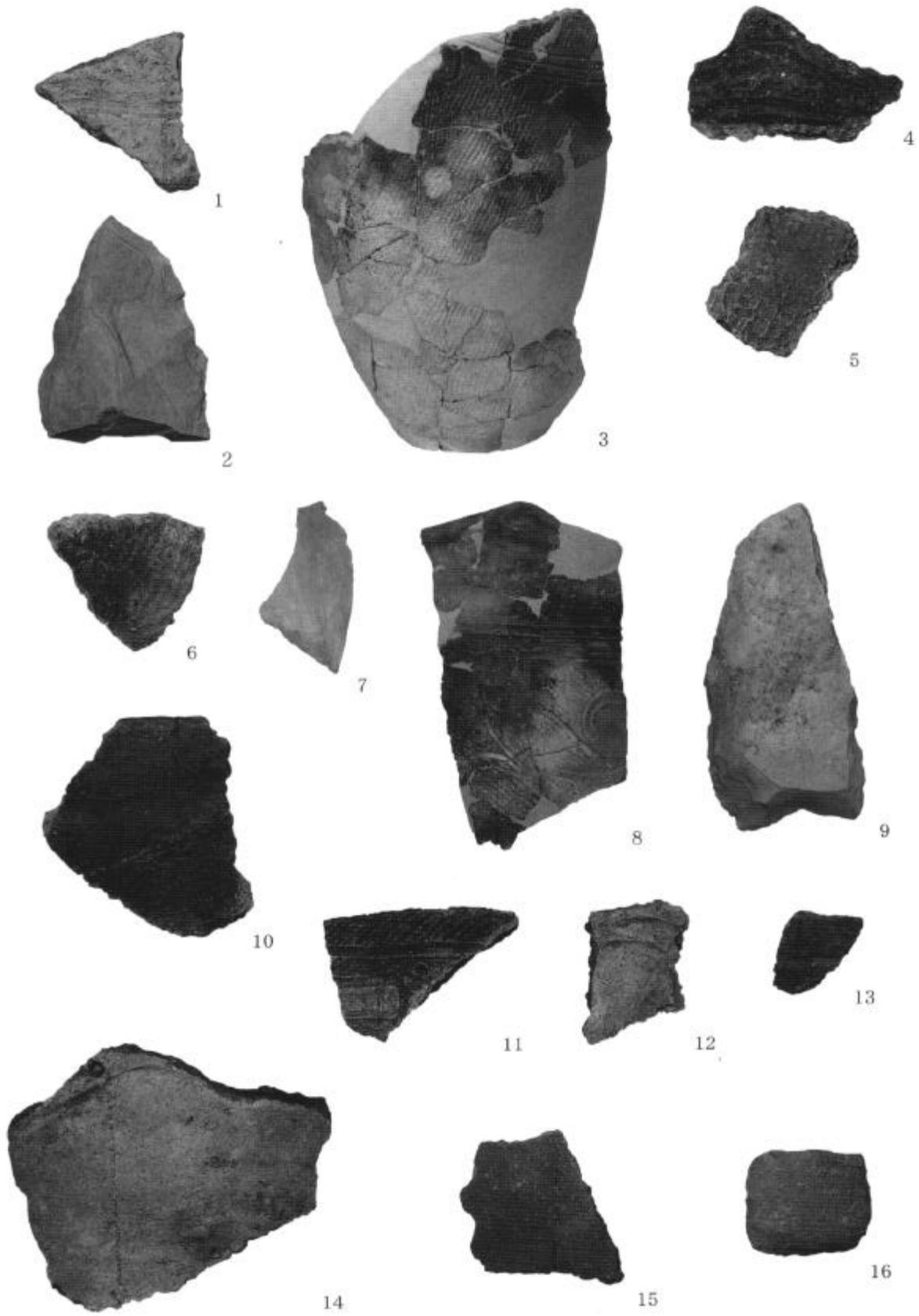


32 SR 1B確認 (西→)



33 SK 11B~SK 13B完掘 (東→)

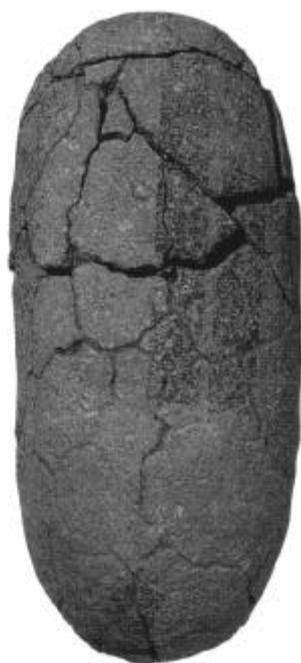
検出遺構 (4)



遺構内出土遺物 (1)



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34

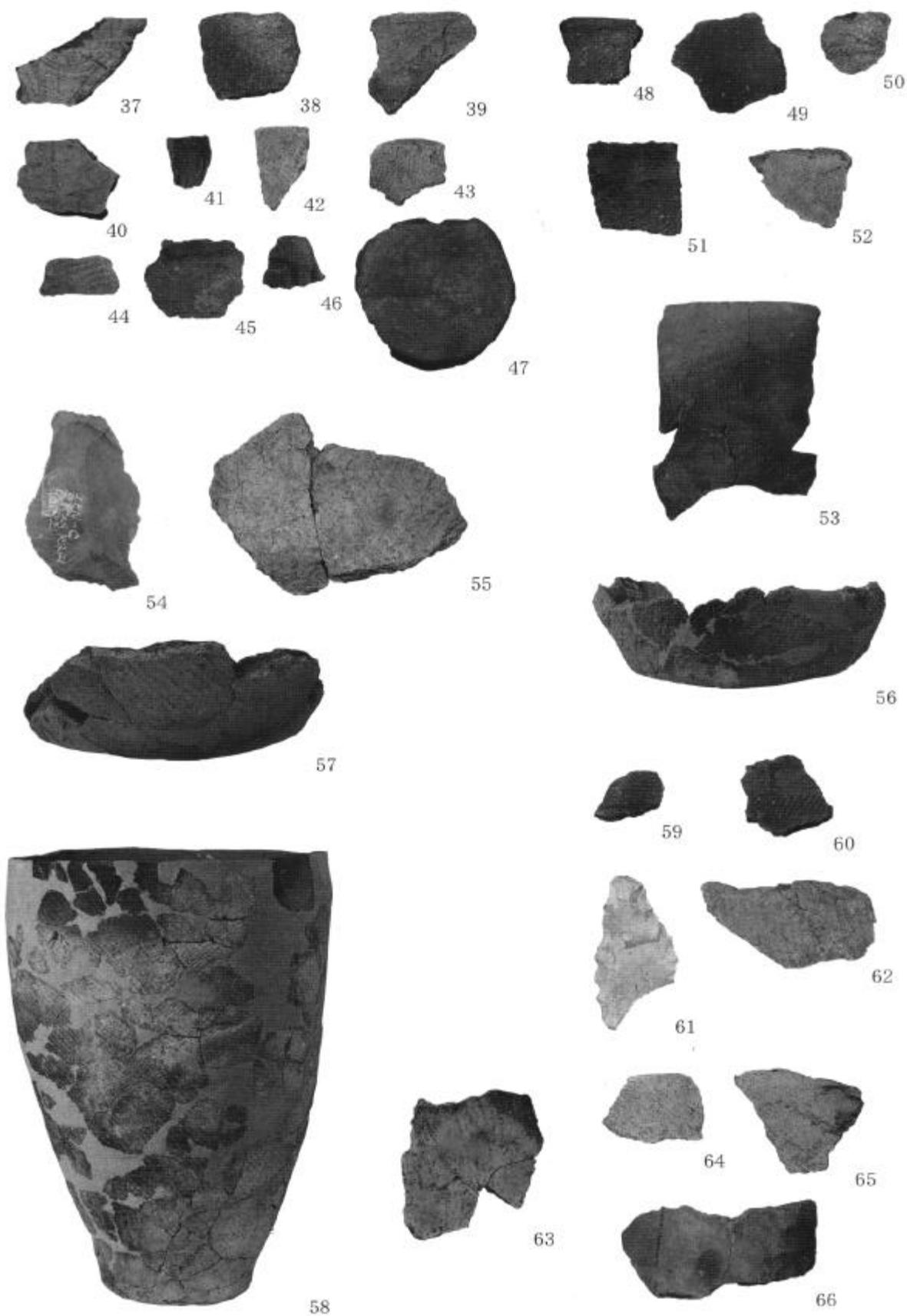


35

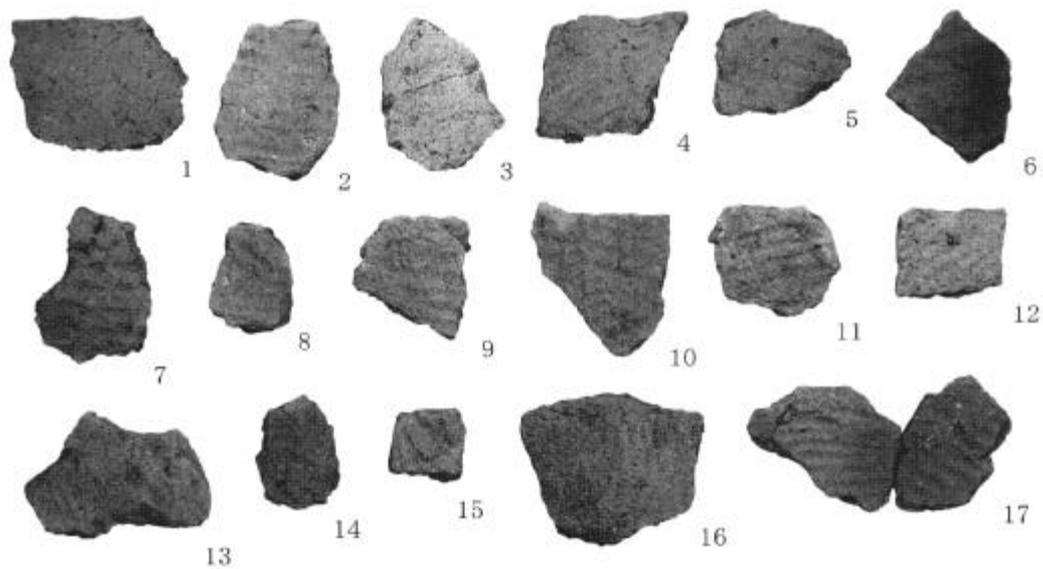


36

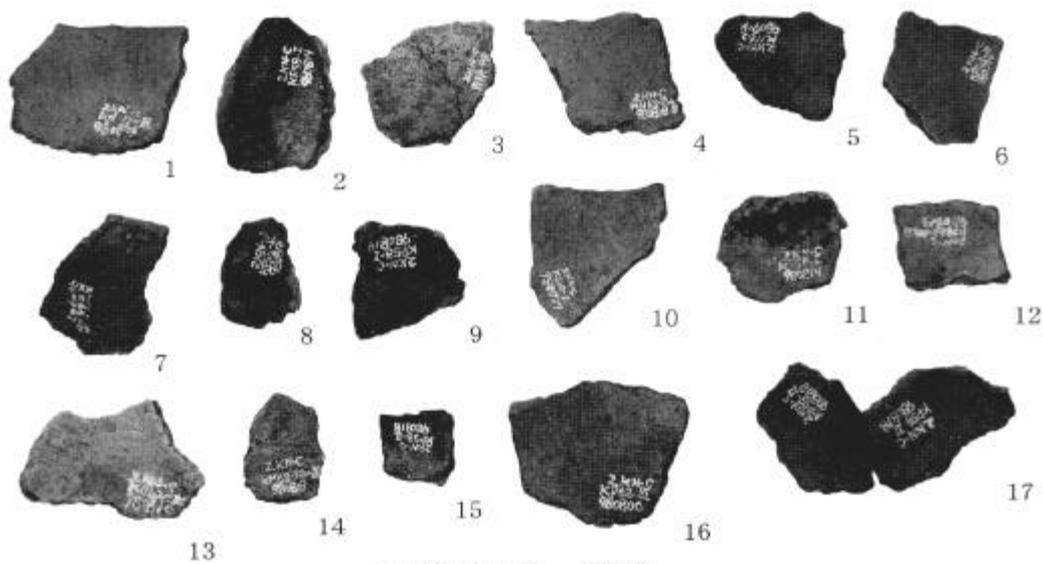
遺構内出土遺物(2)



遺構内出土遺物 (3)



表裏縄文の土器 (表面)

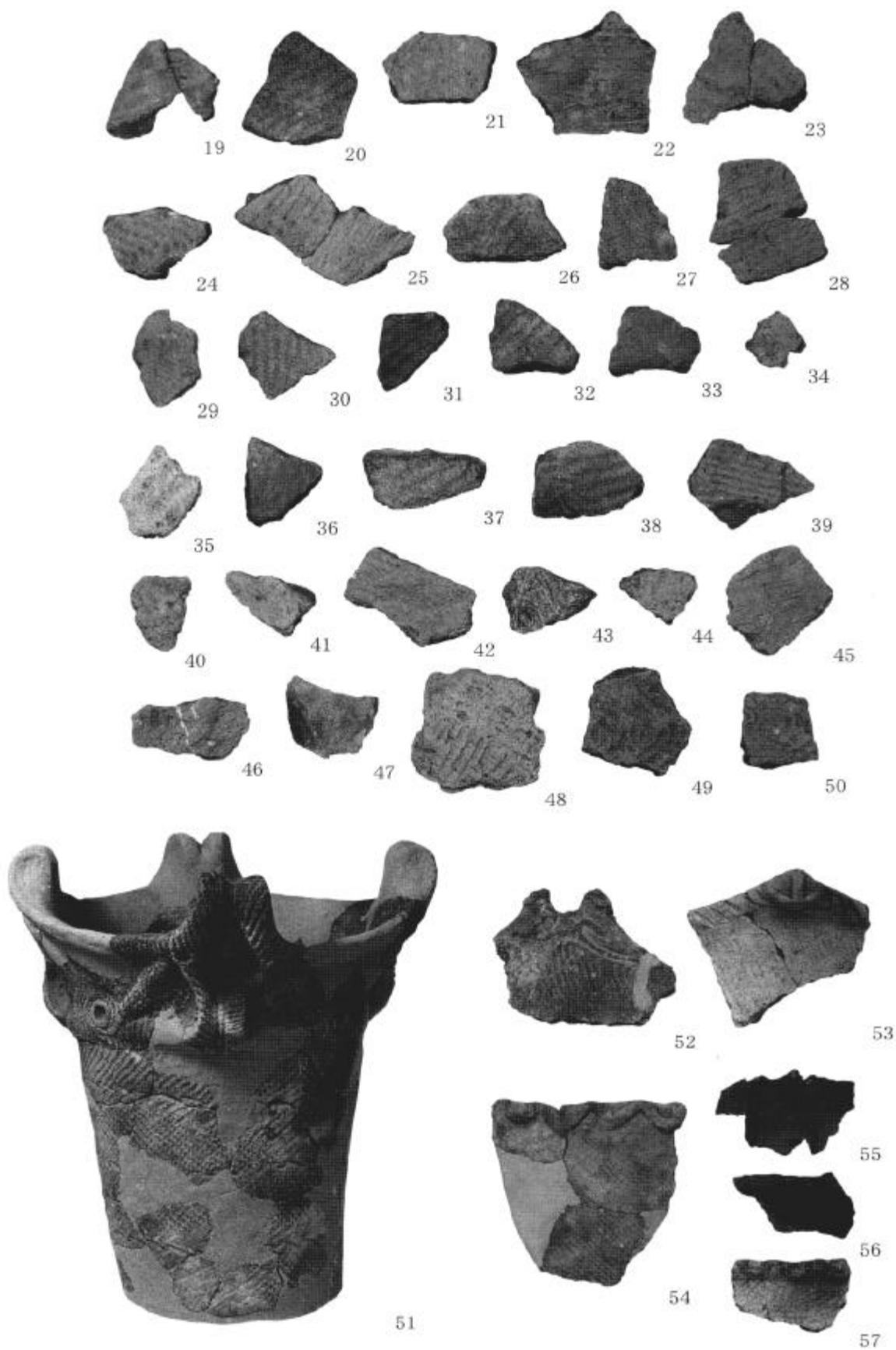


表裏縄文の土器 (裏面)

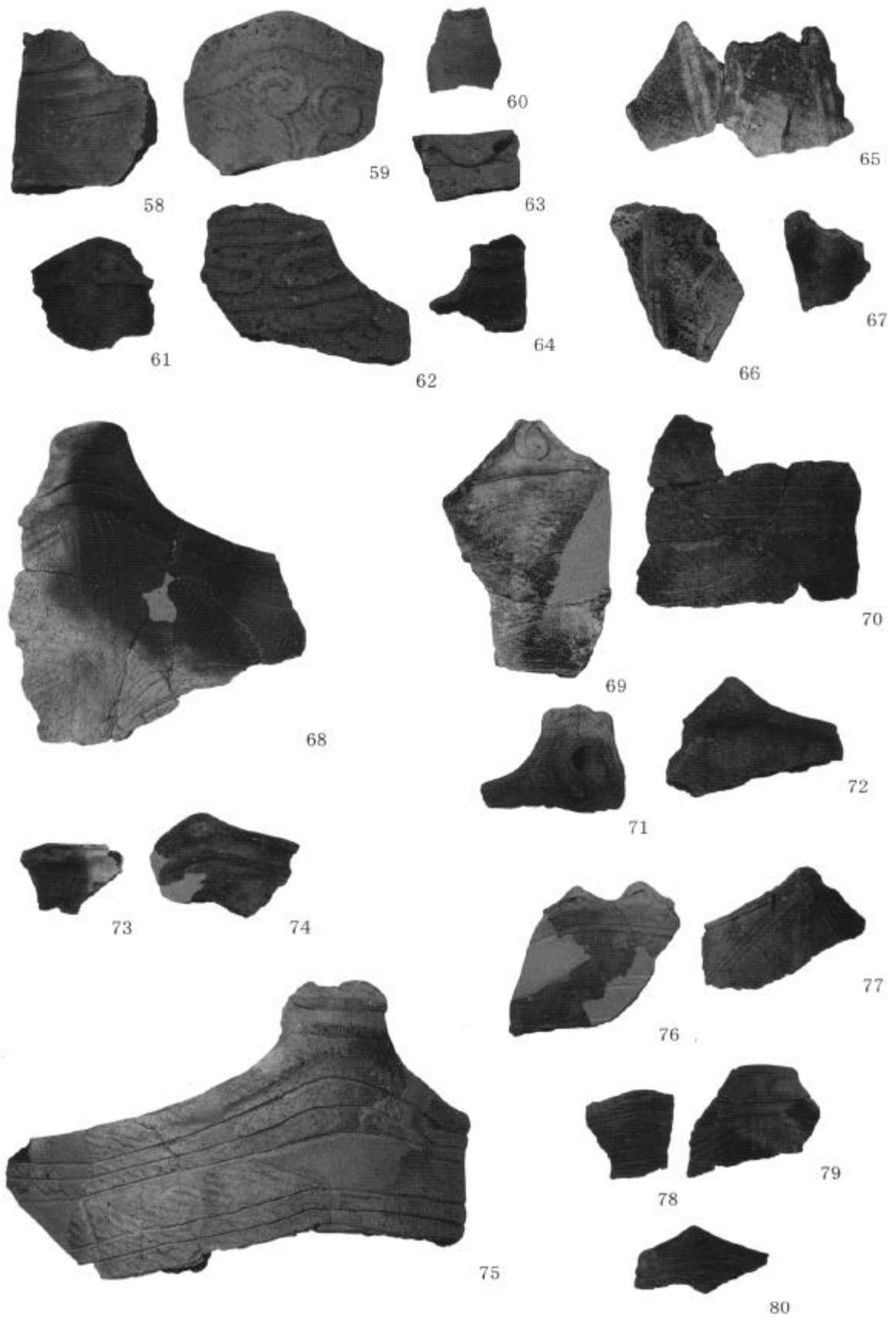


18

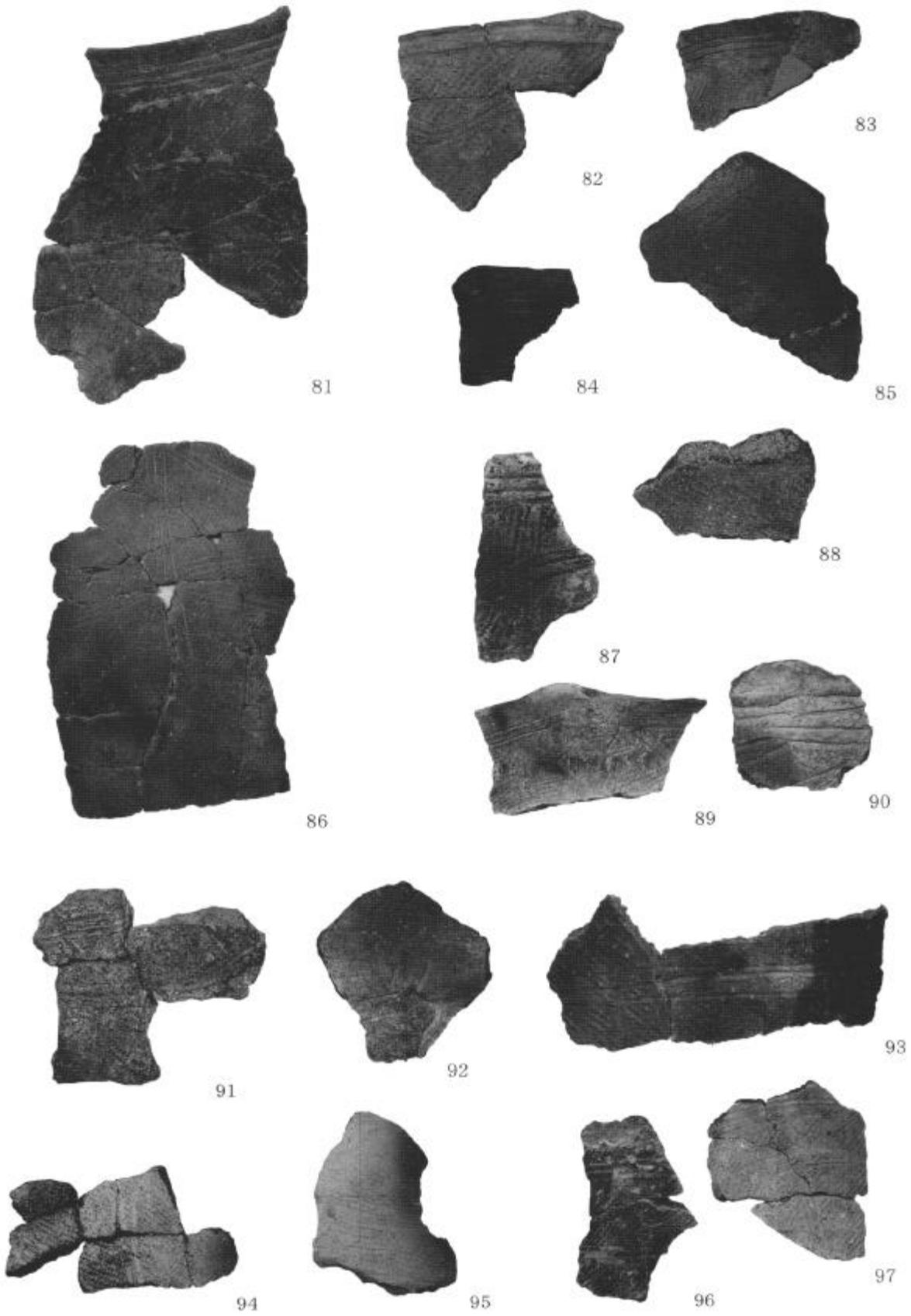
遺構外出土遺物 (1)



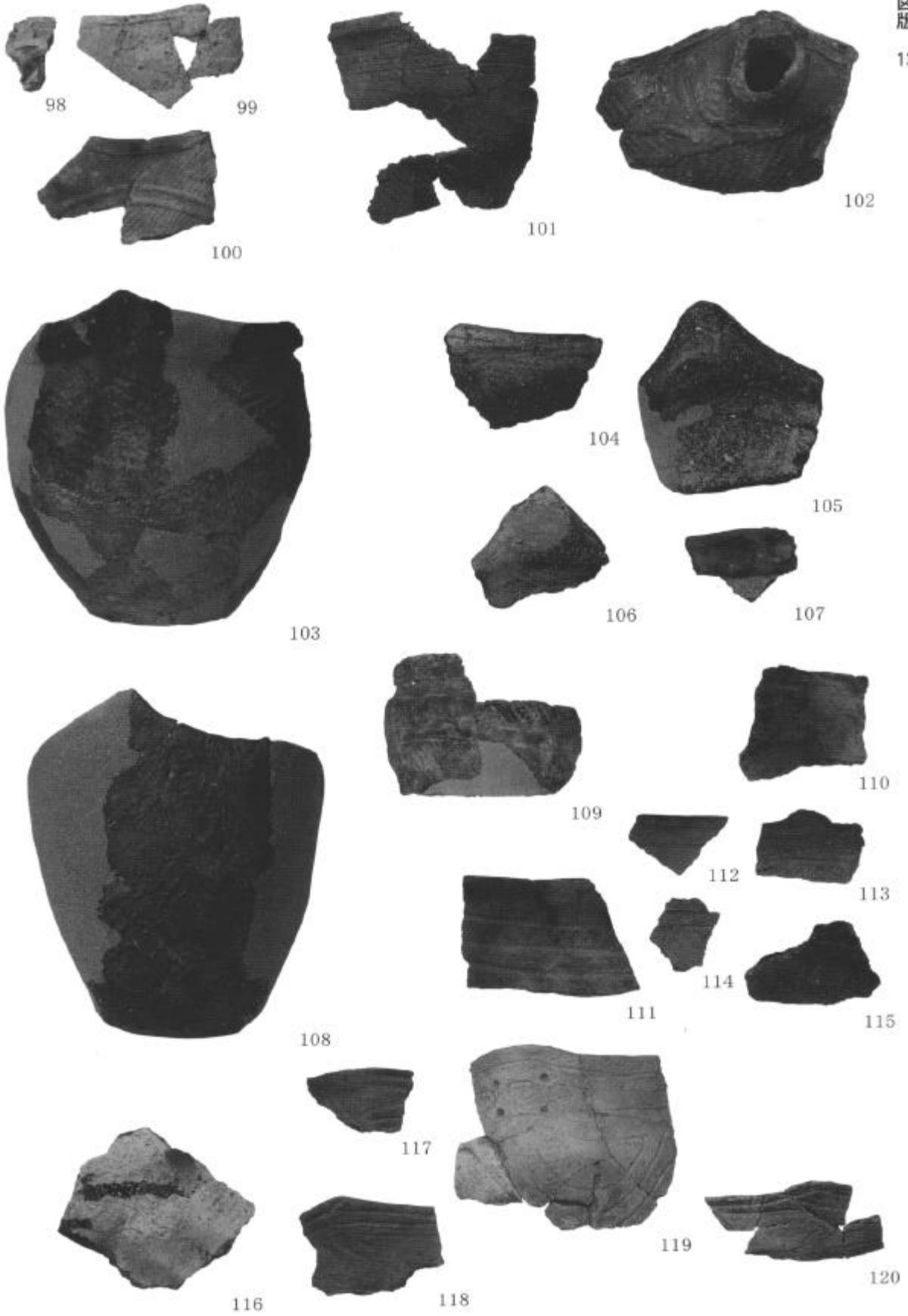
遺構外出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物(4)



遺構外出土遺物 (5)



121



122



123



124



129



125



126



127



128



130



131



132



133



134



135



136



137



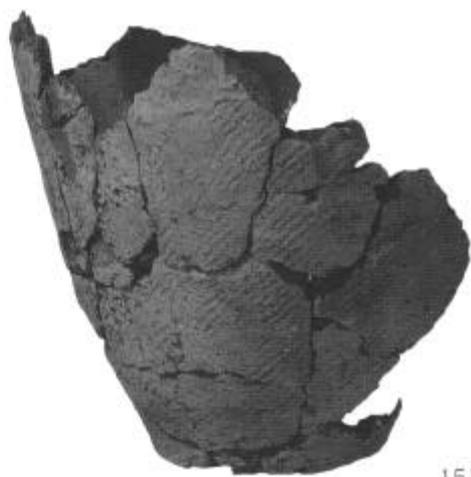
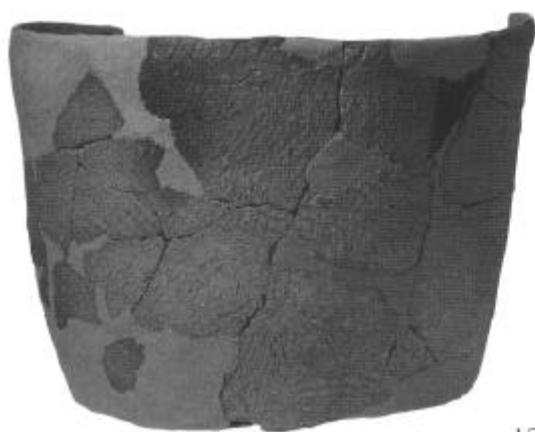
138



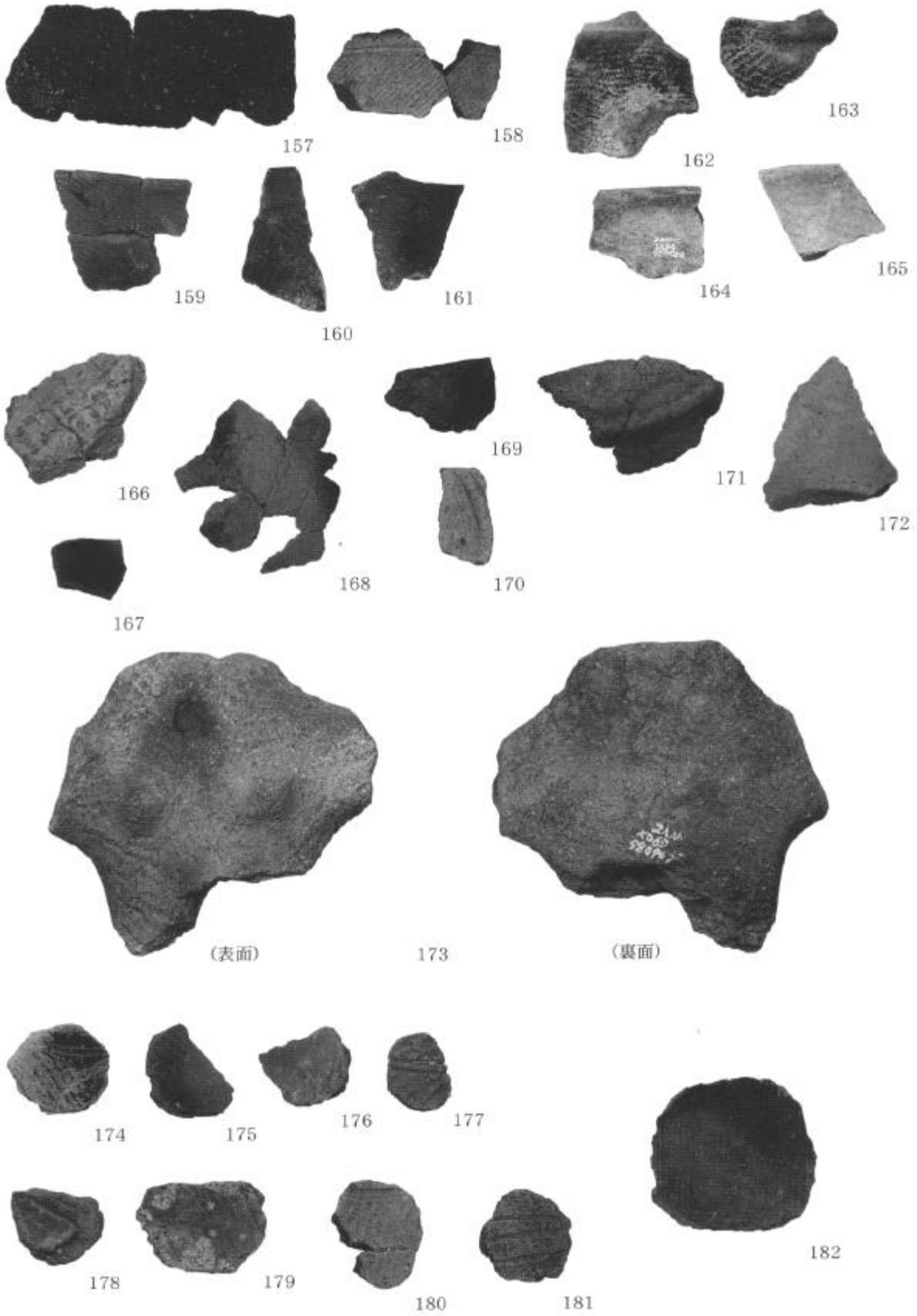
139



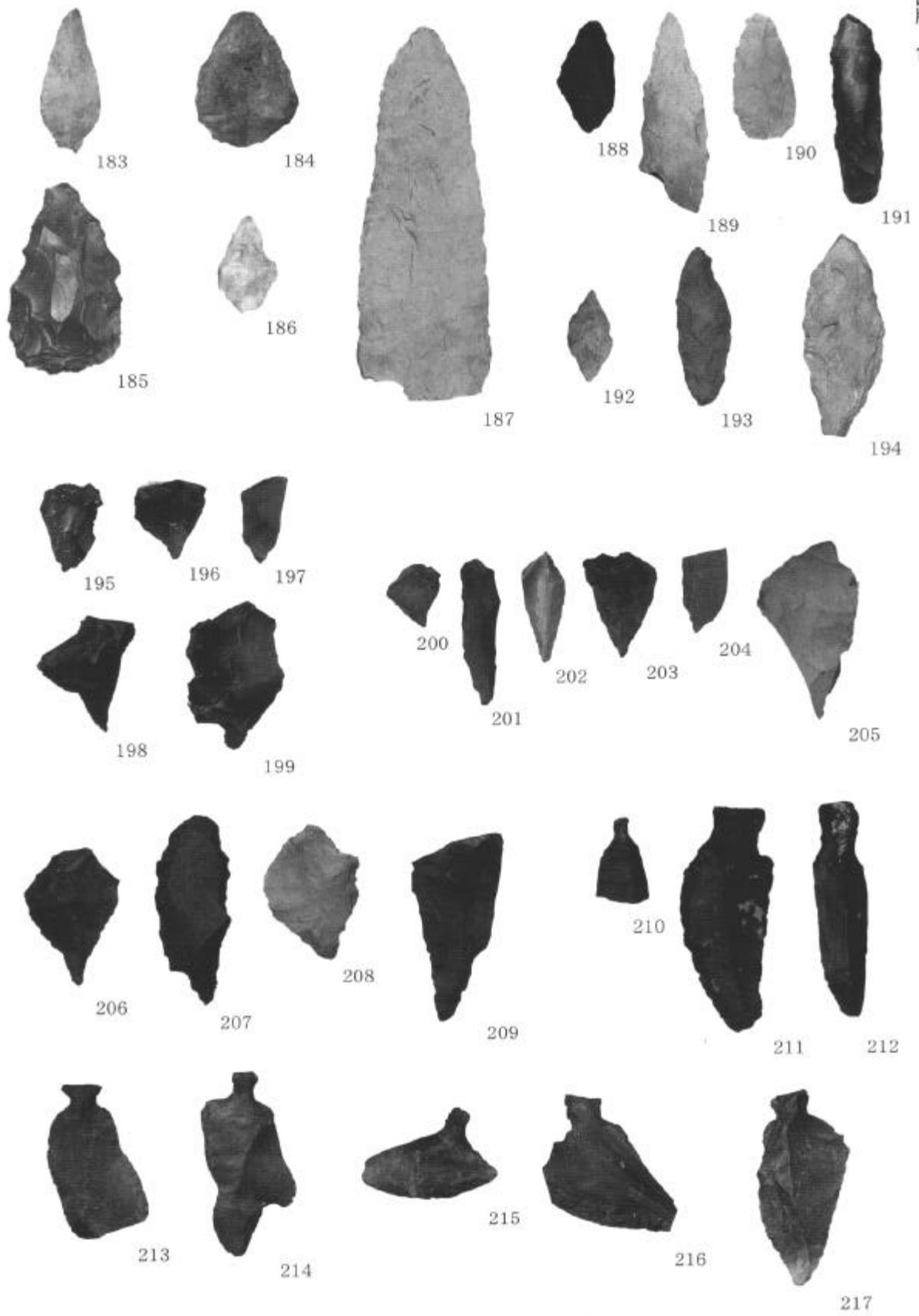
140



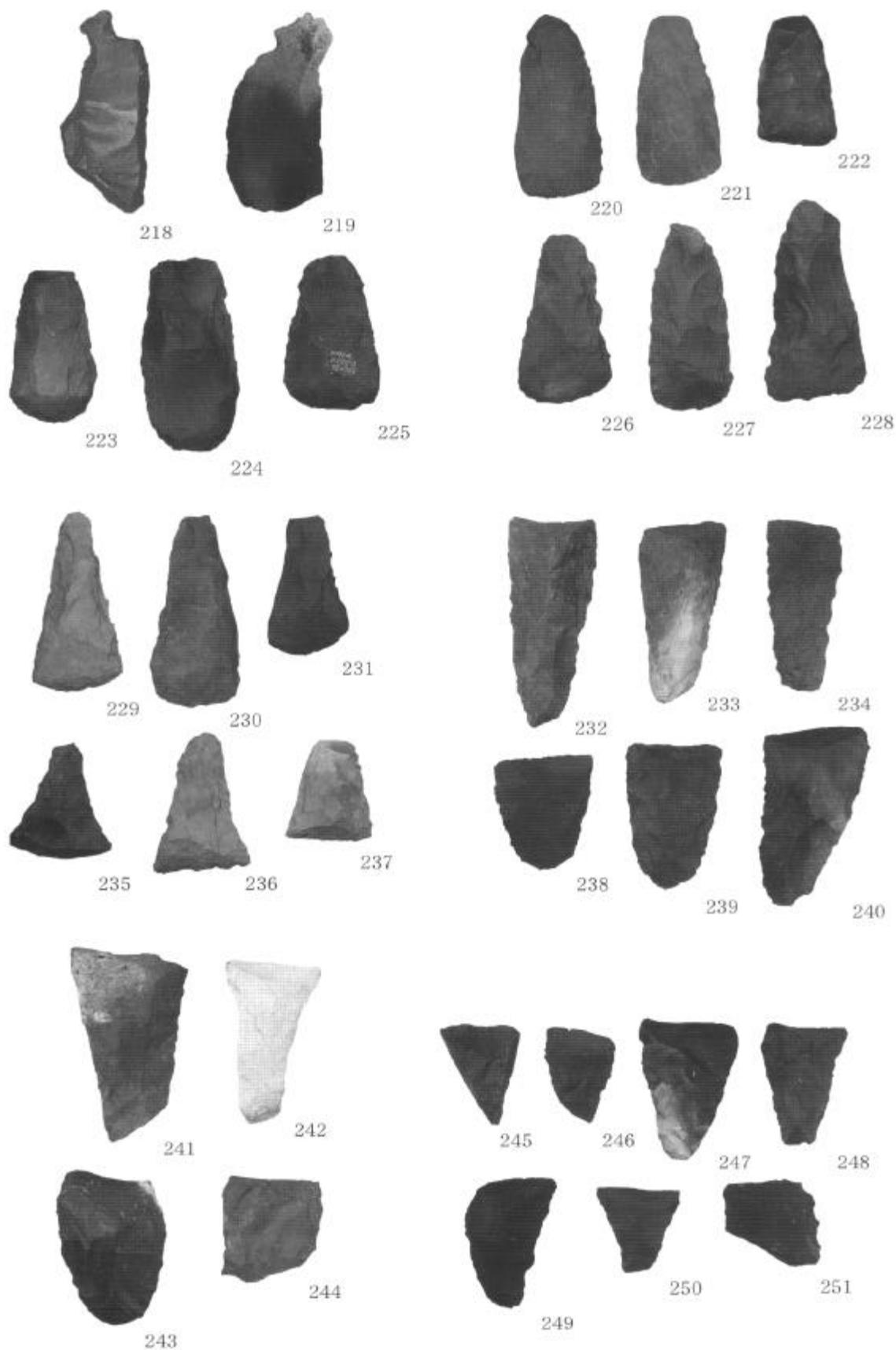
遺構外出土遺物 (7)



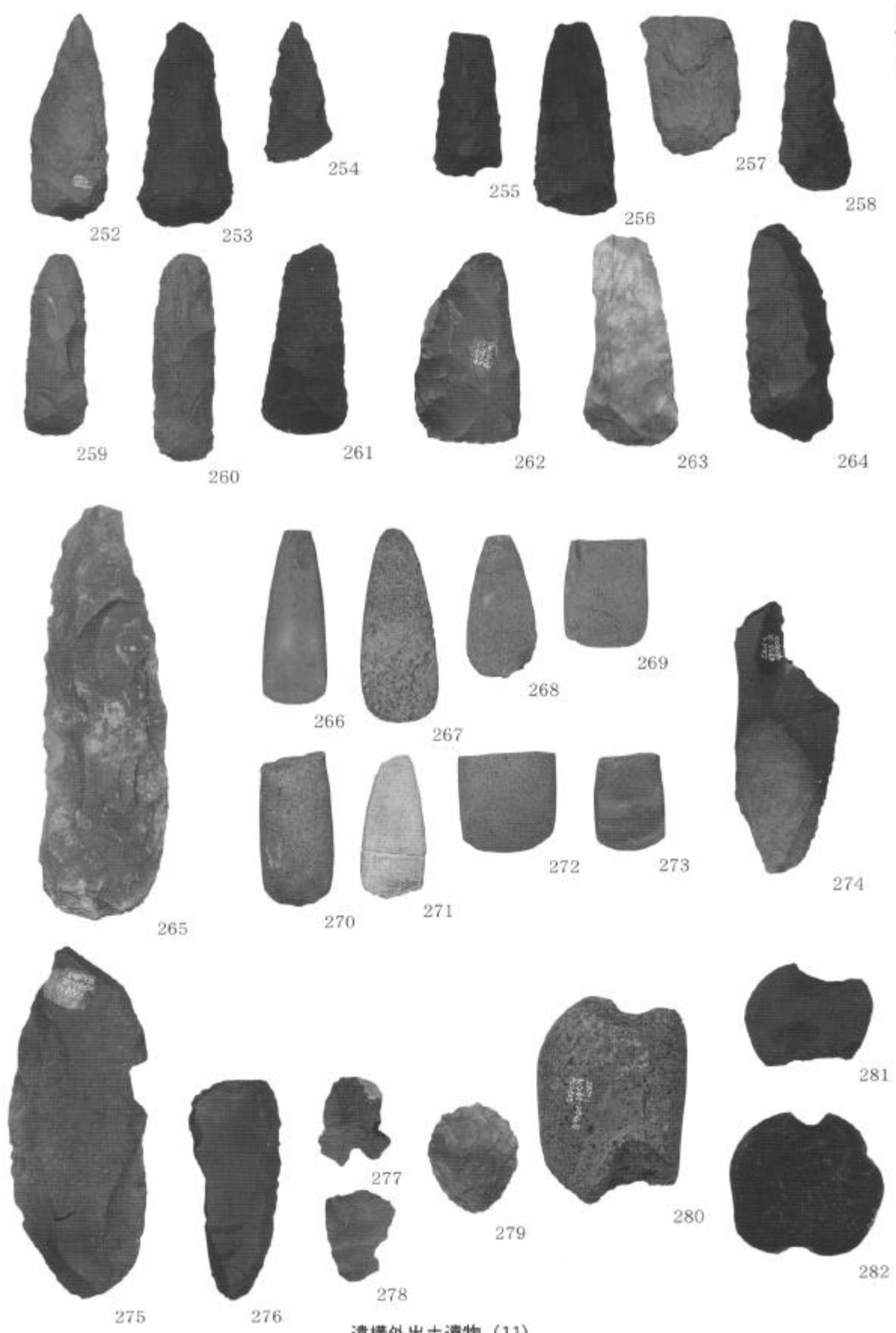
遺構外出土遺物 (8)



遺構外出土遺物 (9)



遺構外出土遺物 (10)



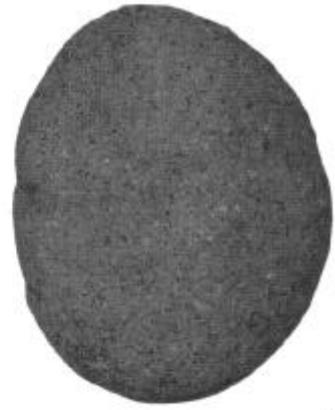
遺構外出土遺物 (11)



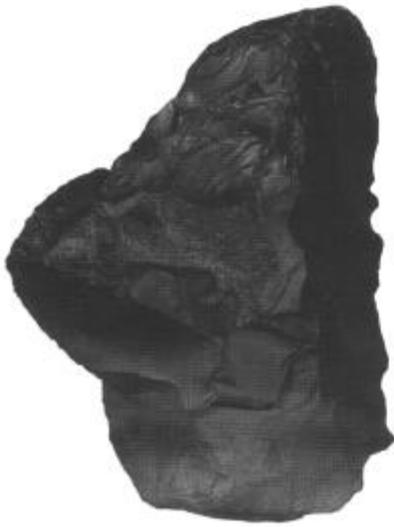
283



284



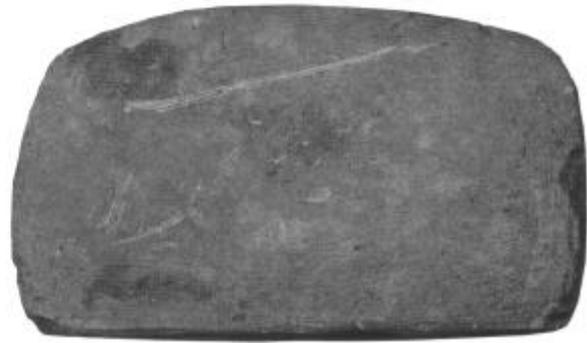
285



286



287



289



288



290



291

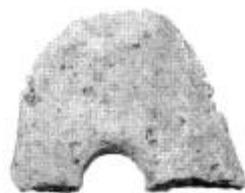


(表面)

292



(裏面)



(表面)

293



(裏面)



294



295



296



297



298



299



300



301



302



303



304



305



306

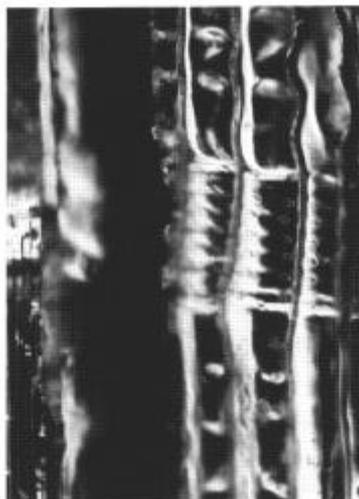


307

桐内C遺跡出土炭化材の顕微鏡写真I



横断面 ————— : 0.2mm
1.3 SN-23 RC(炭化材)



放射断面 ————— : 0.1mm
スギ



接線断面 ————— : 0.2mm



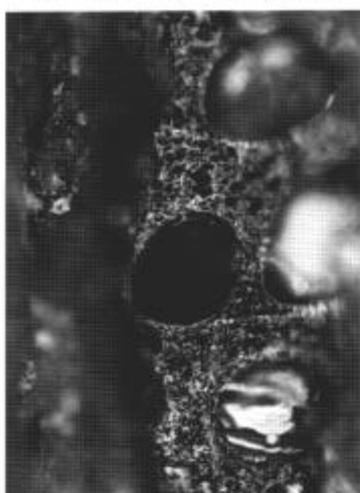
横断面 ————— : 0.4mm
2.4 SR-37 RC(炭化材)



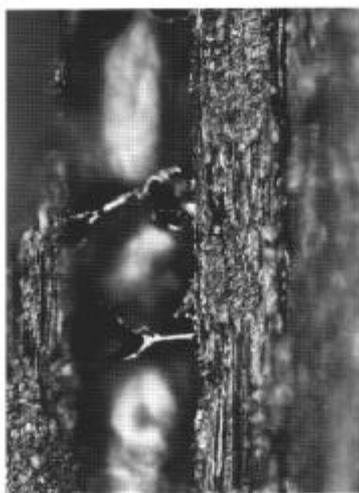
放射断面 ————— : 0.4mm
クリ



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
3.2 SQN-13 RC(炭化材)

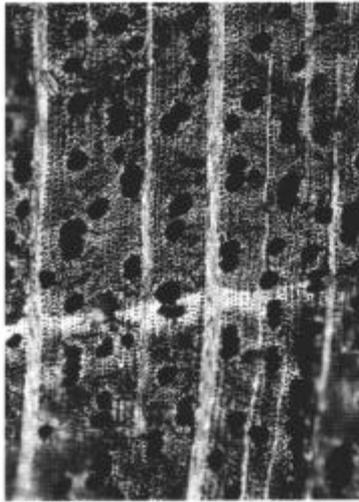


放射断面 ————— : 0.2mm
コナラ属コナラ節



接線断面 ————— : 0.2mm

出土炭化材顕微鏡写真(1)



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

4.1 S I - 36 R C (炭化材) カエデ属

報 告 書 抄 録

ふりがな	きりない いせき							
書名	桐内C遺跡							
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	河田弘幸							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きりない いせき 桐内C遺跡	あきたけんきたあきたぐんもりよし 秋田県北秋田郡森吉 まちなもりよしあざきりないいえのか 町森吉字桐内家ノ上 みた ミ岱11外	05323	—	40° 1' 55"	140° 27' 42"	19980512 ～ 19980924	14,000m ²	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
桐内C遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡 5 土坑 19 石囲炉 1 土器埋設遺構 4 焼土遺構 2 柱穴様ピット 4 性格不明遺構 1	縄文土器・石器 土製品・石製品	縄文時代早期末から晩期にかけての複合遺跡			

あ と が き

桐内C遺跡の発掘調査は、館の上遺跡とともに、平成10年度4月に設置された秋田北分室で行った初めての発掘調査でした。また、整理作業もすべて北分室で行われました。発掘調査から報告書の刊行までの間、森吉町教育委員会をはじめ、たくさんの方々より御助言・御支援をいただき心から御礼申し上げますとともに、発掘調査及び整理作業に携わっていただきました皆さんの芳名を記し、感謝の意を表します。

発掘調査に携わった皆さん

網干 五郎	安東 喜智郎	安東 豊作	石崎 ツナ	伊藤 則幸
織山 茂男	織山 フミ	柏木 アイ子	春日 千春	北林 広治
九島 スギ	九島 雄一	工藤 和彦	金 重三郎	金 タキ子
金 ミサ	斉藤 弘	桜庭 勝治	佐藤 アイ	佐藤 アヤ子
佐藤 喜代枝	佐藤 京子	佐藤 チギエ	佐藤 チヤ	佐藤 直二郎
佐藤 ミヨ子	沢口 アキ	庄司 喜代治	菅原 ワカ子	杉渕 スエ
鈴木 ミツエ	鈴木 ミヨ	武石 イク	武石 京	武石 竹五郎
高堰 保	高田 米治	高橋 サダエ	高橋 鉄五郎	田中 タマエ
土佐 トクエ	土佐 テツ	土佐 二市郎	永井 タエ子	萩野 真一
羽場 ナミエ	播磨 雄治	古倉 養次郎	藤島 喜美恵	藤原 ハナ
松橋 喜一	松浦 テツエ	松浦 ヒデ	松橋 仁一郎	若松 リツ子
三浦 江里子	三浦 古作	森川 ウメ	森川 トミノ	森川 リエ
山城 勇治	山田 ユリ	吉田 カヨ	吉田 喜代治	吉田 タミ
吉田 好美	吉田 ワカ	吉野 政男	涌坪 ハツエ	

整理作業に携わった皆さん

春日 千春	佐藤 英治	柴田 友喜	高田 光子	館山 光子
千葉 葉子	戸島 美華子	内藤 真須美	奈良 節子	成田 京子
成田 典子	畠山 交代	三浦 江里子	森川 留美子	山田 勇治

秋田県文化財調査報告書第299集

桐内C遺跡

— 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ —

印刷・発行	平成12年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行	秋 田 県 教 育 委 員 会 〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号 電話(018)860-3193
印 刷	株 式 会 社 縣 北 新 聞